



令和7年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進本部

(Citation)

神戸大学地域連携活動報告書, 2025年度(令和7年度):1-101

(Issue Date)

2026-07

(Resource Type)

report

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505086>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505086>



**令和 7 年度
神戸大学地域連携活動報告書**

神戸大学地域連携推進本部

はじめに

神戸大学地域連携推進本部は、地域をフィールドとして地域の課題解決に資する教育研究と、それを実践する活動に取り組んでいる教員や学生を支援し、大学の持つ知的資源の還元、専門性を活かした地域の発展の推進を目指し、3つの部門（組織連携推進部門、地域連携教育部門、ボランティア支援部門）から成る組織で地域連携事業を推進しております。

組織連携推進部門は、地域との連携活動に関する総合窓口を担い、自治体、企業との連携活動や学内公募事業の実施に取り組んでいます。本学は令和7年7月に明石市、令和7年12月に芦屋市、令和8年2月に豊岡市と包括的な連携協定を結びました。また、上郡町とは国際文化学研究科との部局協定締結の運びとなりました。さらに、法学研究科と洲本市およびNSKKホールディングスとのあいだで連携協力協定を締結しました。学内公募事業として、部局による組織的な地域連携活動を支援する「地域連携事業（組織型）」、教員、学生の地域連携活動を支援する「地域連携事業（個人型）」及び「学生地域アクションプラン」をそれぞれ募集しました。その結果、組織型では人文学研究科、保健学研究科、農学研究科、国際文化学研究科、海事科学研究科の地域連携センター、人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、経済経営研究所地域共創研究推進センター、法学研究科パブリック・コミュニケーション・センター、丹波篠山フィールドステーションに予算を配分しました。個人型では10部局、11名の教員を支援し、学生地域アクションプランでは9団体を支援しました。さらに、自治体委員会等への教員派遣の他、自治体等が実施する地域課題の解決を目的とした研究助成や補助金など、各種公募事業に関する学内周知を図っています。

地域連携教育部門は、地域連携に関する全学共通教育や地域連携活動を通じた地域創生に資する人材の育成を担い、COC＋事業の教育プログラムとして開発した全学共通教育科目「ひょうご神戸学」と「地域社会形成基礎論」をオンデマンド方式で開講し、令和7年度は延べ1,146人の学生が履修しました。

ボランティア支援部門は、ボランティアと社会貢献活動の活発化に向けた支援を担い、「学生ボランティアサポート」において登録ボランティア団体の活動支援、神戸大学基金「災害ボランティア活動経費助成」や「神戸大学生による能登半島地震 復旧・復興 災害ボランティア活動経費助成」による被災地における復旧・復興災害ボランティアの活動支援を行っております。また、全学共通教育科目「ボランティアと社会貢献活動（A・B）」を開講し、300人の学生が履修しました。さらに、ボランティア支援部門が主導して採択された大学都市神戸産官学プラットフォームのプロジェクト「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」には、本学を含む7大学2企業が参画し、地域防災事業を展開しております。

本報告書は、神戸大学における令和7年度の各部局の地域連携センター等の活動に加え、公募事業での教員や学生の意欲的な取り組みについてまとめたもので、本学の地域連携活動をご理解いただく一助になれば幸いです。今後とも本学の地域連携活動について、地域の皆様、関係者の皆様からご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

神戸大学地域連携推進本部

副本部長 和泉比佐子

目 次

はじめに

目 次

第Ⅰ章 地域連携推進本部活動報告(中扉) 1

地域連携推進本部

組織連携推進部門

地域連携教育部門

ボランティア支援部門

第Ⅱ章 学内公募事業活動報告(中扉)..... 17

地域連携事業(組織型) 18

人文学研究科地域連携センター：

地域歴史遺産の保全・活用事業

センター長／人文学研究科 教授 古市 晃

保健学研究科地域連携センター：

少子高齢社会に対応した街づくり事業

センター長／保健学研究科 教授 和泉 比佐子

農学研究科地域連携センター：

地域連携による食料・農業・農村の持続的発展支援事業

センター長／農学研究科 教授 中塚 雅也

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター：

持続可能な社会づくりをめざすプラットフォーム創成支援事業

センター長／人間発達環境学研究科 教授 松岡 広路

国際文化学研究科地域連携センター：

兵庫・関西を中心とする地域文化振興と社会的課題の解決

センター長／国際文化学研究科 教授 板倉 史明

海事科学研究科地域連携センター：

海事科学研究科一東灘区、神戸市との連携事業の推進

センター長／海事科学研究科 教授 堀口 知也

経済経営研究所地域共創研究推進センター：

地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進

センター長／経済経営研究所 教授 家森 信善

法学研究科 パブリック・コミュニケーション・センター：

地域連携に基づく「脱炭素化・地域課題解決」に向けた

複眼的教育と実践

法学研究科 教授 高橋 裕

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび

丹波篠山フィールドステーション：

農山村創成のための拠点形成と人材育成事業

地域連携推進本部 組織連携推進部門長 中塚 雅也

地域連携事業(個人型) 51

西神南団地 再生・活用プロジェクト

工学研究科 准教授 栗山 尚子

重度知的障害者の生涯学習プログラム「ボランの広場」

附属特別支援学校 校長 佐藤 知子

地域おこしに貢献する新規特産鶏肉の開発

農学研究科 教授 本田 和久

地域の健康を支える人材育成によるウェルビーイング向上事業

「医学部へ行くこうプロジェクト」(継続事業)

ウェルビーイング先端研究センター／保健学研究科

特命准教授 園田 悠馬

医療過疎化に向かう地域における公立病院活性化支援と

アカデミアンによる新たな地域医療支援モデルの創出

科学技術イノベーション研究科 教授 山下 智也

鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト

人間発達環境学研究科 アクティブエイジング研究センター

教授 原田 和弘

視る・聴く・読む・語る一

神戸の戦災アーカイブ・米軍資料から読み直す生活世界と

パブリックヒストリー構築の試み

国際文化学研究科 教授 長 志珠絵

学生イニシアティブで推進する体験型環境教育プログラム：

こども MBA(Mountain Based Activities)

経営学研究科 教授 松嶋 登

地域住民と学生による加圧式健診事業「よいとこ健診」の

持続的実施体制の構築

経済学研究科 准教授 山岡 淳

県内の医療機関・住民と連携した地域医療人材育成事業

医学研究科 地域医療教育学部門 特命教授 岡山 雅信

幼児教育の質向上に資する

神戸大学附属幼稚園カリキュラム開発研究センター事業

附属幼稚園 園長・副園長 田中 孝尚

学生地域アクションプラン 73

プロジェクト伊加利

～南あわじ伊加利地区におけるコミセン改修と町おこし～

建築サークル WOODiY

兵庫県北部地域の子ども達との笑顔いっぱい交流

神戸大学児童文化研究会

行政と連携し天然記念物の保全と指定を目指すための調査・啓発活動

神戸大学保全生態学研究会

地域の人々と学生の交流によって、

災害への理解と地域の繋がりを深める事業

神戸大学学生震災救援隊

音楽による社会包摂事業 神戸市内の発達支援施設に通う

子どもたちにおくるナツオトコンサート

神戸大アートマネジメント研究会

UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動

地域交流機会創出の会「なごおい」

「第23回 灘・夢ナリエ」あかりワークショップ活動

< TEAM NADA >

小学生への睡眠と運動に関する啓発活動

ぐっすり運動ラボ

灘駅周辺集合住宅の地域住民と学生の交流のきっかけとなる

地域に根ざしたお菓子作りやゲームを行うイベント

灘地域活動センター

学生ボランティアサポート経費助成(神戸大学基金) 91

全国各地の被災地での支援活動

神戸大学学生震災救援隊

灘チャレンジ2025

灘チャレンジ実行委員会

農業ボランティア及び黒枝豆の生産販売

神戸大学地域密着型サークルにしき恋

小児糖尿病サマーキャンプ2025

兵庫県小児糖尿病サマーキャンプボランティア／CNF

灘駅周辺の集合住宅で

高齢者はじめ地域の方々と学生の交流の場としてのお茶会活動

灘地域活動センター

灘区と東灘区を中心とした神戸市内の地域において、

未就園児から小学生を対象に現地学習やイベントを実施し、

社会的・文化的経験の場を提供する活動

神戸大学児童文化研究会

合唱文化の普及および演奏を通じた神戸の地域交流支援活動

神戸大学混声合唱団アポロン

学生による手話に関する情報発信・手話通訳ボランティア

手話サークルべんべん草

神戸、東北での語り継ぎおよび

能登半島地震復興支援ボランティア事業

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

「環境かるた」食品ロス ver. を用いた小学生への出前授業第三弾

環境サークル えこふる

みんなのまち健康プロジェクト

Kobe Med Connect

(所属・肩書は令和7年度のものです)

第Ⅰ章

地域連携推進本部 活動報告

組織連携推進部門

地域連携教育部門

ボランティア支援部門

神戸大学地域連携推進本部 令和7年度活動報告

1. 地域連携推進本部の概要

神戸大学地域連携推進本部は、自治体等と連携し、本学が有する人的・物的資源を活用することにより、個性豊かな地域社会の形成を支援するとともに地域の課題の解決を図り、地域の発展に貢献することを目的としている。令和3年10月には、本学の地域連携の更なる機能強化を目的として、地域連携推進室から地域連携推進本部に改組され、組織連携推進部門・地域連携教育部門・ボランティア支援部門の3部門が設置された。

組織連携推進部門は、自治体等の他組織との組織的連携の推進、神戸大学地域連携推進連絡協議会やひょうご神戸プラットフォームの運営、各種コンソーシアムとの連絡調整などの業務を、地域連携教育部門は、学内の地域連携センターなどとの連絡調整や、共通教育科目における地域連携教育の実施などの業務を、ボランティア支援部門は、学生及び学生団体などへのボランティア・社会貢献活動に関する支援、共通教育科目でのボランティア・社会貢献活動教育などの業務を行っている。

日々の運営については、月に2回の定例会議の実施により遂行し、本部の業務に関する重要事項を審議する際には各地域連携センター長などのメンバーからなる神戸大学地域連携推進本部運営委員会を適宜開催している。また本部に関する事務は、研究推進部連携推進課連携推進グループにおいて行っている。

以上の体制により、地域連携推進本部は、各部署の地域連携センター等と協力しながら、兵庫県、神戸市をはじめとする地方公共団体、企業、住民団体、地域住民、NPO等との連携を通じたグローバルな地域社会形成や、阪神・淡路大震災以降の安心・安全、健康の課題に応える異分野共創型の地域連携事業を展開している。

令和7年度は、コロナ禍以降途絶えていた学内の地域連携事業活動発表会を再開し、ニュースレター「地域・だいがく連携通信」の年2回発行を維持するとともに、ホームページのリニューアルやパンフレットを更新し、学内教員の地域連携事業事例集であるリソース集を新たに編集するなど本学教職員や学生団体による地域連携事業の発信にも努めた。今年度の特徴的な活動は下記の通りである。

＜地域連携事業活動発表会の開催～R7年度の特徴的な事業～＞

2026年3月3日（火）灘区役所にて今年度の地域連携事業活動発表会を開催した。神戸大学では、各分野の専門性を活かし、教職員や学生による多様な地域連携活動が行われている。本会は学内公募事業に採択された地域連携センター（組織型の取組）や教員（個人型の取組）、学生団体（学生地域アクションプランの取組）の活動を中心に、灘区内をはじめとする様々なフィールドで展開されている取組を共有し、地域住民や行政とともに大学が果たす地域での役割を考え、参加者相互の交流を通じ新たな連携の創出をはかる機会とするものである。

和泉比佐子・地域連携推進本部副本部長による開会の挨拶では、灘区との包括連携協定が21年目を迎えたこと、灘区長との懇談もふまえ、灘区役所での開催に至った経緯や、本会の趣旨についての説明があった。その後、岸上佳代・灘区長より来賓のご挨拶をいただき、日頃の地域連携活動への謝意や、行政側の学びと新たな連携創出への期待が述べられた。

続いて、山岡淳・経済学研究科准教授より「大学における地域連携の意義と可能性」と題して講演があった。山岡講演では、大学の地域連携に対する社会的要請の高まりや、学生の主体的・実践的学びの場としての教育的意義、仮説検証の場としての研究的意義とともに、大学生や地域社会双方の地域活動に対する潜在的意欲や能力を発揮する仕組みを構築する必要性が述べられた。

また、人文学・国際文化学・人間発達環境学・経済学・経営学・農学研究科などの教員の取組13件、学生団体の取組8件、神戸松蔭大学の取組1件の計22件の活動について、発表者数も多いことから1件1分程度のフラッシュ発表により紹介された。その後、ポスターセッション・交流会に移り、各取組のポスター前では発表者と参加者との間で活発な意見交換が行われた。今回は同じ灘区内で連携事業を行っている神戸



松蔭大学にもご発表いただき、大学間交流も行うことができた（発表団体や内容の詳細については、地域連携推進本部のウェブサイトを参照）。

閉会にあたり、奥村弘・地域連携推進本部長より挨拶があり、本学の地域連携の強みとして専門性や持続性についての指摘があり、多様なつながりの中で新たな価値創出につながることで、地域連携推進本部として今後も継続的に交流の場をもち、地域連携事業の支援を行うことについて言及があった。

コロナ禍もあり久しく途絶えていた本会であったが、今回は地域で活動を行う住民団体にも呼びかけたこともあり 96 名の参加を得た。「他団体の取組を知ることが出来た」、「様々なネットワークが広がった」などの意見もいただき有意義な会となった。今後も継続して発表会を開催する予定である。

2. 組織連携推進部門

今年度は、明石市・芦屋市・豊岡市との全学協定を締結し、年 1 件の KPI を大幅に超えることができた。また全学協定締結を契機に三田市で大学向け研究助成金为新設されるなど、協定締結自治体の増加とともに、連携事業のより一層の進展が見られた。詳細は下記の通りである。

1) 自治体等との連携事業の推進に関すること

①全学連携協定のある自治体・企業との連携事業の推進 ※（ ）内の数字は締結年度

＜兵庫県（県立美術館、県立高校含む）（2010）＞

・5/29 文化財課、6/6 計画課・地域振興課と打ち合わせ

【兵庫県立美術館】9/26 ワークショップ、1/7 打ち合わせ

【兵庫県立御影高等学校】課題研究社会科学セミナー指導助言（9/2、9/26、10/20、11/4、11/18）、発表会（12/2、1/6、3/20）

＜神戸市（2013）＞

・4/26,27 震災 30 年レジリエンスセッション調整、6/5 大学連携実務担当者会議参加、6/24 企画調整局政策課と打ち合わせ、6/25 福祉局と発達津田先生・稲原先生の授業内ワークショップにつき打ち合わせ、12/17 北神区役所打ち合わせ、2/1 西区地域協働課地域交流イベント（ENISHI MEETS 2026）参加

＜灘区（2004）＞

・4/7 広報連携につき打ち合わせ、4/18 地域協働局来学、9/19 消防局灘消防署、9/29 発達・近藤先生ヒアリング、9/30 地域協働課と打ち合わせ、10/2 区長と理事による懇談会、1/15 経済・山岡先生打ち合わせ、2/17 工学・栗山先生打ち合わせ

＜小野市（2004）＞

・10/7 今後の連携につき総合政策部等と協議@好古館、1/20 好古館・総合政策部と打ち合わせ、1/24 連携協定更新に関する合意書更新

＜朝来市（2010、旧生野町 2004）＞

・「朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言」（人文学研究科）

＜加西市（2009）＞

・男女共同参画審議会委員の推薦

＜丹波篠山市（2010）＞

・10/1 地域連携推進連絡協議会の開催@丹波篠山 FS、2/28 丹波篠山研究発表会開催、3/21 地域資料整理サポーター報告会共催

＜三木市（2013）＞

・新三木市史の刊行（人文学研究科地域連携センター）

＜大分県中津市（2016）＞

・中津市アーカイブズ講座への協力（8/26～30、3/16）、中津市歴史博物館協議会への参加（3/17）

＜三田市（2024）＞

・三田市大学間事務連絡会議（4/22,6/17）、6/17 移住定住促進課・公民連携推進課・社シス打ち合わせ、

7/18 工学中村先生打合せ

- ・人文との共同研究契約…7/30 打ち合わせ、九鬼家文書調査（8/8、10/8・9、12/8・11）

<姫路市（2024）>

- ・2/17 大学発まちづくり研究助成事業成果発表会への参加

<明石市（2025）>

- ・4/10 産官学共創課、5/1 道路整備課、6/13 発達北野先生・村瀬先生・産官学共創課・市民とつながる課打ち合わせ、7/28 包括連携協定式、8/24 タウンミーティングへの参加

<芦屋市（2025）>

- ・打ち合わせ（10/6 経済・衣笠先生、10/21 都市安・近藤先生、10/27 市役所、10/30 海事・石黒先生、1/8）、12/25 包括連携協定締結式

<豊岡市（2025）>

- ・5/27 保健・観光分野打ち合わせ、7/4 園田・辛島両先生打ち合わせ、7/23 人文平井先生ヒアリング・市と協定につき打ち合わせ、10/22 市役所訪問（経営企画課・健康増進課）、2/2 理事レク、2/4 包括連携協定締結式

<㈱神戸新聞社（2014）>

- ・8/7 懇談会、3/30 包括連携協定先自治体との連携事業につき打ち合わせ

<㈱サンテレビジョン（2021）>

- ・サンテレビアンケート（サンテレビ×ホンネ POST）への協力
- ・震災文庫等と震災動画の公開に関する研究会（人文学研究科）

<㈱ラジオ関西（2023）>

- ・「神戸大学夢☆ラボ」放送（毎週日曜 8:45 ～ 9:00）…計 26 回放送。藤澤正人学長を含む教員 25 名、学生 1 名が出演。

②神戸大学地域連携推進連絡協議会の開催

- ・10/1 令和 7 年度丹波篠山市・神戸大学地域連携推進協議会の開催@神戸大学

③各種プラットフォームの運営、参画

a. （一社）大学コンソーシアムひょうご神戸

- ・理事会への参加（学長等）…4/30、5/7、5/28、6/11（兼定時総会）、7/30、10/27、1/30、3/26
- ・学生交流委員会への委員派遣…4/24、9/3、11/21、2/9、3/27
- ・ひょうご産官学連携協議会への参加…8/22、10/28、3/27
- ・その他

第 22 回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラムへの参加…8/30（学長等）

b. 地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム（COC+ 事業による設立）

- ・3/1 園田学園大学×神戸大学歴史文化領域シンポジウム「地域歴史遺産としての怪異・妖怪伝承」共催、3/3 プラットフォーム連絡会@灘区役所（ハイブリッド）開催

c. （一社）大学都市神戸産官学プラットフォーム

- ・「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」プロジェクト採択（神戸大学がリーダー校）
「つながりから広がる、地域防災の未来セミナー」開催（7/19、11/30、2/11）
「企業・大学防災セミナー」開催（10/17、11/30）（詳細は 15 ページ）

d. ひょうご創成研鑽会@兵庫ダイハツ（2025 年度より）

- ・打ち合わせ（7/31、2/24、3/9）、ひょうご創成研鑽会への参加（8/6、9/19、10/16）、3/19 中間報告会（松下コメント）

④新規に地域連携協定を締結した部局への支援

a. 国際文化科学研究科と上郡町

- ・11/24 連携協定締結、地域映像デジタル化プロジェクト・上映会

b. 法学研究科と洲本市、(株)NSKK ホールディングス

- ・2/16 三者連携協定締結

2) 本学における地域連携の組織的な取組への支援に関すること

①各研究科地域連携センター等が行う地域連携事業への支援

各研究科地域連携センター等が行う事業の統括や、今後の事業展開に関する相談、調整、事業の後方支援を行った。自治体等から当本部に寄せられる要望などに対し、各地域連携センター等に繋ぎ調整することで、大学全体の地域連携を推進した。

②学内公募事業の実施

本部では、地域連携の組織的な取り組みを全学に広げることを目的として、各研究科の地域連携センター等への予算配分をR5年度より公募制に改め、新たに「地域連携事業（組織型）」を導入している。その結果、下記の地域連携センター等に予算を配分した。

また、教職員や学生が行う地域活性化に資する新たな取り組みを支援する「地域連携事業（個人型）」と「学生地域アクションプラン」を実施した。なお、従前は、既存の地域連携センター等を有する4研究科に配置された教員は「地域連携事業」に応募できなかったが、R5年度以降「地域連携事業（組織型）」の創設に伴って、全部局の教職員が「地域連携事業（個人型）」に応募できるよう改めている。

a. 地域連携事業（組織型）（全部局対象）

人文学研究科地域連携センター	地域歴史遺産の保全・活用事業
保健学研究科地域連携センター	少子高齢社会に対応した街づくり事業
農学研究科地域連携センター	地域連携による食料・農業・農村の持続的発展支援事業
人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター	持続可能な社会づくりをめざすプラットフォーム創成支援事業
丹波篠山フィールドステーション（地域連携推進本部）	農山村創成のための拠点形成と人材育成事業
国際文化科学研究科地域連携センター	兵庫・関西を中心とする地域文化振興と社会的課題の解決
海事科学研究科地域連携センター	海事科学研究科－東灘区、神戸市との連携事業の推進
経済経営研究所地域共創研究推進センター	地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進
法学研究科パブリック・コミュニケーション・センター	地域連携に基づく「脱炭素化・地域課題解決」に向けた複眼的教育と実践

b. 地域連携事業（個人型）（教職員対象）

工学研究科	西神南団地再生・活用プロジェクト
附属学校部	重度知的障害者の生涯学習プログラム「ポランの広場」
農学研究科	地域おこしに貢献する新規特産鶏肉の開発
保健学研究科	地域の健康を支える人材育成によるウェルビーイング向上事業「医学部へ行こうプロジェクト」（継続事業）
科学技術イノベーション研究科	医療過疎化に向かう地域における公立病院活性化支援とアカデミアンによる新たな地域医療支援モデルの創出
人間発達環境学研究科	鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト
国際文化科学研究科	視る・聴く・読む・語る－神戸の戦災アーカイブ・米軍資料から読み直す生活世界とパブリックヒストリー構築の試み
経営学研究科	学生イニシアティブで推進する体験型環境教育プログラム：こどもMBA(Mountain Based Activities)
経済学研究科	地域住民と学生による加圧式健診事業「よいとこ健診」の持続的実施体制の構築
医学研究科	県内の医療機関・住民と連携した地域医療人材育成事業
附属学校部	幼児教育の質向上に資する神戸大学附属幼稚園カリキュラム開発研究センター事業

c. 学生地域アクションプラン（学生対象）

建築サークル WOODiY	プロジェクト伊加利 ～南あわじ伊加利地区におけるコミセン改修と町おこし～
児童文化研究会	兵庫県北部地域の子ども達との笑顔いっぱいの交流
神戸大学保全生態学研究会	行政と連携し天然記念物の保全と指定を目指すための調査・啓発活動
神戸大学学生震災救援隊	地域の人々と学生の交流によって、災害への理解と地域の繋がりを深める事業
神戸大アートマネジメント研究会	音楽による社会包摂事業神戸市内の発達支援施設に通う 子どもたちにおくるナツオトコンサート
地域交流機会創出の会「なごおい」	UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動
神戸大学＜TEAM NADA＞	「灘・夢ナリエ 2025」ワークショップ活動
ぐっすり運動ラボ	小学生への睡眠と運動に関する啓発活動
灘地域活動センター	灘駅周辺集合住宅の地域住民と学生の交流のきっかけとなる 地域に根ざしたお菓子作りやゲームを行うイベント

③地域連携事業に関する自治体補助金の周知、申請取りまとめ

a.KOBE ゼロカーボン支援補助金（神戸市環境局脱炭素推進課）

2050 年ゼロカーボンの実現に向け、神戸の脱炭素と地域貢献の取組みにチャレンジする神戸市民、神戸で活動する団体、法人などを応援するため創設した「KOBE ゼロカーボン支援補助金」において、本学の学生が 2 件採択された。

農学研究科	地球温暖化対策の概要と神戸大学農学部での取り組みについての紹介
農学研究科	インスタグラムを用いた神戸市里山材の流通促進に向けた周知活動

b. 大学発まちづくり研究助成事業（姫路市政策局高等教育室）

姫路市の政策や課題について提案を行う研究や、フィールドワークを中心とした姫路市のまちづくりに関して提案等を行う研究等を対象に、姫路市が支援を行う「大学発まちづくり研究助成事業」において、本学教員の研究が 1 件採択された。

農学研究科	スギ人工林の再造林・広葉樹林化に関する研究 – 早生樹センダンの生理学的研究 –
-------	--

c. 姫路市人材確保・育成支援事業（農林水産環境局農林水産部林産振興課）

市内で行われる森林整備、育成、造林事業を支援することにより姫路市における林業経営の安定及び林業の振興に資するとともに、森林が有する環境保全機能、災害防止機能その他の公益的機能の増進を図るために、姫路市が支援を行う「姫路市人材確保・育成支援事業」において、本学教員の研究が 1 件採択された。

農学研究科	Lidar 測量データに基づく人工林の持続的管理法分析
-------	-----------------------------

d. 地域×大学×企業のひょうご絆プロジェクト（兵庫県企画部地域振興課）

持続可能な生活圏の形成を目指し、地域の活動団体が大学と企業等と連携して取り組む地域づくり活動に要する経費の一部を兵庫県が助成する「地域×大学×企業のひょうご絆プロジェクト」において、本学の教員の研究が 1 件採択された。

農学研究科	「おおじみそ」を核とした地域・学生の交流活動やブランドづくり
-------	--------------------------------

e. 三田市産官学連携推進事業（総合政策部公民連携推進課）

三田市が抱える地域課題等の解決につながる可能性のある研究又は三田市の持続可能な発展を推進する研究を対象に、三田市が支援を行う「三田市産官学連携推進事業」において、本学教員の研究が 3 件採択された。

保健学研究科	心疾患患者における視覚機能支援に関する研究
保健学研究科	メタバースを活用した持続可能な医療人材育成事業の構築
社会システムイノベーションセンター	アンケート・ヒアリング調査に基づく、テレワーク移住と定住を促す市の具体策の提言

3) 本学における地域との窓口としての連絡、調整に関すること

①自治体委員会等への教員派遣・推薦

- ・地域連携推進本部教員の派遣…大阪府防災会議委員、箕面市文化財保護審議会、高砂市文化財審議委員会委員、猪名川町文化財審議委員会委員、宍粟市文化財保存活用地域計画協議会委員、たつの市文化財保存活用地域計画協議会委員、三木市行政不服審査委員会委員、ひめじ防災マイスター認定講座講師、大分県中津市歴史博物館協議会委員、中津市アーカイブズ講座講師
- ・その他部局教員の推薦…加西市男女共同参画審議会委員

②自治体等主催事業への学生派遣・学内周知等の協力（147件対応）

③自治体、企業等からの相談対応

<丹波市>

- ・全学協定に向けた打ち合わせ（10/10、2/5、3/11）、人文学研究科「丹波志を読む」会への協力（5/24、7/30、10/25）、「見る知る学ぶ丹波の歴史」講座への協力（10/26）

<宝塚市>

- ・10/8 人文・跡部先生、井上先生から（一社）「雲雀丘安田邸プロジェクト」の連携依頼、10/23 担当者と打ち合わせ

<神姫バス(株)>

- ・5/22 打合せ（連携協定に向けて）
- ・6/16 神姫バスより連携テーマ案提供

<(株)W>

- ・11/7 校友会との事業につき打ち合わせ、3/26 観光庁事業打ち合わせ

<鶴甲まちづくり協議会>

- ・5/19 打ち合わせ

3. 地域連携教育部門

1) COC + 事業に関する「地域の元気づくり教育プログラム」の実施

文部科学省公募事業「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、兵庫県では本学が申請大学となり、「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択（H27～R1）。

大学からは兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園大学が、自治体からは兵庫県・神戸市が、産業界からは神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社が参画し、一体となってプラットフォームを構築し、地域の課題解決に資する人材育成と若者の地元定着を目的とした事業を採択期間終了後も継続して展開している。

①「地域の元気づくり教育プログラム」の実施 ※オンデマンド型（一部対面授業）

COC+ 事業の教育プログラムとして全学共通教育科目の中で、ひょうご神戸学（1単位）・地域社会形成基礎論（1単位）を H29 年度より開講し、事業終了後も継続開講するとともに、本学の地域理解に関連する教育プログラムの体系化、学内・学外の教育環境を整備。いずれの授業も履修定員 300 名に対し、神戸学 2280 名、基礎論 1717 名の希望者がおり、近年の学生の地域創生に対する興味関心の高さがうかがえた。

登録者数 (取除く)	文	法	経済	経営	理	医	保健	工	農	国人	海洋	計
神戸学第 2Q	10	17	39	23	18	9	8	79	27	50	18	298
基礎論第 2Q	7	25	54	31	10	21	2	74	14	44	17	299
神戸学第 3Q	8	23	40	35	10	11	12	58	15	55	27	294
基礎論第 3Q	5	16	53	48	10	5	6	70	15	52	17	297

・「ひょうご神戸学」(月曜5限、第2・第3Q開講)

地域で活躍できる人材、地元ひょうご・神戸において地域の担い手となる人材の育成を目的とし、ひょうご・神戸地域に関する、経済・地理・歴史・戦災・災害などの基礎的知識についての講義

・地域社会形成基礎論(木曜5限、第2・第3Q開講)

現在、地域が直面している課題について多角的に理解し、地域社会形成の意義や、そのための取り組みについての知識を得ることを目的とした、農業・経済・医療福祉・環境・福祉・歴史文化・災害・法律・ソーシャルビジネス・キャリアデザインなどの各分野からなる、地域社会形成についての講義

2025年度ひょうご神戸学(月曜5限)担当予定表

	第2Q	テーマ	敬称略	敬称略	所属・肩書
			担当		
1	6月9日	兵庫県・神戸市の歴史	松下正和	地域連携推進本部特命教授	
2	6月16日	経済から見る兵庫・神戸のあゆみ	山地秀俊	元神戸大学経済経営研究所教授	
3	6月23日	兵庫県・神戸市の農業	田中丸治哉	神戸大学名誉教授	
4	6月30日	兵庫県の現在	原晃	兵庫県企画部計画課課長	
5	7月7日	神戸市の現状と未来の姿	藤岡健	大学都市神戸産官学プラットフォーム事務局長	
6	7月14日	兵庫県・神戸市の地理	菊地真	人文学研究科准教授	
7	7月28日	兵庫県の災害と戦災	佐々木和子	人文学研究科地域連携センター研究員	
8	8月4日	地域文化からみる神戸	山地久美子	地域連携推進本部特命准教授	

	第3Q	テーマ	敬称略	敬称略	所属・肩書
			担当		
1	10月6日	兵庫県・神戸市の歴史	奥村弘	神戸大学理事・副学長	
2	10月15日(水)	地域歴史遺産の保全と活用	井上舞	人文学研究科特命講師	
3	10月20日	経済から見る兵庫・神戸のあゆみ	衣笠智子	経済学研究科教授	
4	10月27日	兵庫県の現在	原晃	兵庫県企画部計画課課長	
5	11月6日(木)	神戸市の現状と未来の姿	藤岡健	大学都市神戸産官学プラットフォーム事務局長	
6	11月10日	神戸から見えてくる新しい日本映画史	板倉史明	国際文化学研究科教授	
7	11月17日	兵庫県の災害と震災	水本有香	神戸学院大学現代社会学部教授	
8	12月1日	兵庫県の地域課題 地元メディアの視点から	黒田浩二	神戸新聞社経営企画局経営企画部次長	

2025年度地域社会形成基礎論(木曜5限)担当予定表

	第2Q	テーマ	敬称略	敬称略	所属・肩書
			担当		
1	6月12日	現代日本の地域課題	奥村弘	神戸大学理事・副学長	
2	6月19日	地域医療・福祉の課題	高田哲	神戸市総合療育センター診療所長	
3	6月26日	事業者・大学・地域との連携	坪田卓巳	元灘区地域活動支援コーディネーター	
4	7月3日	災害と地域	北後明彦	都市安全研究センター特別研究員・名誉教授	
5	7月10日	観光と地域	辛島理人	国際文化学研究科准教授	
6	7月17日	地域経済の課題と地域づくり	中塚雅也	農学研究科教授	
7	7月24日	文化から見る現代の地域社会	山地久美子	地域連携推進本部特命准教授	
8	7月31日	地域活動とキャリアデザイン	田中美恵	キャリアセンター政策研究職員	

	第3Q	テーマ	敬称略	敬称略	所属
			担当		
1	10月2日	地域歴史文化の課題	松下正和	地域連携推進本部特命教授	
2	10月9日	自然と共生した地域づくりにおける課題	清野未恵子	人間発達環境学研究科准教授	
3	10月16日	地域医療・福祉の課題	内田智子	保健学研究科助教	
4	10月23日	事業者・大学・地域との連携(対面WS@B210)	坪田卓巳	元灘区地域活動支援コーディネーター	
5	10月30日	レジリエンスと価値	鶴田宏樹	バリュースクール准教授	
6	11月13日	災害復興と地域	近藤民代	都市安全研究センター教授	
7	11月20日	地域金融と中小企業支援	家森信善	経済経営研究所教授	
8	11月27日	地域活動とキャリアデザイン	田中美恵	キャリアセンター政策研究職員	

・学生の感想・意見(R7年度第2Q、BEEF+内アンケートより一部抜粋)

プラス評価…知識獲得、地理解の深化、歴史的・社会的背景の学び、個人的な気づき・成長、オンライン形式という授業形態

改善点・要望…「似通った内容が多い」「財政、神戸市に住む人の職種や収入、子どもの居場所づくりや教育、各地域の歴史を学ぶ授業」を受講してみたい

・授業の総合評価(うりポーネット内)

「有益」「どちらかといえば有益」がひょうご神戸学で8割以上、地域社会形成基礎論で7割以上であった。

②テキストの活用、本教育プログラムの周知と展開

・COC+事業の成果をまとめたテキスト『地域づくりの基礎知識1～5』(神戸大学出版会)のR7年度売上げ(R8年3月末メ)が41冊(計3,070冊)あり、授業で活用するとともに本教育プログラムの全国的普及に努めた。

・国際的港湾都市・神戸市をはじめとする地方公共団体・企業・地域住民等との連携を通じたグローバルな地域社会形成や、阪神・淡路大震災以降の安心・安全、健康の課題に応える異分野共創型の研究をまとめた叢書の刊行を目指すべく、新テキスト『地域づくりの基礎知識6 地域連携の理論と実践』の編集を開始した。なお、このテキストは、地域連携推進本部教員が行う授業(ひょうご神戸学、地域社会形成基礎論など)で使用可能なものになるよう構成し、R8年度中に神戸大学出版会より刊行予定である。

③ COC+ プラットフォーム関連の会議、行事の開催

a. 「歴史と文化領域」シンポジウム（園田学園大学主催、地域連携推進本部共催）

2026年3月1日に「地域歴史遺産としての怪異・妖怪伝承」が園田学園大学にて開催された。大江篤園田学園大学学長の挨拶・基調講演の後、パネリストとして井上舞人文学研究科特命講師が「福崎町の『妖怪』まちづくり、と柳田國男」と題して報告を行った。奥村弘地域連携推進本部長より閉会の挨拶があり会は終了した。



b. ひょうご神戸プラットフォーム連絡会の開催

神戸大学その他、兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園大学、兵庫県・神戸市、神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社をメンバーとする「ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を2026年3月3日に開催した。冒頭の奥村弘・地域連携推進本部長による開会の挨拶のあと、連絡会参加の4大学より今年度の活動報告があり、今後の地域連携についても意見交換を行った。

本学からは、和泉比佐子・地域連携推進本部副本部長より、自治体との新たな協定締結や、部局や教職員・学生による公募事業、地域連携教育やボランティア教育などについて報告があった。兵庫県立大学からは、杉山武志・社会価値創造機構地域創造センター長より、同センターの姫路市や明石市での活動、エコ・ヒューマン地域連携センターの丹波篠山市での活動について報告があった。神戸市看護大学からは、岩本里織・いちかん看護開発センター長より、地域貢献部門による「まちの保健室」活動、教育開発部門によるリカレント教育、研究開発部門による地域住民による教育ボランティアを導入した授業について報告があった。最後に、園田学園大学からは大江篤学長より、連携先と課題解決を行う必修科目化された「つながりプロジェクト」や、今後展開する「リーダーシップ教育」についての報告があり、同学からは、実際に地域連携活動を行っている学生2名より、尼崎市での緑化プロジェクトと大学キッチンカー運営についての事例報告もあった。



討論では、地域連携活動に対する教員や学生の参加のあり方をめぐり、大学・自治体・経済界のそれぞれの立場より活発な議論が行われた。最後に、園田学園大学の大江学長より閉会の挨拶があり、本会は終了した。

2) 「神戸大学准認証アーキビスト養成プログラム」への協力

- ・本学では、2025年4月から、全学の大学院生を対象に「准認証アーキビスト」の資格を取得できる「神戸大学准認証アーキビスト養成プログラム」（全7科目12単位）を開始した。本学では、阪神・淡路大震災の被災地にある大学として、震災資料の収集公開や被災資料保全活動の経験、公式アーカイブズとして大学文書史料室を設置する等の実績を有する。本プログラムでは、これらの経験と実績を活かした授業科目を提供している。プログラムの運用にあたり、地域連携推進本部など5部局が協力し、国や自治体、地域及び民間企業などの重要な文書や記録を守り、将来の社会の発展や組織運営に活かす役割を担うアーキビストの育成を行うこととなった。
- ・アーカイブズ学特殊研究（月2前期、大学院1,2年対象、主担当法学研究科福田真希）…松下「アーカイブズ資料の保存と修復」5/19、5/26、6/2、6/9の4回担当
- ・准認証アーキビスト養成プログラム連絡会議への参加（2/24）

4. ボランティア支援部門

令和7年度の主たる業務

学生・学生団体のボランティアや社会貢献活動に関する支援・相談を行い、活動先への訪問や受入団体・地域団体との意見交換を通じて連携を推進するとともに、教員の社会貢献活動を支援し、「地域防災」を柱として行政・住民・企業などと連携した事業を12回開催した。また、授業「ボランティアと社会貢献活動（A・B）」では、多様な分野の専門家によるオムニバス形式の学びを提供した。

災害ボランティア報告セミナーやパネル展示を実施し、阪神・淡路大震災31年関連事業として、神戸市「防災のつどい2025」でのセミナーやパネル展示、他大学との防災イベントなどに学生と協働で取り組み、災害・復興や社会貢献について多様な組織との交流を通じて学ぶ機会を提供した。

○「神戸大学地域連携推進本部規則」（抜粋） 令和3年9月28日制定 令和8年3月31日改正

- 第8条4 ボランティア支援部門は、次に掲げる業務を行う。
- (1) 学生等及び学生団体へのボランティア・社会貢献活動に係る支援
(意識啓発、相談対応、情報収集、調査分析、学内外関係機関との連携等)に関すること。

(2) ボランティア・社会貢献活動に係る教育に関すること。

(3) 教職員へのボランティア・社会貢献活動支援に対する意識の啓発に関すること。

(4) その他ボランティア支援に関すること。

1) 学生等及び学生団体へのボランティア・社会貢献活動に係る支援

①学生への支援と相談対応、地域・NPO 団体とのつながり支援

- ・個人の相談、団体紹介、マッチング、団体活動の相談、情報発信など
- ・「ボラカフェ 2025 春」（ボランティア・カフェ）ボランティア学生団体の活動紹介と新歓
- ・学生・ボランティア団体同士の交流場づくり

新入生の入学時の4月9日、10日に新歓、5月21日に新歓と学生団体同士の交流会を開催し200人超の参加があり、学生の関心の高さが窺えた。各ボランティア団体が作成した紹介パネルの展示形式を取り入れたことにより、ボランティア活動への入り方等新入生等が知りたい情報が視覚的に伝わりやすくなり、わかりやすいと好評を得た。行政と連携した初の試みとして、灘区地域協働課に参加いただき、灘区役所の「学生ボランティア活動推進制度」の紹介ブースを設営したことで、本学生へ広く地域のボランティア活動を紹介する機会を提供できた。



②学生ボランティア団体登録制度

- ・ボランティア活動に取り組む登録26団体（令和8年3月末時点）
- ・神戸大学基金「学生ボランティアサポート経費助成」による活動支援
- ・活動にかかる物品貸与、ミーティングルーム貸出
- ・相談、マッチング、情報発信、交流、活動報告の機会創出
- ・活動場所の訪問、地域の方々との情報・意見交換など

③学生団体向け助成金

a. 学外

令和7年度令和6年能登半島地震支援助成	(神戸市)
1.17 あしやフェニックス基金	(芦屋市)
(丹波地域) 学生等による地域貢献活動推進事業	(兵庫県丹波県民局、丹波篠山市)
ひょうごボランティア基金助成事業	(ひょうごボランティアプラザ)
ひょうご若者被災地応援プロジェクト	(ひょうごボランティアプラザ)
地域コミュニティ再生支援事業補助金	(宮城県)
コープともしびボランティア振興財団	

b. 学内 神戸大学基金「学生ボランティアサポート経費助成」

- ・令和7年度は11団体に助成

2025年度登録ボランティア団体
AGLOC ー神戸大学国際農業サークル
神戸大学地域密着型サークルにしき恋
神戸大学地域おこしサークル水芭蕉
神戸大学学生震災救援隊
神大モダン・ドンチキ (震災救援隊)
神戸大学ボランティアバスプロジェクト
Kobe Med Connect
アイセック神戸大学委員会
神戸大学国際協力 NGO PEPUP
TRUSS ー神戸大学留学生支援サークル
神戸大学混声合唱団アポロン
神戸大学 Luonto (多世代交流系)
神戸大学児童文化研究会
神戸大学総合ボランティアセンター
①灘チャレンジセクション
②手話サークルべんべん草セクション
③灘地域活動センター (N.A.C.) セクション
④住之江児童館セクション
⑤障がい者セクション
⑥点訳セクション
⑦とんかちセクション
⑧まーくん☆チームセクション
摩耶のんびり自習室
ボランティアサークル ちゃぼ
環境サークルえこふる
CNF 小児糖尿病サマーキャンプボランティア

団体名	活動事業
灘チャレンジ実行委員会	灘チャレンジ 2025
環境サークルえこふる	「環境かるた」食品ロス ver. を用いた食品ロスに関する小学生への出前授業第三弾
神戸大学地域密着型サークルにしき恋	農業ボランティア及び黒枝豆生産
CNF 小児糖尿病サマーキャンプボランティア	小児糖尿病サマーキャンプ 2025
神戸大学ボランティアバスプロジェクト	神戸、東北での語り継ぎおよび能登半島地震復興支援ボランティア事業
神戸大学手話サークルべんべん草	学生による手話に関する情報発信・手話通訳ボランティア
神戸大学混声合唱団アポロン	合唱文化の普及および演奏を通じた神戸の地域交流支援活動
神戸大学児童文化研究会	灘区と東灘区を中心とした神戸市内の地域において、未就園児から小学生を対象に現地学習やイベントを実施し、社会的・文化的経験の場を提供する活動
Kobe Med Connect	みんなのまち健康プロジェクト～外国人住民に向けた防災・生活相談の傾聴活動 in 長田

④神戸大学ホームカミングデイ 第19回 2025年10月25日

卒業生、来訪された方に学生のボランティア活動を紹介するため、能登半島地震や東日本大震災の災害ボランティア活動のパネル展示と、丹波篠山市で学生が育てた生黒豆の販売を実施した。約4時間の活動を通して、多くの来場者から活動への質問や励まし、労いの言葉をいただき、学生にとって大きな励みとなった。



←災害ボランティア展示
神戸大学ボランティアバスプロジェクト



生産丹波黒豆の販売→
地域密着型サークルにしき恋

⑤登録ボランティア団体の活動場所訪問、活動支援と受入れ地域、団体との交流事業【抜粋】

- ・神大モダン・ドンチキ「2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）」4月15日
阪神・淡路大震災の被災者支援から始まった日本で唯一の学生チンドン屋音楽サークルとして大屋根リングステージで演奏
- ・神戸大学混声合唱団アポロン「神戸マラソン 2025」応援歌 11月16日
神戸マラソン 2025 のスタートを「しあわせ運べるように」（臼井真指揮）の合唱で神戸大学混声合唱団エルデと共に応援
- ・神戸大学混声合唱団アポロン「阪神・淡路大震災 30 年記念事業：合唱曲 ともしび」音源録音
合唱曲「ともしび」（神戸市教育委員会「阪神・淡路大震災 30 年記念事業」）
作詞 神戸市立鷹匠中学校 77 回生・石田裕之 作曲 石田裕之（神戸大学卒業生）・編曲 名田綾子
演奏 神戸大学混声合唱団アポロン <https://www.youtube.com/watch?v=PTcLVkVcz2k>
- ・神戸大学地域密着型サークルにしき恋 大学都市神戸産官学プラットフォーム「第2回 KOBE SDGs マルシェ」12月7日甲南大学
SDGs CHALLENGE PICTH 発表とブース出展：丹波篠山市農業ボランティアの活動内容、地域の展開を紹介、参加者と交流
- ・総合ボランティアセンターとんかちセクション「天井川公園を守る会」と共に天井川公園の清掃活動
- ・灘チャレンジ実行委員会「International Festival HIH EXPO」出展 兵庫県国際交流会館 11月15日
- ・神戸大学ボランティアバスプロジェクト「ボーアイ総合防災フェスタ」11月1日 神戸学院大学／災害・復興ボランティア 1月17日
1.17KOBE に灯りを in ながた／東北大学 SCRUM との被災地の学生団体・災害語り継ぎ交流



神大モダン・ドンチキ



神戸大学混声合唱団アポロン



神戸大学地域密着型サークルにしき恋



灘チャレンジ実行委員会



総合ボランティアセンターとんかち



神戸大学ボランティアバスプロジェクト



⑥災害ボランティア活動の支援

a. 災害・復興ボランティア団体

阪神・淡路大震災（1995 年）・東日本大震災（2011 年）・令和 6 年能登半島地震（2024 年）を契機に活動

団体名	設立	2025 年度主な活動内容
神戸大学学生震災救援隊 ・神大モダン・ドンチキ ・N.A.C. セクション（灘地域活動センター） ・灘チャレンジ実行委員会	1995 年 1 月	阪神・淡路大震災から続く取組み・にぎわいづくり 能登半島地震被災地災害ボランティア 東日本大震災被災地災害・復興ボランティア 2025 年日本国際博覧会（大阪・関西万博）はじめ地域での取組み
神戸大学総合ボランティアセンター 8 団体	1995 年 5 月	事務局／8 つのセクションで活動 ・N.A.C. セクション（灘地域活動センター） ・手話サークルぺんぺん草セクション ・障がい者セクション ・住之江児童館セクション ・点訳セクション ・とんかちセクション ・まーくん☆セクション ・灘チャレンジ実行委員会
灘チャレンジ実行委員会	1995 年 6 月	灘チャレンジ 2025
灘地域活動センター（N.A.C.）	1997 年 4 月	HAT 神戸・集合住宅 住民の皆さんとお茶会 県営岩屋住宅 住民の皆さんとお茶会
神戸大学ボランティアバスプロジェクト	2011 年 4 月	能登半島地震被災地災害ボランティア 東日本大震災／宮城県南三陸町・石巻市・仙台市 阪神・淡路大震災／神戸市長田区域の慰霊祭 地域づくりボランティア・語り継ぎ／震災伝承活動
Kobe Med Connect	2024 年 10 月	能登半島地震被災地災害ボランティア 阪神・淡路大震災／神戸市長田区域の慰霊祭 外国人住民への防災・生活上の困り事の傾聴

b. 地域とつながる～神戸大学生 31 年

の災害・復興ボランティアセミナー

神戸防災のつどい 2026

中央区文化センター 1月18日

学生団体	神戸大学学生震災救援隊（救援隊）	[1995 年]
	神戸大学総合ボランティアセンター（総ボラ）	[1995 年]
	神戸大学ボランティアバスプロジェクト（ボラバス）	[2011 年]
	Kobe Med Connect（KMC）	[2024 年]
奥村 弘	神戸大学理事・副学長・地域連携推進本部長	
安藤 幹雄	神戸大学特別顧問	
松下 正和	神戸大学地域連携推進本部・特命教授・地域連携教育部門長	
進行	山地 久美子 神戸大学地域連携推進本部特命准教授 ボランティア支援部門長	

阪神・淡路大震災から31年、被災・復興の経験を踏まえ、仮設住宅や復興住宅での生活再建支援や災害の語り継ぎを継続し、防災・減災活動へとつなげている。

午前のセミナーでは、阪神・淡路大震災直後から現在まで被災者支援や復旧・復興ボランティアに取り組む団体が活動を紹介した。学生は、ボランティア・社会貢献活動に取り組む中での迷いや悩み、やりがいや達成感を率直に発信し、参加者と学生活動の現状や今後について意見交換を行った。午後のパネル展示・ワークショップを含め、200人を超える参加者（セミナーは対面・オンライン計60人）が参加し、災害支援や地域連携への理解を深める機会となった。



奥村 弘 神戸大学理事
副学長・地域連携推進本部長
活動を社会に出てからいかにするために、防災研究に位置付けて、社会のリーダーとなるよう、組織のあり方、地域、人とのつながりを大切にしてください。大学が災害に強くなり、備えるために支えます。



松下 正和 神戸大学地域連携推進本部
特命教授・地域連携教育部門長
31年間の学生ボランティアの糧が繋がり、その継続性が災害に強い社会をつくります。被災地との信頼関係と大学が社会に果たす役割を学生の皆さんが果たしています。



安藤 幹雄 神戸大学特別顧問
継続した取組みに敬意を表します。ボランティア活動で人間の本来の姿に触れることができ、それを大切にすることが、人を動かす力になります。神戸大学は震災で47名の学生、教職員を奪われました。全国的な活動支援を続け、神戸大学基金へのご協力もお願いしていきます。

c. 「地域とつながる～神戸大学生31年の災害・復興ボランティア／パネル展示・ワークショップ」

神戸防災のつどい2026 神戸市中央区文化センター 1月18日【神戸大学基金ボランティア活動支援事業】ワークショップでは、午前のセミナーで伝えきれなかった各団体の活動内容や現状、今後の展望を資料や写真を用いて紹介した。参加者との質疑応答や、学生が設定したテーマによるグループディスカッションを実施し、活発な意見交換が行われるなど、会場は終始活気に包まれた。



d. 被災地、被災された方への配慮、十分な安全性確保の指導

- ・ボランティア支援部門ホームページ「災害・復興ボランティア活動と大学の支援」の充実
<https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/pdf/volunteer/index/gakusei-katsudo.pdf>
- ・初めて、あるいは複数回災害ボランティア活動に取り組む学生と面談（対面・オンライン）
活動場所、活動先の安全性、現地の受け入れ団体との調整、問合せ、経費の相談、調整、助言
- ・「災害ボランティア活動計画書」「災害ボランティア活動報告書」の確認、助言
- ・確認後、各学部・研究科における安全の確保や公欠の願い出・休学手続きへの参考

被災地での復旧期のボランティア活動では、現地で依頼された作業を断りにくい状況や、2006年以前の建築物の解体に伴うアスベストなどの危険に直面する可能性がある。そのため、災害ボランティア活動計画書の提出や事前面談を通じて、地震や悪天候を含む安全対策や情報収集方法を学生と確認し、安全を最優先とした活動について話し合っている。

e. 神戸大学基金「災害ボランティア活動経費助成」（登録ボランティア団体対象）を制度化

全国の被災地で継続的に活動する神戸大学地域連携推進本部ボランティア支援部門・登録ボランティア団体を対象としている活動経費助成を2025年10月に制度化した。本制度は、東日本大震災でのボランティア交通費支援を基盤とし、新型コロナウイルス感染症の影響による活動縮小を経て再開されたもので、全国の被災地支援活動のために活用されている。

能登半島地震被災地では、復旧から復興期へ移行する中で、住宅の片付け支援から仮設住宅での生活支援などへ活動が広がっており、継続的な交通費等の支援が必要となっている。そのため、学内助成に加え、「ひょうごボランティア基金助成事業」など学外の助成制度の活用も奨励し、学生の継続的な災害ボランティア活動を支援している。

- ・「神戸大学生による能登半島地震 復旧・復興 災害ボランティア活動経費助成要項」(4月1日)
- ・助成額は、全国の被災地での災害ボランティア活動 1団体・1年に250,000円を上限
兵庫県内の地域防災ボランティア活動 1団体・1年に50,000円を上限
- ・実績：2回(2025年10月～2026年3月)

f. 神戸大学基金「神戸大学生による能登半島地震 復旧・復興 災害ボランティア活動経費助成」制度

神戸大学生の安全な復旧・復興支援活動を促進するため、2024年4月に被災地までの交通費助成制度を新設した。学生は官民の災害・復興ボランティアセンターや民間団体を通じて活動し、全国から集まる社会人や学生との交流を深めるとともに、その経験を生かして地元地域でのボランティア活動へ発展させるなど、継続的な社会貢献につながっている。

- ・令和6年能登半島地震の被災地で、本学学生が行う復旧・復興災害ボランティア活動への支援
- ・助成金額は人あたり1年に40,000円を上限
- ・学生のべ16名が活用し、災害ボランティア活動に取り組むきっかけに繋がっている。



g. 「神戸大学生 30年の語り継ぎと災害ボランティア」の展示

阪神・淡路大震災や東日本大震災を契機に継続してきた神戸大学生の災害ボランティア活動と、令和6年能登半島地震被災地での最近の取組をパネル展示で紹介し、災害ボランティア活動への理解を深めていただく機会となった。



第22回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム 8月30日 神戸学院大学



藤澤正人学長と学生の活動についての談義



ALL HAT2025
(第10回 HAT 神戸防災訓練)
9月20日 人と防災未来センター



ポーアイ総合防災フェスタ
11月1日 神戸学院大学



神戸防災のつどい
1月18日 中央区文化センター



災害ボランティア意見交換会
2月11日 人と防災未来センター

⑧ ボランティア支援部門の取組み 【省略】

⑨ 情報発信 ボランティア・社会貢献に関するボランティア支援部門ホームページ

a. ボランティア支援部門 <https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/volunteer/>

b. 『地域に出るー神戸大学ボランティアと社会貢献のススメ 2026』 発行

<https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/pdf/volunteer/index/Pamphlet2026.pdf>



2) ボランティア・社会貢献活動に係る教育に関すること。

① 「ボランティアと社会貢献活動 (A) (座学)」 「ボランティアと社会貢献活動 (B) (座学・実習)」

授業「ボランティアと社会貢献活動」(A) では、社会におけるボランティアや社会貢献を幅広い視点から学ぶため、多様な分野の講師を招き、学生ボランティア、プロボノ、医療、メディア、企業の CSR・CSV、災害ボランティア、NPOなどをテーマに授業を実施した。(B) では、商店街、農業、災害・復興、社会福祉などでの実習機会を提供するとともに、今年度は摩耶山での森林保全活動や日本語学校の留学生支援を加え、多角的な視点で社会貢献を学ぶ機会を充実させた。

a. 2025 年度受講生のアンケートより抜粋

ボランティアと社会貢献活動 (A) (B) 受講者の感想

・ボランティアというものの範囲の広さ、性質の多様性に驚かされた。
・授業で感じた「誰かの役に立ってみたい」という気持ちを行動に移すことが出来た。きっかけをいただきありがとうございます。
・一人一人の強い思いを聞くことが出来て勉強になった。僕自身はテレビ業界で働き“人々を笑顔にできる番組”を作りたいです。
・毎授業、違った背景を持った方々に登壇いただき異なった視点からボランティアに対する考えを深めることが出来た。
・自分の専門に結び付けて地域に貢献したいです。・相手のニーズをよく理解して対話を重ねることが重要だと学んだ。
・社会人になって仕事（利益追求）だけでなく、社会貢献を両立している人たちはキラキラしていて話を聞けて良かった。
・プロボノボランティアについて興味深かった。・勇気をもらった。
・社会への解像度が高くなっていました。すごく良かったです！・地域医療を授業を通して面白そうと思った。
・どんなボランティアでも新たに生まれる関係や人脈を目的に私は参加するのだと思う。
・日々の生活や職業選択中でも貢献できる多様な形があることを知りました。
・プロフェッショナルの人々がボランティア活動の意義を詳細に語ってくださり、今までのボランティア概念が変容した。
・小さな取組みの積み重ねの必要性について再認識できる契機となった。
・農業ボランティアが神戸大学で行われていることに驚いた。・良い意味で各業界に対するイメージが変わりました。
・メディア情報の発信の仕方一つで人々の意識や行動を変化させ、社会貢献に繋げていることをきけてとても良かった。
・企業などが推進することでより大きな規模で様々なボランティアを行えることを知った。無償も有償も有ることを知った。
・ボランティアを一人で始めるのはハードルが高かったので実習をしてみたかった。・ご登壇いただいた方に感謝を伝えたいです。

b. 講義内容

ボランティアと社会貢献活動 (A) 第3 クォーター (水曜日・5 限 午後5 時～6 時半)

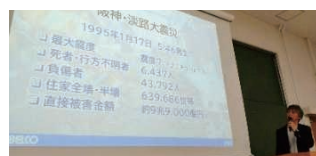
1	10月1日	農村ボランティアと住民参加	田中丸 治哉	神戸大学名誉教授
2	10月8日	国際協力と社会貢献・フェアトレード	太田 和宏	神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授
3	10月22日	メディアと社会貢献—地域を記録する	藤岡 勇貴 米田 礼音	サンテレビ社会報道部 キャスター サンテレビ社会報道部 記者
4	10月29日	能登半島地震の災害復興ボランティア	今井健太郎	民間災害ボランティアセンターおらっちゃん七尾 代表
5	11月5日	医療と社会貢献・ボランティア	太田 和宏	神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授
6	11月12日	企業と社会貢献 CSR (企業の社会的責任) CSV (共通価値の創造) 創業 120 周年記念プロジェクト	東山 高志 [卒業生] 橘 ゆかり	株式会社神戸製鋼所総務・CSR 部 サステナビリティ推進グループ長 係長
7	11月19日	専門性とプロボノ・ボランティア	津久井 進 [卒業生]	弁護士 元兵庫県弁護士会 会長
8	11月26日	ボランティアと社会貢献「地域に出る」まとめ	山地 久美子	神戸大学地域連携推進本部 特命准教授 ボランティア支援部門長

ボランティアと社会貢献活動 (B) 第4 クォーター (水曜日・5 限 午後5 時～6 時半)

1	12月3日	灘区水道筋「森の手入れ」摩耶山 (座学) ボランティア①	慈 憲一	摩耶山再生の会事務局長
2	12月10日	農業ボランティアと地域 (座学) ボランティア③	高田 晋史	農学研究科助教
3	12月17日	ユニバーサル社会と障がい者 (座学) ボランティア④	山田 剛司	えんびつの家事務局長
4	12月24日	実習 (第1 回) ①～⑧の中で1 回選択		
5	1月7日	阪神・淡路大震災と多文化共生・災害ボランティア②⑤ (座学)	金 千秋	NPO 法人エフエムわいわい代表理事
6	1月21日	地域に根付くボランティア	鎌田 あかね 長 由紀	灘区社会福祉協議会事務局長 ボランティアコーディネーター
7	1月28日	実践「地域に出る」まとめ・プレゼンテーション	山地 久美子	神戸大学地域連携推進本部特命准教授 ボランティア支援部門長
8	2月4日	実習 (第2 回) ①～⑧の中で1 回選択		①・②・③・④から2 回以上選択 (2 回は必須)



弁護士・プロボノ



株式会社神戸製鋼所



灘のにぎわい まちあそび



森の手入れ 摩耶山

c. ボランティア実習

(学生が希望先を選択：学生教育研究災害傷害保険の加入確認後に実施)

①	12月20日	環境の保全を図る活動「森の手入れ」摩耶山 神戸市灘区
②	1月17日	災害ボランティア・慰霊祭 「第28 回 1.17KOBE に灯りを in ながた」JR 新長田駅前
③	12月18日	農村ボランティア 三木市
④	12月22日 ～2月6日	保健、医療又は福祉の増進を図る活動 「えんびつの家」神戸市中央区
⑤	1月21日	日本語留学生との交流・物資支援 神戸市長田区
⑥	1月31日 2月14日	社会教育の推進を図る活動 子供の学習支援「摩耶のんびり自習室」神戸市灘区
⑦	2月7/8日 2月15日	農業ボランティア 「にき恋」丹波篠山市
⑧	2月11日	災害救援活動／地域安全活動 災害ボランティアセミナー運営補助



1.17 KOBE に灯りを in 長田 2025



日本語留学生との交流・物資支援



災害ボランティアセミナー運営補助



農村ボランティア

d. 自治体・消防署の取り組み紹介

灘区地域協働課および灘消防署から、地域のボランティア・社会貢献活動について学ぶ機会を設けた。また、学生が社会人となった後の活動をイメージできるよう、公務外でのボランティア活動や副業許可制度についても理解を深めた。

11月26日	灘区役所「学生ボランティア活動推進制度」の紹介
1月7日	灘消防署「防災福祉コミュニティ」 「高羽防災福祉協議会の防災訓練」等の紹介



灘消防署消防防災課

3) 教職員へのボランティア・社会貢献活動支援に対する意識の啓発に関すること。

- ・学生ボランティア活動や助成金相談への応対、顧問教員との意見交換
- ・『地域に出る 2026』保健学研究科地域連携センター等の取組紹介
- ・国際文化学研究科地域連携センター教員と上郡町の連携事業にかかる協力



「神戸発掘映画祭 2025」上郡町8ミリ映像フィルム上映



上郡町合併 70 周年記念事業・神戸大学国際文化学研究科共同、地域連携推進本部協力で開催



4) その他ボランティア支援に関すること。

①一般社団法人大学都市神戸産官学プラットフォーム・採択プロジェクト「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」

2025 年度メンバー：神戸大学（リーダー）、神戸学院大学、兵庫県立大学、神戸松蔭大学、甲南大学
神戸市看護大学、神戸常盤大学、大和リース株式会社、双日株式会社

南海トラフ巨大地震等の未曾有の災害に備え、9 メンバーが地域住民・行政と協働し、「共助のネットワーク」形成に取り組んでいる。この多層的な地域防災体制づくりは評価され、『日経グローバル』『大学の地域貢献度に関する全国調査 2025』“一押しグローバル事業”防災分野で紹介された。2025 年度は地域防災セミナーを 4 回、企業と大学が連携する「企業・大学防災セミナー」を 2 回開催し、各回でワークショップを実施することで計 12 回、参加者との理解促進を図った。また、ALL HAT2025HAT 神戸防災訓練では、企業・行政・大学が合同出展し、全事業を通じて約 700 名が参加した。企業・大学防災セミナーでは、企業の防災・減災への取組を学ぶ機会を創出したほか、「能登半島地震から学ぶ南海トラフ巨大地震に備える災害ボランティア意見交換会」では、大学生・高校生とともに次世代につなぐ地域防災力の向上について考える新たな取組を実現した。

第 4 回地域防災の未来セミナー「南海トラフに備え、東日本大震災の経験と地域から学ぶ 7 月 19 日



魚崎町防災福祉コミュニティ
関上中央町内会（宮城県名取市）
NPO 法人神戸まちづくり研究所
甲南大学全学共通教育センター
兵庫県立大学
神戸大学地域連携推進本部

第 1 回企業・大学防災セミナー「企業と大学が防災に取り組む避難訓練・WS 南海トラフ巨大地震—自分ゴトに考えて行動する」10 月 17 日



大阪府危機管理室
双日株式会社関西支社
神戸新聞社 論説副委員長
神戸大学地域連携推進本部



第 5 回 地域防災の未来セミナー「知る×体験する ぼうさい教育 sample fair」11 月 30 日



神戸市危機管理局
神戸学院大学
神戸常盤大学
神戸大学地域連携推進本部

第 2 回企業・大学防災セミナー「被災者に寄り添う～企業と大学が取り組む Action～」11 月 30 日



エム・シーシー食品株式会社
JA 兵庫六甲
大和リース株式会社
神戸学院大学
神戸松蔭大学
神戸大学地域連携推進本部



第 6 回 地域防災の未来セミナー「地域の目線で考える 防災と災害対応クロスロードワークショップ」2026 年 2 月 11 日



なぎさ防災福祉コミュニティ
脳の浜防災福祉コミュニティ
神戸クロスロード研究会
兵庫県立大学
神戸大学地域連携推進本部

第 7 回 地域防災の未来セミナー「災害看護の視点で考える My 個別避難計画作成ワークショップ」2026 年 2 月 11 日



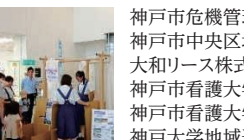
神戸市中央区長
人と防災未来センター
神戸市看護大学
神戸大学地域連携推進本部



●メディア紹介

- ・神戸新聞「職場で地震に遭ったら」＜日々小論＞論説副委員長・長沼隆之 2025/11/12（朝刊 9 面）
- ・企業・大学防災セミナー第 1 回 <https://www.kobe-np.co.jp/opinion/202511/0019694800.shtml>
- ・サンテレビニュース 2 月 11 日大学生・高校生等の災害ボランティア意見交換 <https://www.sun-tv.co.jp/suntvnews/news/2026/02/11/92591/>
- ・WEB 防災情報新聞（片岡リポーター）4 事業
- 2025 年 7 月 19 日 地域防災セミナー第 4 回 <https://www.bosaijoho.net/2025/08/04/kobeplatform-seminar/>
- 2025 年 11 月 30 日企業・大学防災セミナー第 2 回 <https://www.bosaijoho.net/2025/12/24/kobe-kigyo-daigaku-seminar/>
- 2025 年 11 月 30 日地域防災セミナー第 5 回 <https://www.bosaijoho.net/2025/12/26/kobe-u-bosai-samplefair/>
- 2026 年 2 月 11 日地域防災セミナー第 6 回・第 7 回 https://www.bosaijoho.net/2026/03/19/kobe_nankaitrough-seminar/

● ALL HAT 2025 第 10 回 HAT 神戸防災訓練 9 月 20 日 人と防災未来センター／なぎさ公園



神戸市危機管理局
神戸市中央区地域協働課
大和リース株式会社
神戸市看護大学
神戸市看護大学ボランティア部
神戸大学地域連携推進本部

●大学生・高校生・社会人の災害ボランティア

「能登半島地震から学び南海トラフ巨大地震に備える 災害ボランティア意見交換会」2月11日



人と防災未来センター【神戸大学基金ボランティア活動支援事業】
講演：民間災害ボランティアセンターおらっちゃ七尾
今井 健太郎代表
活動報告：
大学生 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
Kobe Med Connect
甲南大学生
高校生 滝川第二高等学校 神戸海星女子学院高等学校
中高生 あすパ・ユース震災語り部隊
社会人 カダンミツ オペラ・ディ・フィオーレ
意見交換：全員
まとめ：人と防災未来センター平林 英二 企画ディレクター
実習ボランティア：神戸大学生

5) 課題

- ・全学学生へのボランティア・社会貢献活動に関する情報提供と参加機会の創出（学内・学外）
- ・4キャンパスの活動情報を収集・発信し、学生間の交流機会を提供
- ・被災地大学や地域・学外組織と連携したボランティア支援ネットワークの構築と情報発信
- ・学生ボランティア団体の活動場所（ミーティングルーム等）の確保

【広報】ボランティア支援部門・学生ボランティア団体に関連するメディア掲載（一部抜粋）

新聞	読売新聞 2025/6/17「(下) <阪神大震災 30 年>学生らと交流 深まる絆」灘地域活動センター https://www.yomiuri.co.jp/local/hyogo/feature/CO083272/20250616-OYTAT50063/
	読売新聞 2026/1/7「ろうそく作り、悼む火 次世代へ」神戸大学ボランティアバスプロジェクト https://www.yomiuri.co.jp/local/hyogo/news/20260106-GYTNT00262/
	京都新聞 2026/1/10「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験の語り 学生も担う」6 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	四国新聞 2026/1/12「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験の語り 担う学生」15 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	徳島新聞 2026/1/12「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災体験伝承 学生担う 生の声に心揺さぶられ」2 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	愛媛新聞 2026/1/12「祈りをつないで阪神大震災 31 年住民と交流続ける学生 被災経験の語り 担う自覚」6 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	佐賀新聞 2026/1/13「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験の語り 担う学生」5 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	茨木新聞 2026/1/14「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験の語り 担う学生 高齢者増、力仕事引き受け」6 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	福井新聞 2026/1/15「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験はなくても 追悼行事担う学生たち」11 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	高知新聞 2026/1/15「祈りをつないで阪神大震災 31 年 被災経験はなくても 追悼行事担う学生たち」14 面 神戸大学ボランティアバスプロジェクト/地域連携推進本部特命准教授 山地久美子
	朝日新聞 2026/3/3「次の災害で命救うことがゴール」宮城で伝承について語り合うシンポ 神戸大学ボランティアバスプロジェクト https://digital.asahi.com/articles/ASV323STYV32UNHB002M.html?iref=pc_ss_date_article
	観光経済新聞【震災復興特集】第 11 回全国被災地語り部シンポジウム in 東北、宮城県南三陸町で開催（後編） 神戸大学ボランティアバスプロジェクト https://www.kankokeizai.com/2603102300kks/
TV 放映	読売テレビ 2026/1/17「【LIVE】“次へ”阪神・淡路大震災 31 年かんさい情報ネット ten.」神戸大学ボランティアバスプロジェクト https://www.youtube.com/watch?v=iuloCAxSlxI
	関西テレビ 2026/1/17「阪神・淡路大震災から 31 年震災特番「この瞬間に祈る」YouTube 配信 https://www.youtube.com/watch?v=rzlrEyyw44
	サンテレビニュース 2026/2/11「能登の教訓 南海トラフ巨大地震の備えに生かす 神戸で意見交換会」 神戸大学ボランティアバスプロジェクト Kobe Med Connect 神戸大学ボランティア実習 https://www.sun-tv.co.jp/suntvnews/news/2026/02/11/92591/
	サンテレビニュース 2026/3/11【特集】「東日本大震災の発生から 15 年 災害の教訓 語り部がつなぐ」 神戸大学ボランティアバスプロジェクト https://youtu.be/lgsXGCwBpJY?si=vy68JyGWl6lS2S65
神大	『神戸大学統合報告書』2025 年度版 TOPICS「学生のボランティア活動支援」40 頁 https://web-pamphlet.jp/kobe-u/2025e27/#page=41
冊子	「企業、行政、大学、住民が共につくる地域防災」「大学の地域貢献度調査」『日経グローバル』No.522 24p 2025/12/15
書籍	地域連携推進本部特命准教授 山地久美子（2024 年 1 月 7 日ラジオ関西放送） 2026「学内外のボランティア活動を後方支援」『神戸大学☆夢ラボ』神戸大学出版会 42-43pp 神戸大学学生震災救援隊（西畑克俊）／灘地域活動センター（山品俊介）（2024 年 1 月 4 日ラジオ関西放送） 2026「被災地、地域でボランティア活動」『神戸大学☆夢ラボ』神戸大学出版会 44-45pp

令和 7 年度ボランティア支援の状況と取組み

令和 7 年度	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
相談・面談・助言ほか	18	4	6	8	5	3	5	3	4	2	13	21
災害ボラ計画・相談	12	6	22	21	20	2	28	3	8	3	4	6
活動場所の訪問等	0	3	3	2	7	5	5	2	6	7	5	3
事業・地域活動参加等	2	14	10	10	9	17	18	16	18	19	12	16

第Ⅱ章

学内公募

地域連携事業（組織型・個人型）
学生地域アクションプラン

登録ボランティア団体公募

学生ボランティアサポート経費助成
（神戸大学基金）

活動報告

人文学研究科地域連携センター 「地域歴史遺産の保全・活用事業」

大学院人文学研究科（文学部）では、2002 年（平成 14）より「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始し、同年 11 月に地域連携研究員制度を創設。翌年 1 月に文学部地域連携センターが設置。2007 年の改組により、現在は人文学研究科地域連携センターとなっている。

本事業は、阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が自治体や地域住民と連携し、県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくり等に取り組んでいくことを目的としている。事業は多岐にわたっているが、おおむね次の 4 つを軸として展開している。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、当センターを拠点とする事業として、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学共同利用期間ネットワーク事業」が展開中である。このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究成果の公表も積極的におこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

（1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

- ① 包括連携協定に基づく兵庫県との連携事業
 - * 兵庫県地域創成局地域遺産課との連携
 - * 兵庫県教育委員会文化財課との連携
 - ・兵庫県文化遺産防災研修会の開催（11/28、於神戸大学大学院人文学研究科）
- ② 包括連携協定に基づく神戸市との連携事業
 - * 神戸市文書館との連携
 - * 神戸市文化スポーツ局文化財課との連携
 - * 大学発アーバンイノベーション神戸事業
- ③ 包括協定にもとづく灘区との連携事業
- ④ 神戸を中心とする文献史料所在確認調査
- ⑤ 住吉歴史資料調査会との連携事業
 - * 下田清五郎氏文書の調査・翻刻
 - * 古文書勉強会の開催
 - * 『阪神・淡路大震災資料集Ⅳ』の刊行
- ⑥ 大学協定に基づく小野市との連携事業（共同研究「小野市大部地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成」）
- ⑦ 大学協定に基づく朝来市との連携事業（委託研究「朝来市関連の古文書及び歴史調査に係る指導助言」）
 - * 地域資料整理（石川家文書整理会・あさご古文書整理会・竹田区有文書整理会、その他）
 - * 成果展「御覧下され我らの記録を！岩屋谷村大河家古文書展」10/18-20、於朝来地域自治協議会会議室、主催事業
- ⑧ 部局協定にもとづく丹波市との連携事業（共同研究「丹波市内古文書等歴史資料調査業務」）
 - * 歴史講座「見る・知る・学ぶ 丹波の歴史」計 6 回
 - * 地域資料調査（山南町高座神社文書・細見綾子生家所蔵資料・井中自治会所蔵文書、等）
 - * 丹波古文書倶楽部への協力（毎月第 2 土曜日、8 月休会、講師：木村修二）
 - * その他

- ・丹波市文化財保護審議会委員の委嘱（井上）
- ⑨ 大学協定にもとづく加西市との連携事業（受託研究「加西市戦争遺産資料拡充調査」）
 - * sora かさい夏季企画展「戦後 80 年：加西と戦争―青野原俘虜収容所と鶴野飛行場―」8/9-31、於加西市地域活性化拠点施設 sora かさい、主催事業
 - * 上記展示解説パンフレットの作成
 - * その他
 - ・加西市文化財審議委員・加西市文化財保存活用地域計画委員の委嘱（井上）
- ⑩ 尼崎市との連携事業
 - * 尼崎市立歴史博物館文書館部門専門委員の委嘱（市沢）
- ⑪ 連携協定に基づく三木市との連携事業
 - * 新三木市史編さん支援事業
 - ・通史編部会への助言・調査協力、地域編部会活動の助言指導
 - ・新三木市史通史編第 7 巻『資料編文化遺産』、地域編 5『細川の歴史』発行
 - ・三木市立みき歴史資料館企画展「地域の史料たち―細川の歴史―」10/18-12/21
 - ・『市史研究みき』第 10 号、『市史編さんだより』第 18 号の発行
 - * 三木市立みき歴史資料館事業への協力
 - ・「みき歴史資料館協議会」の委員（会長）への参画（木村）
- ⑫ 三田市との連携事業（共同研究「旧三田藩主九鬼家資料の総合調査」）
 - * 旧三田藩主九鬼家資料の目録作成・撮影
- ⑬ 丹波篠山市との連携事業
 - * 丹波篠山市史編さん資料調査等業務共同研究
 - * 市立中央図書館「地域資料整理サポーター」活動への協力
 - ・報告会「サポーターが語る地域資料の魅力」3/21、於丹波篠山市立中央図書館、主催事業
 - * 市立中央公民館主催「古文書講座（中級編）への出講
 - * 部落史研究委員会へのアドバイザー協力
 - * NPO 法人 SHUKUBA 主催「古文書講座」への協力
- ⑭ 明石市との連携事業
 - * 明石藩関連資料調査・公開業務
 - ・明石市立文化博物館特別企画展「明石藩の世界 13 明石で華ひらく知と美の世界―蛻巖・華山が遺したもの―」9/20～11/3、於明石市立文化博物館、同館・センター主催事業
 - ・上記展示に関する資料調査、図録執筆、関連講座への協力等
 - * 横河家文書調査・公開業務
 - * 明石市における地域資料の調査等
 - ・ト部和彦家文書・尾上富子家文書調査
 - ・近代明石関連の新聞記事調査
 - ・明石市史編さん委員会へ地域史料調査担当として出席（石橋）
- ⑮ たつの市における連携事業
- ⑯ 佐用町との連携事業
- ⑰ 姫路市香寺町との連携事業
- ⑱ 福崎町との連携事業
 - * 共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし」
 - ・松岡家関係資料調査
 - ・柳田國男生誕 150 年記念展「柳田國男展―日本民俗学の父と故郷の縁―」10/4-12/7、於柳田國男・松岡家記念館、協力事業

- ・『広報ふくさき』への寄稿。『松岡五兄弟』の発行
- ・地域所在資料調査、デジタル化
- * 共同研究「兵庫県指定文化財 三木家住宅文献資料調査」
 - ・三木家資料保存ワークショップ（計6回）
 - ・『大庄屋三木家資料集7 三木家宛柳田國男書簡・葉書』の作成
 - ・大庄屋三木家住宅特別展「柳田國男竹馬の友 三木拙二」7/26-11/30、於大庄屋三木家住宅、協力事業
 - ・三木家入門講座⑨「近代日本の名望家と三木拙二」11/1、講師：出水清之助
- * その他
 - ・福崎町文化財保存活用地域計画協議会委員嘱託（井上）
- ①⑨ 猪名川町における連携事業
 - * 町民グループ「猪名川の古文書を楽しむ会」への協力
- ②⑩ 大学協定に基づく大分県中津市との連携事業
- ②⑪ 香美町との連携事業
 - * 文堂古墳と山陰道総合調査委員会委員の委嘱（古市・井上）

（2）歴史資料・災害資料の保全・活用

- ① 歴史資料ネットワークへの協力・支援
 - * 災害対応
 - * 神戸市兵庫区平野地区「奥平野古文書勉強会」
- ② 神戸大学附属図書館事業への協力
 - * 人文学・社会科学データインフラストラクチャー（JDcat）強化事業への協力
 - ・サンテレビ所蔵震災報道映像の震災文庫への受け入れ
 - ・附属図書館所蔵郷土資料のデジタル化作業、若林泰氏急増文書のデータ確認作業、等
 - ・「第14回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」12/6、於神戸大学附属社会科学系図書館
- ③ 人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

（3）地域歴史遺産を活用できる人材の育成

- ① 地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成プログラム
 - * 現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供
 - ・地域歴史遺産活用研究A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用基礎論A・B」、Aは「博物館資料論」との同時開講）：Aは金曜1限、Bは木曜1限に実施
 - ・地域歴史遺産活用演習A・B（学部は「地域歴史遺産保全活用演習A・B」、博士課程前期課程は「地域歴史遺産活用演習」、同後期課程は「地域歴史遺産活用企画演習」）：Aは9/4-6に丹波篠山フィールドステーション、Bは2/10-11に明石市立文化博物館で実施。
- ② 平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動
 - * まちづくり地域歴史遺産活用講座：本年度は開催せず
 - * オプションプログラム古文書解説初級講座（計4回）、講師：河島裕子（尼崎市立尼崎歴史博物館）、参加者19名。

(4) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

- ① 第24回歴史文化をめぐる地域連携協議会「学校と地域歴史遺産—これまでと、これから—」
12/22、於瀧川記念学術交流会館、22 機関 47 名参加

(5) 地域連携センターを拠点とするプロジェクト

- ① 人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化史料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」
 - * 兵庫県文化遺産防災研究会の開催（主催）11/28、於神戸大学
 - * 震災資料や災害の記憶の継承に関する会議の開催
 - * 西日本大学連携協議会の開催、3/15、オンライン
 - * 災害文化を担う人材育成・教育プログラムの展開、等多数

(6) 地域連携研究と研究成果の公表

- ① 年報『LINK【地域・大学・文化】』17号の刊行
- ② 地域連携センタースタッフによる、講演・市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、2026年3月末に発行される、当センターの2025（令和7）年度事業報告書を参照。
また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に公表されている。

保健学研究科地域連携センター 「少子高齢社会に対応した街づくり事業」

【概要】

2025 年度の保健学研究科地域連携センターは、委員 8 名からなる委員会によって運営され、多世代にわたる地域住民をシームレスに支援し、①就学前の発達障がい児とその家族に対する支援、②医療と福祉の連携による障がい者への生活支援、③地域高齢者・認知症の方とご家族への支援、④自治体の保健事業支援、⑤子宮頸癌啓発活動、⑥家族支援相談、⑦運動を通じた発達の気になる児童と家族への支援事業、⑧精神障がい・発達障がい者をサポートする NPO 法人のサービス向上に向けた支援、⑨地域の子どもの居場所づくりボランティア、⑩地域の小学校における保健室ボランティア、⑪ハイリスク児を持つ親への育児支援、⑫身体障がいを抱える方のアクティビティ支援事業の 12 事業を展開した。2026 年 2 月 14 日に地域連携センター活動報告会で主な事業の成果を報告した。

【活動内容】

① 就学前の発達障がい児とその家族に対する支援

- i) 活動概要：「ぱっとらっく」は、就学前の“発達が気になる子ども”とその家族のための教室で、保護者が発達障がいについて学ぶプログラムと、学生・保育士・保健師・地域のボランティアの託児による子どもプログラムを、神戸市総合福祉センターにおいて月 1 回実施している。2025 年度は親支援教室を計 5 回全てハイブリッドで開催し、保護者延 69 人、児延 23 人、ボランティア延 59 人の参加があった。年度末には活動報告書を作成し、市内の関係機関等に送付した。



日程・場所	プログラム	講師等
5月10日(土)	講演内容「幼少期にみられる発達のかたより～心理士の立場から」	宮崎 圭祐 先生（株式会社サイクロス）
6月14日(土)	講演内容「子どもの「こだわり」と付き合う」	穴戸 聖弥 先生（はくほう会医療専門学校）
9月13日(土)	講演内容「発達の気になる子どもの就学に向けて」	上野 昌稔 先生（神戸女子大学）
10月11日(土)	講演内容「発達が気になる子どもと家族が災害に備える」	榊原 開斗 先生（神戸市看護大学 災害看護専門看護師コース）
11月 8日(土)	講演内容「家族・当事者の会の活動について」	先輩保護者の皆様（NPO 法人ピュアコスモ）

- ii) 支援者育成事業：親支援教室の事業に参加する学生ボランティアおよび発達支援の支援者向け研修会を 2025 年 8 月に「困りごとの背景を読む：行動観察と記録の取り方」（講師：株式会社 ALTHEA 代表取締役 渡邊雄介氏）をテーマとした研修をハイブリッドで開催し、22 名が参加した。発達障害の基本的な理解から、子どもの観察するポイントや情報共有のための記録のポイントについて講義いただいた。

② 医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業

学生の障害者福祉施設でのボランティア活動（生活支援など）、地域交流事業における後方支援（地域イベントへの参加、外出支援等）、障害者福祉施設に勤務するケアスタッフの実践力向上の支援（学習会）を柱として事業を展開している。今年度、神戸聖隷福祉事業団主催の地域交流事業である「おいでやすカーニバル」に6名の院生ボランティアが参加し、地域住民を対象とした呼吸機能測定やふきもどし作成を企画・実施した。呼吸機能測定には10～80歳代までの計44名が参加し、その結果、何らかの障害が疑われた人に対しては、リーフレットを用いて呼吸機能を高める体操を紹介した。子どもも含めて100名以上の地域住民の参加があった。

③ 地域高齢者・認知症の方とご家族への支援

認知症予防・支援は高齢者が地域において健康に暮らし、充実した人生を送る上で極めて重要である。本事業では、市民および医療福祉専門職者の協働による認知症予防・治療・介護を中心とした支援活動に力を注いでおり、1）在宅認知症高齢者のご家族、及び医療福祉関係者への研修会を通じた啓発・実践力向上支援、2）地域在住高齢者へ認知症に関する講演会・認知症予防支援を行っている。今年度は2）に焦点を当て、①認知症予防に関する講演と簡易な認知機能検査、認知症に関する相談会を学部生、大学院生、留学生のボランティアとともに2月に行った（地域高齢者30名参加）。②地域在住高齢者を対象に認知・運動機能と

意欲の向上を目的とした手指運動介入プログラムを実施し（数理・データサイエンスセンターとの共同プロジェクト）、来年度も引き続き行う予定である。



④ 自治体の保健事業支援

2018年度より少子高齢社会に適した地域づくりを目指して、自治体における効果的な保健事業の展開のために、保健計画の立案や評価や人材育成計画立案の支援を実施している。2025年度は、伊丹および宝塚健康福祉事務所管内の保健師を対象にPDCAの研修を1回実施した。支援は職場外研修（Off the Job Training）と職場において実務を通じて行われる教育（On the Job Training）を組み合わせ、保健事業の評価計画から評価まで支援を実施した。9月30日に19名の保健師を対象に5つの保健事業について支援を行った。また、加古川保健福祉事務所の保健師の高齢者施設の感染症対策の課題分析への助言を行い、第14回日本公衆衛生看護学会での発表の支援を行った。



⑤ 子宮頸癌啓発活動

ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンと子宮頸癌検診の重要性などについて啓発活動を行っている。4月13日に、須磨パティオで開催された子宮頸癌啓発キャンペーンの「LOVE49 キャンペーン in Kobe」に実行委員として参加した。また、学部生と院生12名もボランティアとして参加した。11月13日に、神戸市健康局健康企画課と子宮頸癌検診の無料クーポン券の発信方法について、学部生2名、院生2名とともに協議を行った。

⑥ 家族支援相談事業

家族お悩み相談室は、家族が抱える悩みや困難を解決に導き、家族全体のウェルビーイングと家族機能を高めるテラーメイドな家族支援（家族看護）を実施している。完全予約制（無料）で、大学への来所、家庭訪問、オンラインにより、今年度は広報媒体として日本語版・英語版・中国語版リーフレットを新しくし、専用のウェブサイトの更新を行った。能登半島地震の発生を受け、神戸市への避難者の家族支援、支援者支援を実践した。

⑦ 運動を通じた発達が気になる学齢期の子どもと家族への支援事業

本事業は、主催する公益財団法人こうべ市民福祉振興協会へ協力して、発達の気になる児童が体を動かす楽しさを経験し、運動への意欲や達成感を持てる機会とすること、保護者が学び、情報交換する場を設け家族支援の機会とすることを目的に教室を開催した。神戸市在住の小学1・2年生で発達の気になる児童とその保護者を対象に募集を行い計36組を抽選で選定した。各クラス5回の計10回の運動教室（保護者プログラムと運動遊びのプログラム）を開催し、実35組、延149組が参加した。



⑧ 精神障がい・発達障がい者をサポートするNPO法人のサービス向上に向けた支援事業

地域在住障がい者を支えるNPO法人の多くは小規模事業所であり、非専門職がスタッフとして支援を行っている。一方、利用者の障がい種別は多岐にわたり重度障がいや重複障がいをもつ者もいる。そのため各利用者の状態像や特性の理解が難しいことも多く、スタッフへの教育的支援が必要である。本事業では、非専門職スタッフの知識・技術の向上による対利用者サービス向上を目標として、保健・医療・リハビリテーションの視点で研修を定期的にスタッフ6-10名に対して実施している。2025年度は4月、7月、12月の3回研修を実施した。

⑨ 地域の子どもの放課後見守りボランティア

須磨区横尾子どもの居場所づくり「あさひ教室」は、地域の小学生を広く受け入れ、学習支援や遊びを通して地域の中で子どもたちの育ちを支え見守る場所である。学生は学習支援の部分を担当している。計26回を12名の学生がシフト制で見守りボランティアとして参加し、放課後児童の学習支援を行った。また月2回の遊びの時間を学生が企画運営して、教室運営に協力した。学生にとって教室利用小学生だけでなく、その保護者や地域ボランティアなどとの多世代交流の貴重な機会となった。

⑩ 地域の小学校における保健室ボランティア

神戸市内にある小学校で養護教諭の先生と連携・協働し、保健室・別室登校の児童とのコミュニケーションを通し、様々な背景を抱える子どもたちへの支援や学校保健について深く考える機会を作ることを目的として活動している。年間を通し、ボランティア学生が参加できる日を養護教諭の先生と共有し、また、とくにイベントが開催される日などは事前に確認し参加者を募る等、養護教諭の先生と連携しながら実施した。2025年4月～2026年3月までの28日間に、延べ31名（実人員8名）の学生が保健室や通級指導教室で過ごす子どもたちとの関わりなどを実施した。新学期の発育測定実施時は身体計測の補助、音楽会では子どもの付き添い等の支援を行った。ボランティアとして参加した学生は、様々な特性を抱える子どもがおり、その子どものペースにあわせて関わることの重要性を学び、今後の社会生活中で人との関わり方についての新たな視座を得た。

⑪ ハイリスク児を持つ親への育児支援事業

地域で暮らす極低出生体重児で生まれた子どもをもつ家族に対し、ふれあい遊びや様々なプログラム、保護者同士の交流や専門家（小児科医師・臨床心理士・看護師・助産師・保育士等）からのアドバイスを通して、子どもの豊かな成長・発達を目指すことを目的としている。2025年4月～2026年3月に、夏祭りやイベント、小児科医による「お話会」などの親子教室が開催され、10回に学生ボランティア延べ16名（実人員4名）が参加した。通常プログラムでは0～2歳児の託児、夏祭りの出店担当や遠足の付き添いなどのイベントの運営補助をボランティアとして担当した。ボランティアとして参加した学生は、極低出生体重児とその家族が抱える悩み、YOYOクラブのような子育て教室の意義について理解が深まった。

⑫ 身体障がいを抱える方のアクティビティ支援事業

須磨海水浴場においてNPO法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクトが海水浴期間に主催するユニバーサルビーチに参画した。事前研修会を受講した学生ボランティアが7～8月中のプロジェクトに学生延べ38名（実人数19名）が参加し、NPOスタッフらと共に開場前に海岸沿いまでビーチマットを整備し、本学参加日に来場された対象者50組の状況に合わせた救命胴衣の着脱、水陸両用アウトドア車椅子への乗降、海への入水をサポートし、一緒に海水浴を楽しんだ。



⑬ 保健学研究科地域連携センター活動報告会

2026年2月14日（土）、KOBECOCREATION CENTER（三宮センタープラザ9F）にて、第21回保健学研究科地域連携センター報告会を開催し、参加者は23名であった。神戸市社会福祉協議会こべっこランド発達支援担当課長の岡田純子氏による「こべっこランドにおける子育て家庭への支援について」の講話と主な事業の報告を行った。

農学研究科地域連携センター 「地域連携による食料・農業・農村の持続的発展支援事業」

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を、農山村地域社会の問題解決および価値創造において積極的に活用し、地域社会に貢献することを目的に、2003 年度に創設された。

農学研究科は「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究することを基本目的としている。そうした中で、地域と農学を結ぶ拠点となり、地域の多様なニーズを共同の研究プロジェクトにつなげる等、農学研究科と地域を結ぶ中間支援機関としての役割を担い、共同研究、セミナー、ワークショップ、意見交換会などの地域交流を積極的に実施し、社会貢献を進めている。

農学研究科では、2007 年より丹波篠山市と連携協定を結び（2010 年から全学として協定締結）、連携活動を進めてきた。現在、兵庫県東播磨県民局（2018 年～）、岡山県西栗倉村（2017 年～）、兵庫県農業協同組合中央会（2010 年～）との間に連携協定を締結し、実践的な教育・研究活動を展開している。丹波篠山市では、一般社団法人丹波篠山キャピタルとの連携のもとで「丹波篠山研究会」を組織するとともに、東播磨地域では、東播磨フィールドステーションと一般社団法人ため池みらい研究所を設立し、市民との研究成果の共有と研究ネットワークの構築を進めている。

以下、今年度の活動概要について事業ごとに報告する。

I 地域共同研究

当センターの研究員が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や価値創造に資する調査研究を実施。また、農学部／農学研究科の学生や研究者が地域と共同で実施する調査研究および事業を支援している。

■農学研究科の研究者による調査研究

1. 兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発 長野宇規（地域共生計画学）、丹波篠山市ほか
2. 篠山城跡南堀のハス復活事業のモニタリング調査 鈴木武志（土壌学）、丹波篠山市ほか
3. 丹波篠山有機黒枝豆の販路選択に関する意思決定過程の解明 八木浩平（国際食料情報学）、丹波篠山市ほか
4. 地産地消を支える小規模流通システムの開発 中塚雅也（農業農村経営学）、（一社）神戸大学フードコミュニティほか
5. 「ため池みらい研究所」による市民主体の研究と実践 中塚雅也（農業農村経営学）、長野宇規（地域共生計画学）、兵庫県東播磨県民局、ため池みらい研究所ほか
6. 新規産地での加工用トマト育成を通じたオール兵庫県産食材による加工食品の開発 上田修司（生命機能科学）兵庫県内の食品加工業者ほか
7. スギ人工林の広葉樹林化に関する研究：再造林樹種の検討 石井弘明（森林資源学）、姫路市林産振興課
8. バイオエコノミーを基軸とした西栗倉村の持続可能な開発目標（SDGs）達成 長野宇規（地域共生計画学）、岡山県西栗倉村
9. 地域づくりコーディネーターの課題と育成手法 安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、丹波篠山市、丹波篠山キャピタル
10. 丹波篠山市内の祭囃子等の保存・伝承 三原香奈子（丹波篠山駐在コーディネーター）、篠山春日神社秋祭保存会
11. こうべ再生リンプロジェクト 鈴木武志（土壌学）、神戸市ほか
12. 地域おこしに貢献する新規特産鶏肉の開発 本田和久（栄養代謝学）、但馬農業高校ほか

■農学部・農学研究科の学生による調査研究

1. 地域づくり活動における心理的安全性の効果と形成要因 竹村実夢（農学研究科修士課程）対象地：兵庫県

2. 地域資源管理組織の継続に向けた役員マネジメントの有効性 川除由紗（農学部4年）対象地：兵庫県
3. ため池管理組織の人材育成に関する研究 佐々木太一（農学研究科修士課程）対象地：東播磨地域
4. 明石市の都市化に伴うため池周辺土地利用変化の解析 迫田竣介（農学部4年）対象地：明石市
5. 有機農業の普及に資する支援体制の解明（変更なし）有機農業の普及に資する地域環境の解明 上田初紀（農学研究科修士課程）対象地：丹波市
6. 民間企業による農業ボランティアマッチング事業の継続性と効果に関する研究 濱田紗希（農学研究科修士課程）対象地：丹波篠山市ほか
7. 丹波篠山黒大豆の購買意思決定過程へ日本農業遺産への登録が及ぼす影響 岡本美咲（農学研究科博士課程）対象地：丹波篠山市
8. ファーマーズマーケットでのプロモーション社会実験を通じたエシカル消費拡大策の検討 村上桜香（農学研究科修士課程）対象地：丹波篠山市
9. 丹波篠山市の大型稲作農家の販路選択行動の解明 長谷川義真（農学部4年）対象地：丹波篠山市

II 地域交流活動

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し、地域の発展につながる取り組みを実施している。

■研究会・セミナーの開催

1. A-Launch

第25回（1月9日）「研究室から果樹園へ、新規農家の奮闘記」

話題提供：片山 寛則／片山農園やまなし&アップルファーム代表）

第26回（3月24日）「大学と地域をつなぐコーディネーターの実践」

話題提供 安部梨杏（地域連携センター 特命助教）

2. 地域連携研究会

- ・神戸大学版 CSA 研究会

生産者、消費者とともに持続可能な農業と地域のつながりを深める 新たなモデル「神戸大学版 CSA」の在り方を検討し、実証を行っている。

- ・地域ブランド研究会

事例研究や、書籍の輪読会を通じて、農産物ブランディングの理解を深めるとともに地域資源の価値を高める方法について議論している。

- ・コミュニティファーム研究会

阪神間の菜園で、コミュニティの再生における農の可能性について研究、実践を行っている。

■農村ボランティア支援事業

農村ボランティアバンク KOBE「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と学生・市民のマッチングを進めている。今年度は、20軒の農家登録と計257人のノラバイター登録があり、72件のマッチングが図られた。

■学生地域活動支援

地域と連携した取り組みを進める学生団体に対して、情報提供、情報発信のサポート、相談対応など、活動の発展と充実に向けて支援を実施している。今年度は、4団体（にしき恋、AGLOC、Luonto、水芭蕉）の地域活動を支援した。あわせて、丹波篠山市で活動する団体間で相互の情報共有を図ることを目的に、「篠山学生活動団体連絡協議会（さされん）」を組織し、運営を支援している。また、大学内の活動支援として、学生団体が農家とともに生産した農作物（黒大豆等）を学内販売する直売所「ささやま家（や）」を設置し、学生らが、生産から販売までの過程を経験する機会を提供している。

■神戸大学食農ブランド創造事業への参画

大学としての統一的な流通チャンネルとブランドの確立を目指す「神戸大学食農ブランド創造事業」に、附属食資源教育研究センターらとともに取り組んだ。この事業では、(1) 大学発の農畜産物の販売・ブランド価値の強化、(2) 地域連携による商品開発と販路の開拓を、(3) 食農ブランド化を牽引する法人を設立して取り組んでいる。本年度は、「一般社団法人神戸大学フードコミュニティ」に協力し、学内販売所「神戸大学マルシェ」の運営を支援した。また、附属農場の農産物を活用した独自商品開発や附属農場で育成された但馬牛を「神戸大学ビーフ」として本格販売を開始するとともに、地域連携団体の商品の試行的な販売もおこなった。

Ⅲ 相談・情報発信

大学と地域をつなぐ拠点として、所属するスタッフが各種相談に対応している。本年度は 34 件の相談が寄せられた。内容は食農コープ教育や地域活性化などに関する相談が多く、相談者は神戸大学生・大学院生 20 件、行政 2 件、地域団体 3 件、企業 4 件、教員 5 件と幅広く相談を受け付けた。また、Annual Report (活動報告書) の発行をはじめ、ホームページや SNS を通じて地域連携活動に関する情報を発信している。

Ⅳ 食農コープ教育プログラムの運営

農学部では、学部教育で培う専門性(理論)と結びつけながら、生産者や生活者の視点から地域の課題を学び(実践)地域や社会に貢献できる人材の育成を目指す「食農コープ教育プログラム(Cooperative Education)」を実施しており、特に、現場での実践活動を伴う科目の内容を充実させるよう、取り組みを進めてきた。当センターはプログラムの事務局として 3 つの科目を提供している。

■実践農学入門

丹波篠山市において、地元の農家を指導員とし、農作物の栽培や、むら仕事を体験しながら農業や農村生活への理解を深めることを目的としている。本年度は丹波篠山市後川地区を受け入れ先として、42 名の学生が 6 班に分かれて黒大豆の栽培を中心とした農作業を体験した。

■実践農学

農業農村の現場での調査型プロジェクトやインターンシップ型プロジェクトへの参加を通して、地域の産業・環境・社会を理解する基礎的な技術や能力、企画力や調整力を身につけることを目的としている。本年度は、計 31 名の履修者が 6 つのプロジェクト(観光資源の発掘とオリジナル・クラフトサケの開発: 7 名、特産農産物の販売企画(味間): 8 名、地域おこし協力隊広報: 3 名、おおじみその維持・継承プロジェクト: 4 名、ため池アクション: 6 名、神戸大学フィナンシェを売り出そう: 3 名)に分かれて活動しました。



Annual Report2025 の発行



実践農学入門
(丹波篠山市後川地区)



実践農学「観光資源の発掘とオリジナル・クラフトサケの開発」(三木市)

■兵庫県農業環境論 A/B

兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開を体系的に正しく理解し、批判的に評価した上で、適切な対策を提案する力を養うことを目的としている。

兵庫県農業環境論 A では、兵庫県職員、農水省職員、JA 職員等を講師に迎え、オムニバス形式で講義を実施した（履修者数：90 名）。

兵庫県農業環境論 B では、4 班に分かれて、「兵庫県の農林水産業の現場に継続的に携わる人材を確保するための施策を考えよう」をテーマに、施策立案に向けたワークショップを実施した（履修者数：25 名）。



兵庫県農業環境論 A



兵庫県農業環境論 B

V 東播磨フィールドステーション

東播磨フィールドステーションは、ため池をはじめとする地域資源の新たな管理システムを構築し、地域の持続的な発展を支えるために設置された地域の交流・研究拠点である（2018 年 6 月、加古川市にて開所）。兵庫県東播磨県民局との協働により、開所以来、研究者が駐在する形で諸活動をコーディネートすることで成果を残してきた。2022 年度からは、大学研究者に、ため池管理者、事業者が加わる形で「一般社団法人ため池みらい研究所」を設立し、市民研究所として活動を推進しているが、東播磨フィールドステーションは、それらの活動拠点としての機能を発揮し続けている。

2022 年 8 月には、運営基盤を強化するため、神戸大学農学研究科、京都大学大学院農学研究科、兵庫県立大学地域創造機構、兵庫県東播磨県民局に、ため池みらい研究所が加わる形で連携協定を再締結し、「東播磨地域創生連携協力協定推進協議会」を設立した。昨年度からは、地域連携を支える事業を昨年の 3 つ（地域創造研究、地域人材育成、活動・情報支援）から 6 つ（相談窓口事業、研究事業、交流活動事業、広報活動事業、施設管理事業、推進協議会の運営）に再編成し推進した。

2025 年度の主な取り組み

(1) 調査研究

- ①次世代のため池管理人材の育成プロジェクト
- ②草刈りの継続実施に向けた仕組みづくりプロジェクト
- ③農業・地域資源管理のスマート化プロジェクト

(2) 地域交流活動

- ①地域プレイヤー交流会「なべじゃないと」
計 12 回開催
- ②「神戸大学みらい博士」への協力
- ③ため池みらいフォーラム 2026.2.21 開催
参加者約 200 名
- ④ SNS および新聞等による広報

(3) 施設管理

- ①東播磨フィールドステーションの管理運営



ため池みらいフォーラムの開催

人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート ヒューマン・コミュニティ創成研究センター 「持続可能な社会づくりをめざすプラットフォーム創成支援事業」

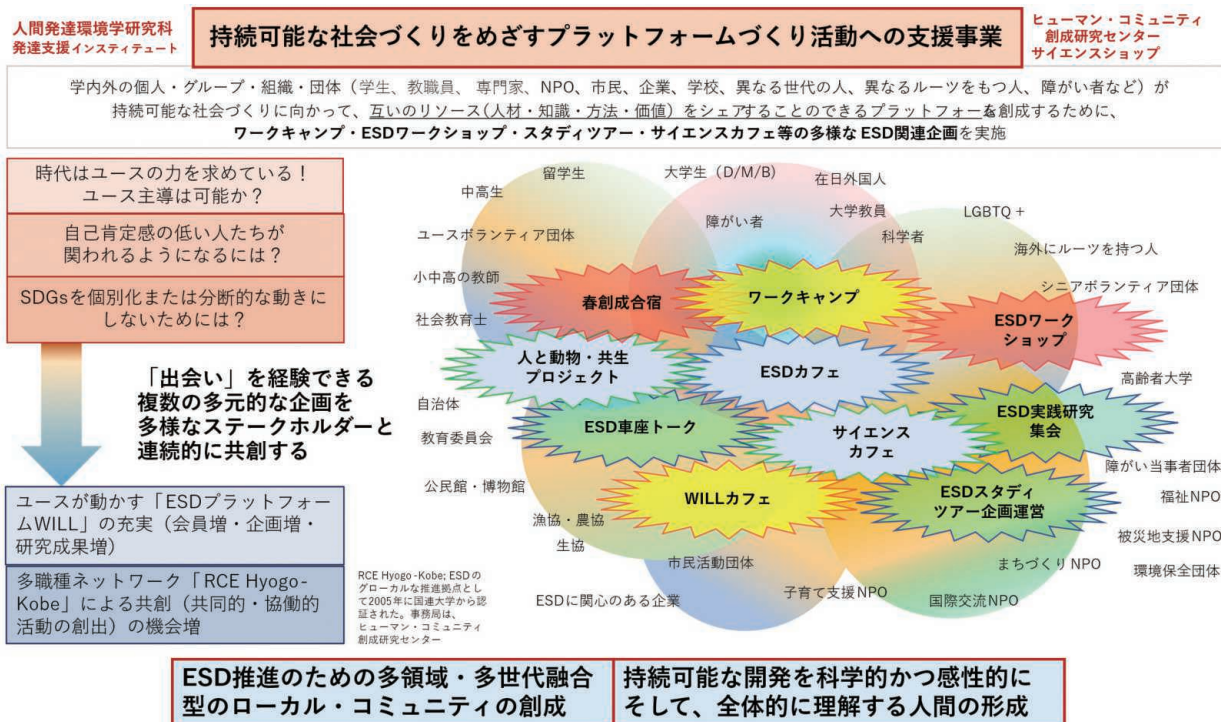
社会の多様な問題状況に応じて、人間発達に関する実践的な研究・教育を行うとともに、地域・外部団体との連携を進め、多層・多面的なコミュニティの創成に資することを目的とする発達支援インスティテュートは、「ヒューマン・コミュニティ創成研究センター」「心理教育相談室」「サイエンスショップ」「教育連携推進室」「アクティブエイジング研究センター」の5つの組織で成り立っている。2006年の発達支援インスティテュート設立以来、地域連携室とパートナーシップを築きつつ、アクションリサーチを展開してきた。

今年度は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「ESD プラットフォーム WILL 支援事業」を助成していただいた。同事業の今年度の概要は、以下のとおりである。

☆大学と学外組織のつながりづくりの実験場—ESD プラットフォーム WILL 支援事業

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2006年より、SDGs（持続可能な開発目標）を教育的アプローチによって実質化するESD（Education for Sustainable Development）の地域推進拠点（RCE兵庫-神戸）事務局として、国連大学から認証されている。ESDの根幹には、人・コミュニティ・システムづくりを連関させて、徐々に、持続可能性を尊重する地球の文化を醸成しようとする理想がある。同センターは、ESDの生起条件・環境づくりを実践的・研究的に推進する拠点であり、神戸大学ESDコースの運営、あいち等の附属施設での教育的事業、フェアトレード学習事業、中山間地域における自然地域共生事業、哲学カフェ開発、ヘルスプロモーション事業、自然災害支援組織化事業など、多様なESD関連事業を企画・実施してきた。今年度も、昨年度同様、多様なテーマに応じて多種多様な事業を実施した。

「ESD プラットフォーム WILL 支援事業」は、そのうちの一つで、「ESD ボランティア育成プログラム推進事業」（2006年～）および「ESD プラットフォーム創成推進プロジェクト」（2018年～）の後継事業である。本HCセンターによってインキュベートされた任意団体「ESD プラットフォーム WILL」（高校生・大学生・若手社会人らのユースを中心に多様な市民やボランティアが連携・協働してESDを創発することを目的として2019年度に創設）を有形無形に支援することを通して、大学と学外組織のつながりづくりとESD実践との有為な関係を明らかにしようとする実験的な事業である。



本団体は、学内外・老若男女・障害の有無・国籍を問わず、多様な個性をもった WILL メンバー、および、大学教員や NPO リーダーによって構成される評議委員会とで構成されている。同組織内の複数のプロジェクト（ルーム）の実行メンバーによって構成される運営委員会およびユース主体の事務局が、互いに柔軟かつ多様な関係を切り結びながら、一般の学生・ユース・社会人に「ESD の立ち現れる出会いを経験し得る仕組み・装置」を提供し、その維持・発展の環境を探究することをミッションとする。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、アクションリサーチとして、この団体の企画創発・運営に協力している。

現在（2026 年 3 月時）、WILL メンバー登録者数は 80 名程度となっている。学内外の大小の組織・ネットワークとも有機的につながり、神戸大学 ESD 関連授業のサービス・ラーニング（社会サービスと正規カリキュラムの連携による学習活動）の一部も担っている。いわば、WILL は、フォーマル教育とノンフォーマル・インフォーマル教育の橋渡しの役割を担う中間媒介組織とすることができる。

■参加者・メンバーの動きを見えやすくするルーム制の採用

WILL の実験的な試みとして、2023 年度から「ルーム制」を試行している。「ワークキャンブルーム」「災害復興支援ルーム」「農村レジリエンスルーム」「居場所づくりルーム」「グローカルツアールーム」の 5 つである。それぞれの主な活動を含む年間行事は、以下の表のとおりである。

事業名		実施日
第一回WILL総会		5月31日
第二回WILL総会		2026年3月27日
WILL冬のESDプログラム		2026年1月24～25日
春創成合宿		2026年2月27～3月1日
ワークキャンブルーム	みかん畑プロジェクト スタッフトレーニングP 邑久光明園納涼祭 夏のワークキャンプ すだち収穫	4月20日、12月6日 5月23～25日 8月7日 8月17～23日 9月27日
災害復興支援ルーム	ばんそうプロジェクト(能登復興支援) 赤崎復興市支援 3月慰霊式典支援	4、5、6、7、8、12、2、3月 6月12～16日、11月6～10日 2026年3月7～12日
農村レジリエンスルーム	田植えボランティア 稲刈りボランティア 黒枝豆ボランティア Re里山プロジェクト ワクワク農村 Re里山合宿 農村とまちをつなぐプロジェクト	5月8、10、11日 9月4、6、7日 6～7月、10月下旬 11月 9月27～28日 随時
居場所づくりルーム	実践仮説検討会 よるあーち 障がいのある青年の生涯学習支援会 「わくわくJOY+」 外国にルーツをもつ子どもたちの学習支援「はいず」 お茶の間ぶちだがしやさん あすパークこどもリビング	2回／月 毎週 毎月 毎週 3～4回／週 毎週火曜
グローカルツアールーム	インド・ムンバイツアー ありんこトリップ きりぎりすカフェ	8月29日～9月11日 随時 4月6日、以降未定

WILL では、これらの多種多様なルームでの活動とともに、それらを連動させる場として様々なメイン活動が実施されている。今年度は、2026 年 3 月 20 日、21 日に国連大学との協力で開催された「第 8 回 ESD 実践研究集会」における ESD ワークショップ、年間を総括し次年度の計画を立てるための春創成合宿に力がそそがれた。また、毎月実施される「定例ミーティング」で、各ルームの活動や課題を共有し、インクルーシブかつホリスティックな学びの場をつくることも大切にされた。

■ RCE 兵庫 - 神戸との連携をベースとするプログラムづくり

国連大学認証組織である RCE 兵庫 - 神戸と HC センターが共同で主催する「第 8 回 ESD 実践研究集会」が実施された。全国から 150 名以上の参加者を迎え、これまで、複数のルームの交流・調整の場として試行されてきた「WILL のつどい」ワークショップを応用し、「実践と研究の交差」に関するワークショップやシンポジウムを企画・運営した。

■ ESD 冬のプログラム／ESD プラットフォーム WILL 春創成合宿による集いの場づくり



神戸大学 ESD プログラムの履修生を参加者として迎え、2026 年 1 月 24、25 日、丹波篠山市において、「WILL 冬の ESD プログラム」を実施した。ボランティアの意味を参加者が相互の交流の中で問い直すとともに、参加者同士の新たなつながりが生まれることがねらいである。参加者は 50 名弱。アイスブレイク、グループビルディング、相互交流ワークショップを経験しつつ、自分の当事者性をさらけ出す感覚を取り戻すプログラムが行われた。

また、2026 年 2 月 27 ～ 3 月 1 日には、岡山県瀬戸内市国立ハンセン病療養所邑久光明園において「春創成合宿」が実施された。参加者は三日間のべ 90 名で、一年の総括と次年度の計画を策定するワークショップやボランティアワークのなかで、各自の当事者性が偶然出会うプロセス（当事者性の邂逅：かいこう）が探究された。

そこでの主な議論は、ESD と SDGs の関係は？ 当事者性の交差が生まれる実践装置とは？ 正統的周辺参加を実質化する組織体制とは？ 体験型活動と他の学びのユニットとの連動を促す仕組みは？ などである。テーマは固いが、参加者それぞれの経験を通して語り合う対話の場が作られた。さらに、ルームの各活動の実践仮説も検討された。何をどうすることで、どのような効果・影響が期待できるのかを、ルームの壁を越えて参加者が協議し合った。合宿型という参加者にとってはハードルの高いプログラムであるが、多元的な視野でものを考える場としての意味は大きい。



■ 能登被災地支援／ハンセン病療養所邑久光明園での「ワークキャンプ」

邑久光明園とは、2007 年夏の第 1 回ワークキャンプ以来、海岸清掃、園内草刈り、園内清掃、自治会・サークルとの交流、つどいの広場の開墾事業、こみよたん活動（マスコットによる啓発活動）、夏祭り・文化祭支援などを通して、深いつながり・信頼を築いてきた。現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科と国立ハンセン病療養所邑久光明園は、2016 年来、教育・研究に関する連携協定を締結している。

今年度は、8 月 17 日～ 23 日、6 泊 7 日のワークキャンプを実施した。参加者は、高校生や一般成人ら 50 名程度（途中参加者を含む）であった。自分自身を見つめなおし、自分の固定観念を問い直す「学びなおし（Unlearn）」を経験することができたとの感想を得た。

また、令和 6 年能登地震・水害被災への集合的な支援として、北陸学院大学等との共同による「ばんそう・

プロジェクト」を継続的に実施した。輪島市門前町・珠洲市の復旧・復興に希望を灯す活動としてほぼ月に1回のペースで現地に赴き、ワークキャンプ方式のボランティア活動を展開している。2026年度も継続する予定である。

■農村レジリエンス・サポート事業



丹波篠山市に拠点をおく NPO 法人ミチノムコウとの共催で、農村や農の現実からサステナビリティを考える農村レジリエンスに関する諸プロジェクトを実施した。農村の柔軟性・復元性を再度呼び起こそうとすることをミッションにおく農村レジリエンスルームは、近年の ESD プラットフォーム創成事業の大きな特徴のひとつとなっている。産業構造の変化、人口動態の都市への偏りのなかで、農村が生き残る方途を探究しつつ、そこで育まれてきたライフスタイルを、持続可能な開発の観点で検討・再評価することをねらいとする。WILL メンバーをはじめ、神戸大学 ESD プログラムの学生たちが、田植え、草刈り、稲刈り、冬作業などの年間行事に体験的に参加するだけでなく、ミチノムコウのメンバーと協働して企画を立案する。例えば、昨年度に始まった「Re 里山プロジェクト」は、古民家活用や農村の自治会交流などの新たな企画を生むに至っている。

■機関紙『季刊 WILL』の発行／SNS による情報発信

WILL メンバーの編集によって、機関紙『季刊 WILL』を、年2回発行した。登録メンバーが、互いに情報を共有する目的であるが、WILL の HP にも掲載されている。WILL では、HP、FB、Twitter、Instagram などの SNS を活用したネットワーク促進事業、RCE ユース会議事務局活動など、複数団体のメンバーの協力の下、さまざまな連携促進の基盤となる事業が展開されている。詳細は、以下の URL を参照のこと。

ESD プラットフォーム WILL ホームページ:ESD WILL | ESD プラットフォーム WILL | 日本 (esd-will.org)

☆企業とのコラボによる新しい拠点づくりへ

RCE 兵庫 - 神戸の協力のもと、民間企業との連携による新しい ESD 推進拠点の運営が検討されている。特に、コープこうべとのコラボによる旧「コープ生活文化センター」を活用し、ESD カフェ、展示会を開催した。今後、ユースの力が大きな役割を果たす可能性を秘めた事業が始まっている。

(ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長 松岡 広路)

国際文化学研究科地域連携センター 「兵庫・関西を中心とする地域文化振興と社会的課題の解決」

国際文化学研究科の研究推進センター（略称:Promis）内に「地域連携センター」発足して4年目となり、これまで構築してきた各地域やコミュニティとのさらなる連携がより強固なものになると同時に、新たな連携先の開拓も行うことができ、着実に前進している。

繰り返しになるかもしれないが、本センターが設立当初から一般して目指してきたのは、「グローバル化が急速に進行しつつある地域社会の文化変容や摩擦を多角的に研究すること」（地域連携センター HP より引用）である。世界中の国々の政治・社会・文化・芸術に精通した本研究科の教員たちが、グローバル化が協力に地域社会にさまざまな局面に入り込んでゆく現在の諸問題の解決に取り組んでいる。

昨年度に引き続き、今年度も本センターは、自治体・NPO・NGO や国際機関との緊密な関係を活かし、観光学や芸術（アート）を通じた地域コミュニティの発展を目指して連携を進めている。一般社団法人・南丹市美山観光まちづくり協会の取り組み「地域に通う、心が通う、課題解決型ラーニングツーリズム事業」が、2022年度に観光庁の「第2のふるさとづくりプロジェクト」のモデル実証事業として採択されて以来、Promis 地域連携センターは国際誘客研究グループが中心となって共同研究を進めてきた。課題解決とは課題の共有であると位置づけ、国際人間科学部の学生たちや留学生の協力も得ながら、京都美山町、神戸市灘区、淡路島、北海道ニセコ町で、ラーニングツーリズムの実地調査を実施している。また、関西テレビならびに阪急交通社の協力のもと、360度カメラを用いたVR観光映像づくりにも取り組んでいる。以下、今年突出した成果をいくつか紹介したい。

1) 新たに開拓したプログラムとしては、神戸市（神戸観光局）の教育旅行プログラム開発への協力があげられる。2022年度（2023年）から、神戸観光局が神戸を代表する企業や公共施設、大学、ボランティア団体等を取りまとめて、神戸オリジナルともいえる産官学連携による教育旅行（中高校生の修学旅行など）「KOBE SDGs 探究プログラム」（<https://www.feel-kobe.jp/kyoiku/>）を開発するにあたり、国際文化学研究科、先端膜工学研究センター、SDGs推進室が連携して、「SDGs・探究学習・キャリア教育」をテーマに『KOBE SDGs 探究プログラム』を開発した。2024年度から、「先端膜工学」のほかに「観光」、「地域振興」、「防災」などをテーマとしたパイロットプログラムをJTB 神戸支店と共同で開発して全国から修学旅行生を受け入れており、その収益の一部は寄付金として神戸大学に還元させている。この動きを深化させるべく、国際文化学研究科と神戸市役所（経済観光局）、神戸観光局、JTB 神戸支店の四者で連携協定を締結する準備を進めようとしている。

2) 神戸大学が2026年2月4日に豊岡市と包括連携に関する協定を締結したが、この包括協定は本地域連携センターのこれまでの豊岡市との連携活動が高く評価された証でもある。本センターは豊岡市とリカレント教育に注力してきた。2024年度に大学の「教育における社会貢献（リカレント教育）推進助成金」を受けて、観光を題材にしたリカレント教育を実施してきたほか、豊岡市でフィールド研修を2回行い、豊岡市や地元の観光事業および地場産業のリーダーと学生たちが交流を行った。豊岡では、国際人間科学部および国際文化学研究科の卒業生が活躍しており、そのネットワークを活かして、今後もGSPプログラムをふくむ教育研究・地域連携を展開する予定である。本センターは本協定の締結後も引き続き地域課題や行政課題の解決に向け、互いの持つ知見や強みを活用した取り組みを行い、活力のある個性豊かな地域社会の形成・発展を目指す。



3) 今年度は国際文化学研究科が独自に赤穂郡上郡町との連携協定を締結したことは地域連携の歴史にとって大きな一歩となった。2年間の連携準備期間を経て、2025年11月24日（月・祝）、上郡町役場・第2庁舎の大会議室において「包括連携協定」の締結式が開催され、上郡町の梅田修作町長と、国際文化学研究科の梅屋潔研究科長が調印書にサイン交わし固い握手を交わした。



現在、過去の地域映像を活用した地域コミュニティの活性化と世代を超えたコミュニティの結束の強化を育むプロジェクトに取り組んでいる。特に今年度は受託研究として、赤穂郡上郡町の過去の歴史が記録された地域映像のデジタル化と調査を行い、それらを使った上映会を実施した。特に本年度は上郡町の郷土資料館と地域住民が所有する1970年代の8mmフィルムをデジタル化し、それらの「ホームムービー」を町の歴史的な映像資料として再活用することで、コミュニティの歴史の開拓することに成功した。2025年は上郡町の「町合併70周年であり、その記念事業のひとつとして地域映像デジタル化プロジェクトは展開した。まず8mmフィルムの募集については『神戸新聞』西播版（2025年5月4日）で、「まちの記憶 デジタル映像化 上郡町が8ミリフィルム募集」という記事で紹介されたことが大きな宣伝効果を持った。11月24日の上映会では、金千秋さんの軽妙な司会のもとで、上郡町郷土資料館の島田学芸員が『御田植祭』『おしめ祭り』など、地元のお祭りの映像について専門的な解説を行った。



いまでは過疎化によって実施できないお祭りの映像も含まれており、地域の貴重な歴史映像としての価値を、世代を超えた50名以上の参加者たちが共有してコミュニティの結束が強化されるイベントとなった。

4) 2024年3月に北海道ニセコ町と本センターが連携協定を締結して以降、ニセコ町立北海道ニセコ高等学校との連携を深めて着実な展開を見せている。本年度は5月にニセコ高校の学生を受け入れたほか、2026年2月1日から10日にかけて、本地域連携センターは昨年に引き続き、国際人間科学部グローバル文化学科と連携し、北海道ニセコ高等学校にて、大学生を対象とした地域連携インターンシップを実施した。今年度の研修に参加したのは、グローバル文化学科4年生の前川健太郎さんです。大学生を対象としたインターンシップの企画立案に向けたパイロットプログラムとしての役割も持つ本企画によって、グローバル文化学科4年生の学生が、北海道ニセコ高等学校の現場に触れるとともに、持続可能な観光やまちづくりを多角的な視点から学ぶ機会を得ました。なお2025年11月にはニセコ町で行われた国連世界観光機関の会議に出席し、新たに就任した町長と面談し、今後の連携強化を再確認することができた。



5) 一般社団法人 南丹市美山観光まちづくり協会 の取り組み「地域に通う、心を通う、課題解決型ラーニングツーリズム事業」が、2022年度に観光庁の「第2のふるさとづくりプロジェクト」のモデル実証事業として採択されて以来、Promis 地域連携センターは国際誘客研究グループが中心となって共同研究を進めてきた。課題解決とは課題の共有であると位置づけ、国際人間科学部の学生たちや留学生の協力も得ながら、今年は「GSP 京都美山 2025 冬」のプログラムを実施し、「京都美山で観光まちづくりを学ぶ」をテーマに多くの学生に参加してもらった。本プログラムは、かやぶきの里として知られる京都府南丹市美山町（みやまちょう）をフィールドとして、観光まちづくりについて学ぶことを目的とする。毎年人口が約100人減少している美山は、少子高齢化に直面している地方（とくに中山間地域）の典型である。その美山では、地域の自然と文化を活かした観光によるまちづくりの取り組みが進められてきた。その取り組みは近年、世界的に評価を受けるようになり、2021年にはUN Tourism（国連世界観光機関）加盟の75か国174地域のなかでベスト・ツーリズム・ビレッジ（BTV）のひとつに選定された。この選定をひとつのきっかけとして、美山では現在、国内外の地域と連携をとりながらサステナブルツーリズムを推進している。

そこで本プログラムでは、少子高齢化に直面している美山が、国内外の地域とネットワークをつくりながら進めている、観光をつうじたまちづくりについて学ぶ。具体的には美山町で観光まちづくりを推進している地元の方々に直接、お話を聞き、現地の具体的な課題について実践的に学ぶとともに、モニターツアーに参加し、美山で取り組まれている観光を実際に体験する。

6) 2024 年 10 月 11 日から 13 日にかけてに神戸映画資料館で開催された「神戸発掘映画祭 2025」の企画運営委員として本研究科の板倉史明が協力し、ホームムービーデーの企画にかかわったほか、アメリカから日本へ返還された戦時下の映画の歴史についての解説も行った。



7) 2026 年 2 月 13 日 将来的なりカレント教育の打ち上げを見据えて、「神戸大学観光未来サロン in 大阪」を開催した。これは 2025 年 9 月に東京で「神戸大学観光未来サロン」を開催して好評だったことを受け、大阪でも発展し開催することになった。本イベントでは、広く観光業に携わる神戸大学の関係者が集い、「交流」と「学び」を通じて新たなアイデアやコラボレーションを創出することで、観光業界全体を盛り上げ、未来への発展に向けたきっかけをつくることが目指された。2 回目となる今回は、本学出身者である蔭山秀一・ロイヤルホテル会長にご協力いただき、「リーガロイヤルホテル大阪 ヴィニエット コレクション」を会場として開催され、神戸大学卒業生・リカレント修了生・教職員で観光業に携わる方及び観光分野に関心を持つ多くの方々に参加して盛況となった。

海事科学研究科地域連携センター 「海事科学研究科－東灘区、神戸市との連携事業の推進」

〔概要〕

海事科学研究科地域連携センターは、2022 年（令和 4 年）4 月に開設された。その前年 4 月に、学部組織が海事科学部から海洋政策科学部に改組され、地域に根ざした学部・研究科として、益々活発な地域連携活動が期待されている。さらに 2022 年 3 月には、これまで 35 年間本部局（前身の神戸商船大学を含む）の海技士教育を支えてきた練習船深江丸に代わる新船として、多機能練習船海神丸をキャンパスに迎えた。この大きな節目と重なり、新学部をこれから大きく発展させていくためにも、本センターが研究科の拠点となり地域連携を推進していく。2025 年度は、これまで継続してきた神戸市東灘区との連携による地域の児童生徒への体験型スクールと合わせて、海事博物館での小学生対象イベントの開催について、センターとして活動に関わった。それらの活動の概要を以下に報告する。

〔活動内容〕

1. こどもいろいろ体験スクール

「こどもいろいろ体験スクール」は、神戸市東灘区と区内の 6 大学（甲南女子大学、神戸国際大学、頌栄短期大学、甲南大学、神戸薬科大学、神戸大学海洋政策科学部）が連携し、神戸市東灘区在住の小・中学生を対象に、夏休み期間に各大学の特色を活かした講座を実施する事業である。本部局は 2011 年度から本事業に参加しており、地域の大学として本学に親しみを持ってもらうとともに、体験学習を通して海や船の面白さを実感してもらうことを目的としている。

本年度は当初、練習船の見学やヨットへの体験乗船など屋外プログラムを中心とした講座を計画していた。しかし開催前日にカムチャッカ半島付近で地震が発生したことを受け、安全面を最優先に検討した結果、屋外での活動は中止し、屋内プログラムに内容を変更して実施することとした。

イベントは予定通り 2025 年 7 月 31 日（木）の 9 時半～12 時半に実施され、小学生 12 名が参加した。プログラムでは、まず海事博物館の見学を予定通り実施した。案内は本研究科の渚准教授にご担当頂き、船舶や海洋に関する展示資料の解説を行い、船の構造や海事の歴史、船員の仕事などについて学ぶ機会を提供した（pic1-1）。参加者は模型船や各種展示に興味を示し、説明に耳を傾けながら熱心に見学している様子が見られた。質疑応答の時間では多くの質問が寄せられ、海や船に対する関心の高さがうかがえた。また、乗船体験の代替プログラムとして、渚准教授の研究室の皆様の協力を得て、船におけるホスピタリティを表す「花毛布」の制作体験を行った（pic1-2）。講師の実演を見た後、参加者はタオルを用いて様々な花の形を作ることに挑戦し、完成した作品を互いに見せ合いながら楽しんでいる様子が見られた。船のおもてなし文化の一端に触れるとともに、参加者にとって印象に残る体験となったようであった。

当初予定していた乗船体験などの屋外活動を実施できなかった点は残念であったが、博物館見学を中心とした屋内プログラムにおいても、海事分野の魅力や船の役割について理解を深めてもらうことができたと考えている。参加者は終始楽しそうな様子であり、和やかな雰囲気の中でイベントを進めることができた。参加者へのアンケート結果（pic1-3）からも、今回のスクールが概ね好評であったことが確認された。内容について「楽しかった」「興味深かった」といった感想が多く寄せられ、海や船に関する新しい知識を得ることができたという回答も見られた。また、今後も同様の体験イベントに参加したいという意見も複数寄せられており、本イベントが地域の子どもたちにとって有意義な学習機会となったことがうかがえる。屋外プログラムが実施できない状況であったにもかかわらず、参加者に満足してもらえる内容となったことは、本事業の意義を示すものといえる。

また、本事業の実施にあたり、東灘区役所には企画調整や参加者募集など多大なご協力を頂いた。ここに記して感謝申し上げます。



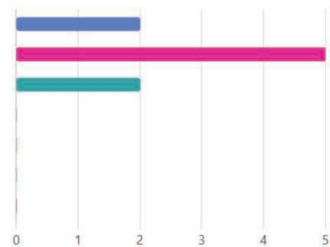
pic1-1 海事博物館見学の様子



pic1-2 花毛布作りの様子

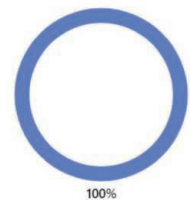
2. ご参加いただいたお子様の学年を教えてください。

● 小学3年生	2
● 小学4年生	5
● 小学5年生	2
● 小学6年生	0
● 中学1年生	0
● 中学2年生	0
● 中学3年生	0



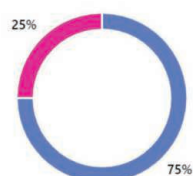
5. 今後、体験プログラムがあればまた参加しますか？

● ぜひ参加したい	8
● 都合があれば参加したい	0
● 参加しない	0



3. プログラムの内容はいかがでしたか？

● 満足した	6
● 普通	2
● 物足りない	0



pic1-3 参加者アンケート結果

2. 神戸大学海事博物館夏休みワークショップ「タオルアニマルをつくろう～客船のサービスに親しむ～」の開催（海事博物館主催イベント）

海事博物館主催の夏休みワークショップとして、8月4日（月）、8月8日（金）に「タオルアニマルをつくろう～客船のサービスに親しむ～」を開催した。各回とも梅木Nホールを使用し、午後に1時間の時間をとって開催した。講師は明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部の上杉教授と、人文学研究科の菊地准教授に1日ずつご担当いただき、小学生とその保護者がタオルアニマルの作製に挑戦した。計2日間の参加者は、子どもと保護者26名が参加した。以下、第1回目の様子を報告する。

初めに上杉先生より、日本の旅客船の客室を飾ってきた「花毛布」が紹介された。この花毛布は、ベッドで使う毛布を花の形などに折り上げる「船のおもてなし」で、100年以上前から引き継がれていることが説明された。海外でも同様に、クルーズ船やホテルの客室ベッドに、客室用タオルを用いた可愛い犬や豪華な鶴の造形が、「タオルアート」として飾られているそうである。どちらも相手（お客様）へのおもてなしの心（深い思いやり）が具現化したものであることが説明された。

次に、上杉先生と明海大学の学生および神戸大学の学生が、子どもたちのテーブルに2～3人ずつ分かれて、タオルアニマルの作り方を指導していった（pic2-1）。まず「ペンギン」を作り、その後「ぞうさん」「スワンハート」づくりに挑戦した。「ペンギン」は参加記念でお持ち帰りいただき、他の動物たちは作って、記念撮影をして、崩してまた次の動物を作って・・・と作業をしていった。

子どもたちがペンギンなどを作るたびに、完成に喜んで一緒に写真を撮っているのが印象的であった。最後は、二羽の白鳥が向かい合ってハートを形取る「スワンハート」を仕上げ、にぎやかなタオルアニマルの動物園のようになり、大いに盛り上がっていた（pic2-2）。

最後に上杉先生から、ご家族に日頃の感謝やありがとうの気持ちとしてタオルアニマルを作って贈り、「おもてなしの文化」を楽しんで欲しい、とお話しいたできて、閉会となった。上杉先生、そして参加者の作業を補助して下さった明海大学上杉ゼミの学生、本学の学生アルバイト諸氏に、心からお礼申し上げる。



pic2-1 ワークショップの様子



pic2-2 ワークショップの様子

経済経営研究所地域共創研究推進センター 「地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進」

背景・目的

経済経営研究所は、神戸大学の新ビジョンを具現化するために、2023年4月に、地域共創研究推進センターを設置した。同センターは、地方自治体、地域企業、地域金融機関、地域支援団体などがそれぞれの特徴と幅広い知見を生かして地域社会の課題解決を進めていく上で、ハブ的な機能を果たすことを目指している。

2025年度取組としては、地域共創による兵庫県の中小企業支援を推進していくために、地方自治体（兵庫県、公益財団法人ひょうご産業活性化センターなど）、国（近畿財務局、近畿経済産業局、近畿地方環境事務所など）、地域金融機関（尼崎信用金庫、姫路信用金庫、但馬信用金庫、信金中央金庫、株式会社エフアンドエムなど）、公的金融支援組織（兵庫県信用保証協会、日本政策金融公庫など）などに参加してもらいながら研究活動を継続的に実施した。それらの活動を通じて、関係者の交流が促進され、施策の横展開についての共通理解が深まった。

また、神戸大学の地域貢献として、その研究成果を社会に発信するために講演活動を行うとともに、一般向けシンポジウムを開催し、さらに当該シンポジウムおよび関連研究成果を印刷物の形で発表することで、関係者の連携の強化に貢献することを目指した。

活動の概要

（1）シンポジウム「共創する ESG 地域金融 - 信用金庫の連携による実践知の共有」

（2025年7月15日 神戸大学出光記念講堂）

信用金庫をはじめとした地域金融機関は、取引先企業と日頃から密接な関係性を構築して、その事業性をしっかりと理解し、幅広い支援を行っている。ただ、従来の事業性評価においては、必ずしも環境や社会の観点を取り込めていない。しかし、近年、環境や社会の要因が企業経営の制約となるとともに、新しいビジネスチャンスとも認識されるようになってきた。そこで、ESG要素を事業性評価に取り込むことが求められている。

当センターと尼崎信用金庫は、2022年度より「ESG要素を考慮した事業性評価の深化を通じた地域における事業者支援体制構築の推進」に関する共同研究を実施してきた。

そこで、共同研究を通して精緻化してきた ESG 要素を考慮した事業性評価の取り組みを紹介し、今後の地域金融の在り方を考えることを目的とし、本シンポジウムを開催した。

まず、作田誠司理事長（尼崎信用金庫）、柴田弘之理事長（信金中央金庫）による挨拶に続き、第1部では、家森信善教授が

神戸大学経済経営研究所地域共創研究推進センター
神戸大学社会システムイノベーションセンター
神戸大学経済経営研究所主催 公開シンポジウム

KOBE UNIVERSITY RIEB KUSI

神戸大学・尼崎信用金庫 共同研究成果発表
「共創するESG地域金融 - 信用金庫の連携による実践知の共有」

2025 7/15 火
13:20 - 17:00

会場：神戸大学出光佐三記念六甲台講堂
ハイブリッド開催
定員：先着150名（対面）
先着300名（オンライン）
締切：7月13日（日）

神戸大学と尼崎信用金庫は、2022年度からESG要素を考慮した事業性評価の実装に取り組んできました。2024年度からは、顧客企業の本業支援にESG要素を組み込むことの重要性について共創の価値観を持つパートナーとして、兵庫県内の信用金庫に加え、他地域の信用金庫とも連携し、活動を本格化させています。本シンポジウムでは、これまでの連携を通じて得られた知見を共有するとともに、ESG地域金融のさらなる深化に向けた方策について議論を深めます。

神戸大学 & 尼崎信用金庫

総司会 荒木 千秋 / 大阪電気通信大学メディアコミュニケーションセンター 特任講師・神戸大学経済経営研究所 非常勤講師

主催者挨拶 作田 誠司 / 尼崎信用金庫 理事長
柴田 弘之 / 信金中央金庫 理事長

基調講演① 「ESG地域金融の展開と裾野拡大への課題ー広域連携への期待ー」
家森 信善 / 神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長

基調講演② 「ESG地域金融への期待」 (仮題)
平尾 祐秀 / 環境省大臣官房 環境経済課長

取組発表
澤 成之介 / 尼崎信用金庫 ESG地域金融の推進と広域連携の取り組み (仮題)

評価シートを活用した支援事例報告
松下 誠吾 / 株式会社フクコ 代表取締役
福島 将之 / 尼崎信用金庫 尼崎支店長

協定説明
井上 公宏 / 「4金庫によるESG地域金融促進のための広域連携協定について」 (仮題)
尼崎信用金庫 信託創造事業部 執行役員部長 兼 法人ソリューショングループ長

4金庫の連携協定締結式
パネルディスカッション 司会 家森 信善
「ESG地域金融の広域連携の経験と展開」

パネリスト (50音順)
井倉 貴 / 福岡ひびき信用金庫 理事長
大塚 琴美 / 信金中央金庫 サステナビリティ推進部長
作田 誠司 / 尼崎信用金庫 理事長
高柳 裕久 / 福岡ひびき信用金庫 理事長
竹ノ原 啓介 / 政策研究大学院大学 教授・神戸大学経済経営研究所 客員教授
堤 和也 / 川崎信用金庫 理事長
平尾 祐秀 / 環境省大臣官房 環境経済課長

閉会の挨拶 西谷 公孝 / 神戸大学経済経営研究所長

参加をご希望の方は、以下に記載の【WEB申し込みフォーム】によりお申し込みください。
【WEB申し込みフォーム】は神戸大学経済経営研究所のホームページにあるお知らせからもリンクしています。
神戸大学経済経営研究所 WEB申し込みフォーム <https://www.ocans.jp/kobe-u/fid-lwsMwBNL>

お申し込み方法
お申し込み窓口
E-mail: sympo@rieb.kobe-u.ac.jp
お電話でのお申し込み、お問い合わせはご遠慮ください。

主催 神戸大学経済経営研究所、尼崎信用金庫、神戸大学社会システムイノベーションセンター
後援 (予定) アジア太平洋研究所、尼崎市、尼崎商工会議所、大阪府銀行協会、近畿経済産業局、近畿財務局、近畿地方環境事務所、神戸商工会議所、信金中央金庫、兵庫県、兵庫県信用保証協会

「ESG 地域金融の展開と裾野拡大への課題－広域連携への期待－」と題し、続いて、平尾禎秀・環境省大臣官房環境経済課長が「ESG 地域金融への期待」と題して基調講演を行った。

次に、潮成之介・尼崎信用金庫総合企画部長が、「尼崎信用金庫の ESG 地域金融の推進と広域連携の取り組み」と題した報告を行い、評価シートを活用した実践事例報告として、松下誠吾・株式会社フクユ代表取締役と福島将之・尼崎信用金庫昆陽里支店長による報告が行われた。同報告では、ESG 要素を考慮した 3 種類の事業性評価シート（選択式設問シート・ESG 要素を考慮したローカルベンチマーク・ESG 課題評価シート）を用いた実践により、ESG に関する客観的な視点を得るとともに、自社の課題や強みを俯瞰的に把握でき、取組の方向性が明確になり、尼崎信用金庫と長期的な視点で課題を共有でき、両者の信頼関係がより深まったことが報告された。

引き続き、井上公宏・尼崎信用金庫価値創造事業部部長兼法人ソリューショングループ長から、川崎信用金庫、浜松いわた信用金庫、福岡ひびき信用金庫および尼崎信用金庫の「4 金庫による ESG 広域連携協定」についての説明があり、連携協定締結式が行われた。

続く第 2 部では、家森信善教授の司会により、「ESG 地域金融の広域連携の経験と展開」をテーマにパネルディスカッションを行った。井倉眞・福岡ひびき信用金庫理事長、大塚琴美・信金中央金庫サステナビリティ推進部長、作田誠司・尼崎信用金庫理事長、高柳裕久・浜松いわた信用金庫理事長、竹ヶ原啓介・政策研究大学院大学教授（神戸大学経済経営研究所客員教授）、堤和也・川崎信用金庫理事長、平尾禎秀・環境省大臣官房環境経済課長がパネリストとして参加し、今回の共同研究の意義と今後期待される展開について議論を行った。4 金庫からは積極的に進めている ESG 取組の状況について報告が行われ、信金中央金庫が中心となり、全国の信用金庫を巻き込んだ「しんきんグリーンプロジェクト」についての紹介もあった。

個々の金融機関が単独で十分な ESG 支援を顧客に提供するのは難しく、様々な連携先との有効な関係を構築することが必要であるが、今回の 4 金庫広域連携協定は、各金庫間での情報共有を可能とし、ESG 知見を備えた人材の育成等にも有益であり、今後の ESG 地域金融の推進が期待されると総括された。最後に、西谷公孝・経済経営研究所長から、御礼の挨拶があった。

シンポジウムはハイブリッド形式で行われ、出光佐三六甲台講堂に直接来場いただいた 120 名、Zoom ウェビナーで参加された 215 名、計 335 名もの企業・組織と個人の方に参加していただいた。また、本シンポジウムは、サンテレビ（NEWS × 情報 キャッチ+ 2025 年 7 月 29 日放送）で取り上げられた。



（2）シンポジウム「持続可能な地域経済に向けて－経営者保証に依存しない融資慣行の実現」

（2025 年 10 月 31 日 神戸大学六甲台第一キャンパスフロンティア館）

神戸大学経済経営研究所は、株式会社エフアンドエムに対して 2017 年度から学術指導を実施し、2022 年度からは共同研究契約に基づいて中小企業金融の高度化に向けた研究を進めてきた。この間、研究成果をとりまとめた書籍への寄稿やシンポジウムへの登壇など、研究成果の発信の面でも多くの協力をいただいている。

本シンポジウムは、経営者保証に過度に依存しない融資慣行の確立に向けて、①既に先進的に取り組んでいる金融機関が、どのような工夫や実践を重ねているのか、②経営者保証に依存しない融資慣行の定着が、中小企業・地域経済にどのようなメリットをもたらしているのか、③この方向性を一層推し進めるために、解決すべき課題は何か、といった観点で理解を深めるために、株式会社エフアンドエムと共催の形で開催した。

最初に小橋英治・株式会社エフアンドエム取締役経営サポート事業本部本部長による開会の挨拶があり、第1部では、3つの基調講演が行われた。まず、家森信善教授が「経営者保証に依存しない融資慣行確立の意義と課題－RIETI支店長アンケートからの含意－」について、2番目に石山裕二・金融庁監督局総務課監督調査室長が「経営者保証に依存しない融資慣行の確立に向けて」について、3番目に渡辺宜毅・株式会社エフアンドエム経営サポート事業本部企業支援グループ副事業部長が「中小企業にとっての経営者保証」について講演を行った。

第2部のパネルディスカッション「経営者保証を超えて－金融・企業・専門家が共創する金融の未来」では、家森信善教授の司会により、足立琢磨・山陰合同銀行融資部部長、石山裕二・金融庁監督局総務課監督調査室長、井上能秀・兵庫県信用保証協会常勤理事、大川洋司・枚方信用金庫理事長、日下智晴・元金融庁地域金融企画室長（神戸大学経済経営研究所客員教授）、山本佳宏・株式会社エフアンドエム経営サポート事業本部副本部長のパネリストにより議論が行われた。各金融機関からは、地域の企業を支える側として、「経営者保証に関するガイドライン」の取組状況や、経営者保証に依存しない融資の取り組みの工夫が紹介された。また、兵庫県信用保証協会からは、漫画を掲載したリーフレットの作成・配布によるユニークな広報活動も含めて、保証協会の取り組みが紹介された。

今後の金融機関の方向性を考える上でのキーワードとして「メインバンク」や「事業性評価」の重要性が指摘され、金融機関と企業の円滑な連携の必要性が確認された。また、「経営者保証を外すこと」自体が目的化してしまっていて、肝心の経営改善や健全な経営体制の構築が後回しになってしまうことのないように取り組むことが必要であるとの意見や、経営者保証に依存しない融資慣行が企業価値担保権の取り組みにつながるといった意見が共有された。

最後に、西谷公孝・経済経営研究所長から閉会の挨拶があった。なお、本シンポジウムは対面参加者を絞ったハイブリッド形式で行われ、合計135名の企業・組織と個人の方にご参加いただいた。

神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター
神戸大学社会システムイノベーションセンター
公開シンポジウム

2025
10.31 金
13:30-16:30
ハイブリッド開催
神戸大学六甲台第一キャンパス
フロンティア館3階
プレゼンテーションホール
会場
定員 先着 70名（対面）
先着 300名（オンライン）
下記、WEB申込フォームよりお申し込みください。
締切：10月29日（水）

持続可能な地域経済に向けて
－経営者保証に依存しない融資慣行の実現－

本シンポジウムでは、経営者保証に過度に依存しない融資慣行の確立に向けて、
①既に先進的に取り組んでいる金融機関が、どのような工夫や実践を重ねているのか、
②経営者保証に依存しない融資慣行の定着が、中小企業・地域経済にどのようなメリットをもたらしているのか、
③この方向性を一層推し進めるために、解決すべき課題は何か、といった点について理解を深めます。
本日の議論を通じて、金融機関・専門家・企業が共に考え、行動を重ねることで、地域の中小企業がより健全で力強く成長できる金融環境づくりにつなげていきたいと思います。

総合司会：荒木 千枝 大阪電気通信大学メディアコミュニケーションセンター 特任講師・神戸大学経済経営研究所 非常勤講師
■ 13:30-13:35 開会挨拶 小橋 英治 株式会社エフアンドエム取締役 経営サポート事業本部 本部長
■ 13:35-13:50 基調講演①
家森 信善 神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長
「経営者保証に依存しない融資慣行確立の意義と課題－RIETI支店長アンケートからの含意－」
■ 13:50-14:10 基調講演②
石山 裕二 金融庁 監督局 総務課 監督調査室長
「経営者保証に依存しない融資慣行の確立に向けて」
■ 14:10-14:40 基調講演③
渡辺 宜毅 株式会社エフアンドエム 経営サポート事業本部 企業支援グループ 副事業部長
「中小企業にとっての経営者保証」
■ 15:00-16:20 パネルディスカッション
「経営者保証を超えて－金融・企業・専門家が共創する金融の未来」
司会：家森 信善 神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長
登壇者：足立 琢磨 山陰合同銀行 融資部長
石山 裕二 金融庁 監督局 総務課 監督調査室長
井上 能秀 兵庫県信用保証協会 常勤理事
大川 洋司 枚方信用金庫 理事長
日下 智晴 元金融庁地域金融企画室長・神戸大学経済経営研究所 客員教授
山本 佳宏 株式会社エフアンドエム 経営サポート事業本部 副本部長
■ 16:20-16:30 閉会挨拶 西谷 公孝 神戸大学経済経営研究所長

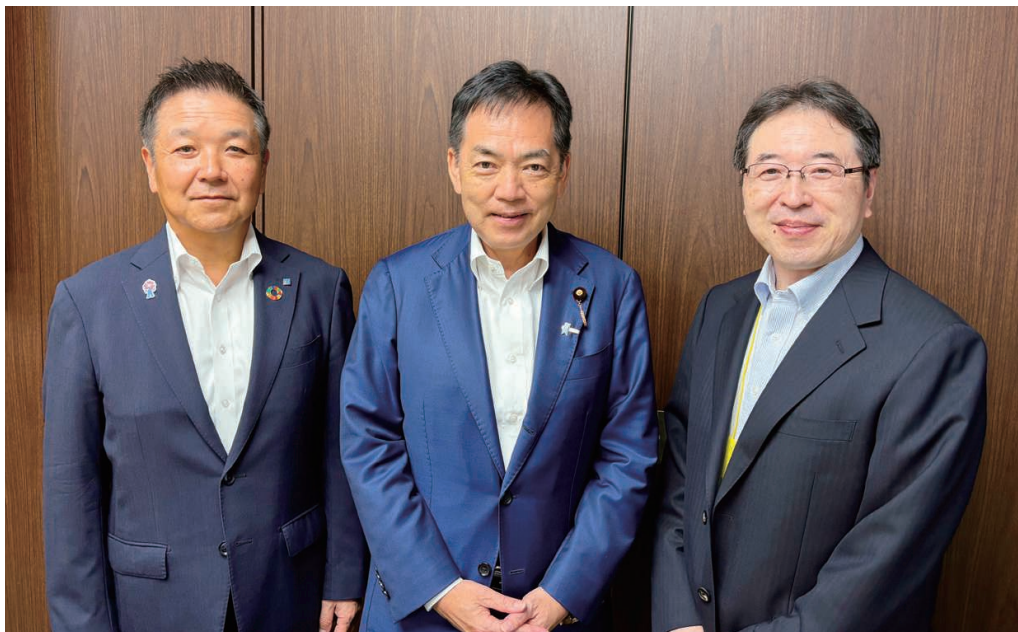
参加 参加を希望の方は、以下に記載の【WEB申込みフォーム】によりお申し込みください。
申込 WEB申込みフォームは神戸大学経済経営研究所のホームページトップにあるお知らせからもリンクしています。
申込 神戸大学経済経営研究所 検索 WEB申込みフォーム <https://www.ocans.jp/kobe-u?rd=jmJraSXX>
問合せ 神戸大学経済経営研究所（公開シンポジウム）担当 E-mail: sympo@rieb.kobe-u.ac.jp
〒653-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台2-1 お電話でのお申し込み、お問い合わせはご連絡ください。

主催 神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター、神戸大学社会システムイノベーションセンター
共催 株式会社エフアンドエム
後援（予定） 近畿財務局、近畿経済産業局、一般社団法人大阪銀行協会、兵庫県、兵庫県信用保証協会、神戸商工会議所、一般財団法人アジア太平洋研究所

（３）地域金融コンファレンスの開催（2025 年 9 月 1 日）と浅尾慶一郎環境大臣（当時）の登壇

当センターが主催する「第 19 回 地域金融コンファレンス」（信金中央金庫本店）において、浅尾慶一郎環境大臣（当時）に特別講演をお願いし、パネルディスカッションにも参加いただいた。

同コンファレンスは、神戸大学経済経営研究所と信金中央金庫との共同研究による成果報告会も兼ねたものである。その模様は、『信金中金月報』（2026 年 1 月号）に掲載された。



左から、須藤 浩・信金中央金庫副理事長、浅尾慶一郎・環境大臣、家森信善・神戸大学教授

（４）シンポジウム関連書籍の出版

家森信善編『個人と地域から創る ESG 金融—広域連携による持続可能な社会の実現—』神戸大学出版会 2026 年 3 月。

今後の展望

2025 年度は、学外の様々な機関の協力を得て活動を進めることができた。2026 年度においても、尼崎信用金庫様や兵庫県信用保証協会様等との共同研究を進めることとしている。大学の研究知見と地域の実務知を結び付けることで、兵庫県における中小企業支援の実効性を高める取組を引き続き進めていきたい。



法学研究科パブリック・コミュニケーション・センター 「地域連携に基づく「脱炭素化・地域課題解決」に向けた複眼的教育と実践」

【活動先】

兵庫県洲本市

【連携先】

兵庫県洲本市，株式会社 NSKK ホールディングス

【背景と目標】

法学部・経済学部および法学研究科・経済学研究科ではかねてより，地球環境戦略研究機関（IGES）関西と連携しながら，「脱炭素社会の地域づくり」という授業を実施してきた。温室効果ガス排出量が実質ゼロとなる脱炭素社会を構築するためには，技術的变化に加えて，土地・都市・交通・建物・産業システムなど社会経済システム全体に及ぶ変化が必要であることから，同授業では政府・自治体・企業などの第一線の実務家を招聘し，さまざまなアクター・ステークホルダーの視点・取組を受講生に紹介している。しかるに，実際の課題解決と社会実装にとっては，こうした複眼的視点の涵養に加えて，関係者・市民が主体的に課題解決へ取り組む実践的作業も行われることが有意味である。そこで，本取組では，「脱炭素社会の地域づくり」をスプリングボードとしながら，学生参加型フィールドワークを企画・実施して，学生・教職員が協力しながら具体的な地域的課題の解決に向けた課題解決能力を高めることを目標とする。あわせて，法学研究科で組織しているパブリック・コミュニケーション・センターを地域連携活動の一つのハブへと展開させることを目指す。

【活動内容】

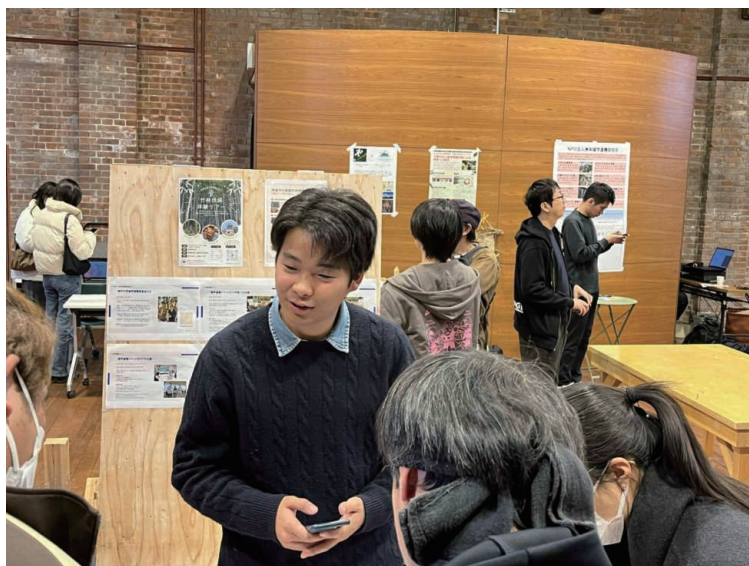
- (1) 前年度に引き続き，2025年5月23日に，脱炭素社会の実現に向けた実践を行っている関西・山陰地域の市民活動家などを神戸大学に招いて，カーボンニュートラルの実現に向けて一人ひとりの市民や企業・団体などがどのような取組を行うことが必要であるかについてディスカッションを実施するとともに，参加者間でカーボンニュートラル化へのシミュレーションを実施した。
- (2) 同じく前年度に引き続き，2025年6月14日・15日に，法学研究科パブリックコミュニケーションセンターのイニシアティブで，学生・教員が兵庫県洲本市に訪問し，洲本市の地域的課題である放置竹林問題の解決に向け，洲本市職員および市内関係者に指導を受けるとともに，フィールドワークを実施した。竹は生育速度が非常に速く，また地下茎が浅く横に広がっていくという特徴を持っていることから，いったん竹林の管理がなされなくなると，急激に広範囲に亘って荒廃していき，獣害や土砂災害のリスクも高まる。全国的に生じているこの問題について，洲本市では，バイオマス熱利用の原料として竹チップを活用したり竹由来の特産品を開発したりと，先駆的な取組を行っている。本フィールドワークでは，洲本市の積極的な取組について説明を受けたうえで，どのような活動が問題解決・改善に資するかについて，学生たちがさまざまな議論・検討を行い，その内容を市職員・市内関係者と共有した。



(3) 昨年度の活動を機縁として、関心を継続的に有する学生が洲本市職員・市民と連携して引き続き放置竹林問題の解決に向けた協議を行なうためのプラットフォームとして、参加学生の主導のもと発足した「神戸大学域学連携推進会」が、引き続き活動を行ない、2025年11月の六甲祭において、洲本市の放置竹林問題の周知をはかる出店を行ったうえで、12月20日に、兵庫県洲本市でのフィールドワークを実施し、洲本市の地域的課題である放置竹林問題の解決に向け、洲本市職員および市内関係者に指導を受けた。参加した学生は、地域資源の循環的活用や持続可能な竹林の管理の重要性について学修・検討を行った。



(4) 同会はさらに、2026年2月14日には、洲本市で開催されたイキガク EXPO 2026 (<https://sites.google.com/view/ikigakuexpo2026/>) に参加し、活動に関するプレゼンテーションを行なった。域学連携推進会の活動については会のinstagramも参照 (<https://www.instagram.com/kobeikigakurenkei/> 2026年3月25日現在)。



(5))2026 年 2 月 16 日に神戸大学大学院法学研究科，洲本市および株式会社 NSKK ホールディングスとのあいだで連携協力協定を締結した。同協定は，洲本市における里山・里海等の課題解決や資源利活用に向けた社会連携の充実を目的とするもので，上記の活動，および昨年度の活動の成果として，より組織的に域学連携活動を推進するために締結されたものである。神戸市灘区に本拠を置きつつ洲本市での農業事業などを通じて域学連携活動を支援している NSKK ホールディングスを含めた三者協定となっていることも，本協定の特徴のひとつである。



【今後の展望】

洲本市およびNSKKホールディングスとの間で締結された連携協定に基づく活動を着実に実施していくことが26年度の重要な課題である。そのために，洲本市における活動に関心を持っている教員および学生を効果的にリクルートしていくとともに，IGES 関西の協力のもと26年度も開講される「特別講義 脱炭素社会の地域づくり」，および同じくIGES 関西の尽力により26年度に新規開講される「特別講義 地域からつくる脱炭素社会：基礎編」を通じて，脱炭素化にかかわる地域的課題に対する学生の関心を広く喚起していく。域学連携推進会の活動の中心を担ってきた学生が課程を修了し，26年度には在学しないので，会としての組織的活動を活性化させるよう，教員として注力していくことも考えている。

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび 丹波篠山フィールドステーション 「農山村創成のための拠点形成と人材育成事業」

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび丹波篠山フィールドステーションは、神戸大学と丹波篠山市が連携し、地域の発展に資する研究と実践的な人材育成を目指して、“生きた現場”での研究・教育活動を進めるための拠点施設である。また、学生や研究者が丹波篠山市で活動するための情報収集・研究支援の場、地域住民等と大学のネットワーク形成の場となることを目指している。2022年度には、地域の人材育成機能の強化を目的に組織再編をすすめ、「一般社団法人丹波篠山キャピタル」を市と大学の協力のもと設立した。丹波篠山キャピタルには、農学研究科地域連携センターで担っていた「丹波篠山市地域おこし協力隊コーディネート」業務を移管し、「篠山イノベーターズスクール」と一体的に人材育成事業をおこなっている。

令和7年度は地域連携を支える以下の3つの事業（地域創造研究、地域人材育成、活動・情報支援）を推進した。

I 地域創造研究

本年度は、農学研究科地域連携センターの駐在研究員により、丹波篠山市の政策提言につながる複数の共同研究が進められた。また、神戸大学等の研究者等が丹波篠山市で実施する調査研究の支援を通じて、地域の発展と、他地域へ展開可能な地域課題の解決に資する実践的な知の創造を目指した。

■地域共同研究（9テーマ）

1. 地域づくりコーディネーターの課題と育成手法
安部梨杏（丹波篠山 FS）、中塚雅也（農学研究科）、丹波篠山市地域振興課
2. 丹波篠山市内の祭囃子等の保存・伝承
三原香奈子（丹波篠山駐在コーディネーター）、安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）
3. 兵庫県丹波篠山市における市史編さん事業のための研究と検討
古市晃（人文学研究科教授）、松本充弘（人文学研究科特命助教）
4. 兵庫県丹波篠山市に連続分布するニホンザル群の農地利用特性と被害軽減に関する実践的研究
清野未恵子（人間発達環境学研究科准教授）、福田伊津子（農学研究科助教）
5. 野生動物と人社会の軋轢問題解決のための p4c を応用した対話手法の開発
清野未恵子（人間発達環境学研究科准教授）
6. 地産地消を支える小規模流通システムの開発
中塚雅也（農学研究科）
7. 兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発
長野宇規（農学研究科）
8. 丹波篠山有機黒枝豆の販路選択に関する意思決定過程の解明
八木浩平（農学研究科）
9. 篠山城跡南堀のハス復活事業のモニタリング調査
鈴木武志（農学研究科）

Ⅱ 地域人材育成

学部教育で培う専門性（理論）と結びつけながら、生産者や生活者の視点から地域の課題を学び（実践）地域や社会に貢献できる人材の育成を目指す「食農コープ教育プログラム（Cooperative Education）」の運営支援をおこなっている。全学の学生を対象とした、1年生担当の「実践農学入門」と2年生を担当の「実践農学」を開講において、地元調整を分担している。また、地域人材育成の中核組織として、一般社団法人丹波篠山キャピタルの立ち上げに参画し、「篠山イノベーターズスクール」「地域おこし協力隊コーディネート」の企画、運営業務支援をおこなった。

1. 「食農コープ教育プログラム」の運営支援

「実践農学入門」は、42名が受講し、後川地区の6つの受け入れ農家ごとに班に分かれ、5回の現地実習と、地域の課題解決に向けた提案を考えるためのワークショップを含む2回の学内学習をおこない、最後に現地での成果発表会を実施した。

「実践農学」では、8名が味間地区において「特産農産物の販売企画」プロジェクトに、3名が「地域おこし協力隊広報」のプロジェクトに取り組み、そのサポートをおこなった。



「特産農産物の販売企画」（実践農学）

2. 一般社団法人丹波篠山キャピタルへの参画と運営支援

「篠山イノベーターズスクール」の運営主体であった一般社団法人EKLAB.を組織改編し、一般社団法人丹波篠山キャピタルを設立した（代表理事：中塚雅也（農学研究科教授）、副代表理事：堀井宏之（丹波篠山市副市長）、理事として、安部梨杏（農学研究科特命助教）、清野未恵子（人間発達科学研究科准教授）が参画）。丹波篠山キャピタルでは、①人材支援事業として、篠山イノベーターズスクールの運営と地域おこし協力隊コーディネート、②人材管理事業として、新しい関係づくりの制度開発、人材の紹介・マッチング、③知識管理事業として、地域調査・コンサルティング、研究ネットワークづくりを進めている。

なお、2016年10月より実施している起業・移住促進プログラム「篠山イノベーターズスクール」は、2025年度は11期生・31名が履修した。ビジネス創出に必要な基礎知識や手法を学ぶセミナーが開講された。これらの企画・運営、講師等に神戸大学の教員が引き続き協力している。なお、これまで総勢298名が篠山イノベーターズスクールに入学し、73名（うち市内35名）が起業・継業し、27名（うち市内15名）が新事業創出を達成している。



イノベーターズスクールの実施の様子

Ⅲ 活動・情報支援

1. フォーラム・セミナー等の企画・開催

2025年度は、市内外の参加者を募った学習会や情報交換会を開催した。丹波篠山市に関連する大学の活動・研究の成果発表や情報共有を行う第6回丹波篠山研究発表会（2月28日開催）では、複数の大学の学生・研究者、地域住民を含む200名を超える来場者があり、活発な情報共有、ネットワーキングが行われた。また、地域住民・団体からの相談への対応を積極的に推進するとともに、フィールドステーションのシェアオフィス/コワーキングスペース利用を試行し、地域に開かれた大学の交流拠点となることを目指している。



第6回丹波篠山研究発表会

2. 神戸大学教員の委員・アドバイザー参加

丹波篠山市総合計画審議会委員長、委員 / 農都ささやま外来生物対策協議会会員 / 丹波篠山市ふるさとの森づくり連携ネットワーク会議（木育・担い手部会）アドバイザー / 丹波篠山市有害鳥獣対策推進協議会 / 同被害対策支援チーム / 丹波篠山市農都創造審議会委員 / 兵庫県立篠山東雲高等学校評議員 / 古文書講座（中級編）講師 / 部落史研究委員会アドバイザー

3. 情報発信

ホームページやFacebook等SNSによる情報発信に加え、学生団体や地域創造研究の研究・調査成果などについて、テレビ局や新聞社の取材を積極的に受け、多くの取組が報道された。

4. 学生活動団体サポート

丹波篠山市内で実施されてきた「実践農学入門」や「実践農学」を履修した学生たちによる3つの学生活動団体（地域密着型サークル「にしき恋」、国際農業サークル「AGLOC」、多世代交流拠点サークル「Luonto」）が自主的に活動を継続している。

2025年度 運営体制

リーダー・ディレクター	中塚雅也（地域連携推進本部 部門長（農学研究科教授））
スタッフ	安部梨杏（丹波篠山駐在研究員（農学研究科特命助教）） 三原香奈子（丹波篠山駐在コーディネーター（教育研究補佐員））
連携スタッフ	谷川智穂（（一社）丹波篠山キャピタル） 谷垣友里（（一社）丹波篠山キャピタル） 中森啓祐（（一社）丹波篠山キャピタル） 河口英樹（（一社）丹波篠山キャピタル） 岡安陽子（（一社）丹波篠山キャピタル）

西神南団地 再生・活用プロジェクト

工学研究科 准教授 栗山 尚子

■背景と目的：

人口減少社会を迎え、空き地・空き家問題は全国的な課題である。特に居住者の急速な高齢化や施設の老朽化などにより、活力を失いつつ初期の郊外住宅団地において、インフラやウワモノなどの資源を有効に活用することは、団地自身の活性化とともに、近隣地域や周辺の公的施設の活用、大学の教育・研究の機会の場の創出にとっても極めて有用である。本プロジェクトは、（一財）神戸住環境整備公社（以降、公社と記す）と連携し、高経年住宅団地の再生・活用に関する実践を通して、有効な方策を見出すための知見を得ることが目的である。工学研究科と公社との団地再生支援に関する協定に基づき、2015年度から地域連携事業の採択を受け、神戸市内の複数の団地で空き住戸と外部空間のプラン提案やDIY活動等に取り組んできた。

今回は、西神南団地を対象とした。公社が所有・管理する井吹東シティコートの外部空間の提案と自治会役員の方々への提案の発表を行なった。役員の皆様には案の感想に関するアンケート調査を実施した。

■外部空間の課題とリニューアルプランの提案：

井吹東シティコートは、西神南駅から徒歩17分のところに立地しており、1995年12月竣工のRC造18棟288戸、PC造9棟108戸の集合住宅である。現時点では空き家率は高くないが、外部空間の管理に問題（共用敷地の利用マナーの悪さ（ゴミの不法投棄、駐輪場への不要自転車の放棄）や植栽の劣化・陳腐化等）を有している。公社は、この問題を解決しつつ、若年層の世帯に親しまれる外部空間の提案を期待している。

神戸大学工学部建築学科の栗山研究室の学生（学部4年～修士2年の18名）が、2回の現地調査を行ない（表1）、6グループに分かれて、団地内の4か所（ゴミ捨て場周辺、団地の入り口、集会所周辺の主要道路2案、通路空間2案）で6つの案を提案した（表2）。

表1. 2025年度活動スケジュール

日程	作業
6/24(火)	現地調査。公社の方に解説を受ける。
9/12(金)	現地調査2回目。
10/14(火)	公社の方へ提案の発表。
11/9(日)	小上がり天井設置・ペイント

表2. 提案箇所と提案タイトル

場所	提案タイトル
ゴミ捨て場 周辺	作品1:ゴミとお話のポイポイステーション
団地の入口	作品2:緑のよりみちエントランス
メイン通り	作品3-1:木漏れ日のみちくさストリート 作品3-2:円と緑のハブ
通路	作品4-1:かきかき広場・いきいき広場 作品4-2:みんなのエディブルガーデン

「立ちどまり、気軽におしゃべりができるゴミ捨て場」

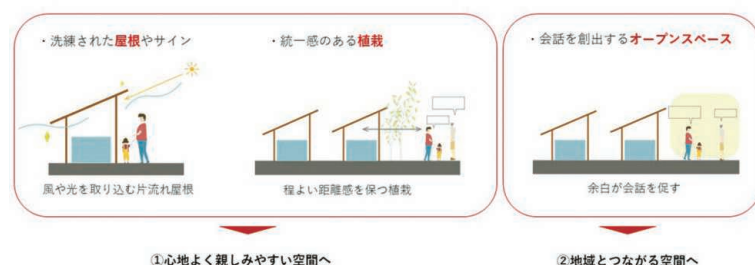


図1. 作品1のコンセプト図



図2. 作品3-1のイメージパース

■自治会役員の方からのご意見：

2025年10月14日に公社の方に、11月9日に自治会役員の方に、外部空間のリニューアルプランの発表を行なった（写真1）。役員の方10名にプランに関するアンケート調査を実施した。質問項目は、1番目・2番目によいと思う案とその理由（選択式）、外部空間の現状、リニューアルプラン、住宅管理に関する意見（自由回答）である。

アンケート調査より下記の内容を得た。

- ・自治会役員 10 名の方より、回答を得た。年齢は 30-50 代、男性 5 名、女性 5 名であった。
- ・ 1 番目に良いを 2 点、2 番目に良いを 1 点として票数をかけて合計したところ作品 3-1 と作品 1 が高評価であった（図 3）。
- ・ 高評価の理由は、利用してみたい、雰囲気を楽しそうという理由が多い（図 4）。また近所付き合いが生まれそうという理由も得られた。
- ・ 外部空間の現状については、北側ゴミ捨て場には不法駐車が多い／手入れされていない／公園側や集会場近くの家が多かったが、バス停側の入口付近にも子供やお年寄りのコミュニティスペースがあればいいと思ったというご意見／イスや立ち留まる場所が無いことに気づいたというご意見が得られた。
- ・ 住民の交流が少ないので、楽しそうに感じた。予算が取れるなら実施してほしい／どれも今どきのデザインで、おしゃれで実現して欲しいと思った／”広場”という視点が面白い／明るく、コミュニケーションが取れそうでいいと思った／住民の交流がある事で、防犯の面でも活用できると思った／畑は貸し出し式にしてもいいと思ったというご意見が得られた。



写真 1. 自治会役員の方へのプレゼン風景

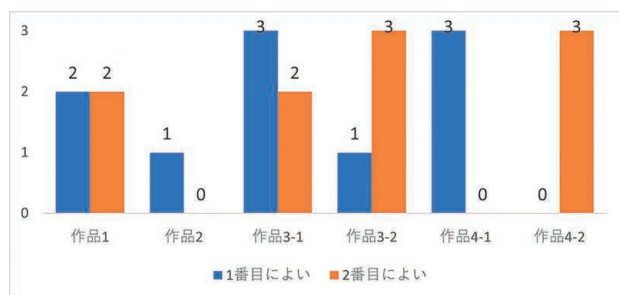


図 3. 各作品の得票数

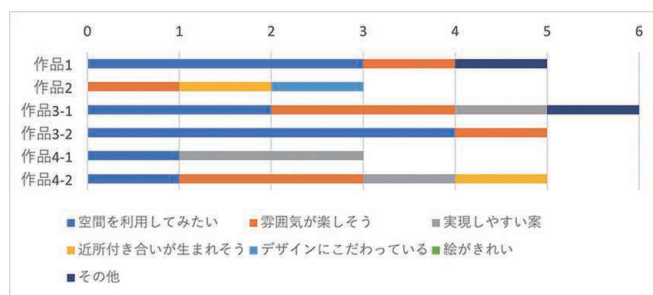


図 4. よいと評価した案を選んだ理由

■今後の展望：

西神南団地は、神戸市内の郊外住宅団地の中では比較的新しい団地であるが、団地開きから 30 年超を経過しており、西神南団地の住宅を選ぶ若年層の世帯が今後減少していく懸念がある。集合住宅の外部空間の充実（滞留空間の充実、安全な歩行者空間、維持管理された植栽、共同の畑作業の場合等）が住居の選択に影響を与える可能性があり、住民が利用したい空間を外部空間に設えることで集合住宅の価値が増すと考えられる。当初は団地内のもちつきイベント時に、提案を発表し、イベントに参加された方へのアンケート調査を実施する予定であったが、2025 年度はイベントが開催されなかったため、多くの住民の方々のご意見を得る機会がなくなった。公社のご協力により、自治会役員への発表が可能となり、公社の方々には大変お世話になった。もし機会があれば、自治会の役員以外の方のご意見も収集できればと考えている。来年度以降も、若年層流入促進による団地の活性化への寄与を目指し、公社と連携し、団地の課題検証や課題解決に資する魅力的な提案等実践的な活動に取り組み、その活動の効果と課題を明らかにしていきたい。

重度知的障害者の生涯学習プログラム「ポランの広場」

附属特別支援学校 校長 佐藤 知子

■背景と目的

神戸大学附属特別支援学校では、2022 年度より重度知的障害者を対象とした生涯学習プログラム「ポランの広場」を開始した。生涯学習は近年、「主体的に学び、地域の一員として豊かに生きるための基盤」として注目されている。しかし、重度知的障害者の学びの場は依然として少なく、福祉現場でも活動づくりの難しさや人員不足が課題となっている。一方、特別支援学校には、教材・教具開発や支援方法を蓄積した専門性がある。学校が持つ知見を地域に還元することができれば、生涯を通じた学びの機会の拡充につながると考え、プログラム立ち上げに至った。また、「学び」についても、学校教育では「学力の育成」が中心となりがちである一方、生涯学習では「楽しさ」や「感動」を重視する傾向があり、学びの概念のズレが存在する。学校側にとっては「学び」の概念を変革していく機会となると考えた。「ポランの広場」という名称は、宮沢賢治作品に登場する、人々が憩い集う象徴的な場に由来し、「人々がつながり合う場」としての願いが込められている。

本校には卒業生とのつながりや地域福祉との協働の歴史があり、周辺に生活介護事業所が多数立地していることから、連携基盤が整っていた。事業所との話し合いを重ねる中で、「重度の利用者の学びの機会を増やしたい」というニーズが明確となり、本プログラムでは必ず施設職員が同行し、学校教員と協働して支援する体制とした。

■ 2025 年度の取り組み

（1）定例ポランの広場（年 6 回）

各施設の生活時間および参加者の体力に配慮し、活動時間を 10 時 20 分から 11 時 30 分に設定した。体育館におけるレクリエーション活動を中心に構成し、季節の歌、フォークダンス、椅子取りゲーム、玉入れ、ボーリングなど、多様な活動を展開した。定番となったボーリングではストライク賞のワッペンを用意し、活動後も楽しかった経験を思い起こせるよう配慮した。振り返りを通して肯定的な情緒を再体験することは知的障害者にとって重要な経験となっている。



（2）夏季プール開放

2つの生活介護事業所が参加し、8日間でのべ30名が利用した。安全確保のために施設職員がともに入水し、施設によっては看護師も同行した。時間差利用で見守り体制を整え、セーフティマットなど水中活動用の教具を利用しながら参加者がリラックスして取り組める環境を準備した。新たに水着を購入する利用者もあり、事前から期待をもって来校する様子が確認された。



（3）明石地域ニーズ調査

明石地域自立支援協議会と協力して、生活介護事業所を対象に知的障害者の生涯学習に関するニーズ調査を行ない、25 事業所から回答があった。

- ・利用者の年齢・障害が多様で、個別対応が必要だが人手不足。
- ・重度障害・精神疾患・強度行動障害への対応が難しく、職員の負担が大きい。
- ・意思疎通が難しい利用者が多く、グループ活動が成立しにくい。
- ・楽しめる活動が少なく、笑顔の時間が少ない

などの実態が明らかになるとともに、ポランの広場への関心も寄せられた。

（４）施設職員対象「ポランの広場」見学会

９月に４施設が参加したが、秋は事業所行事が多く、参加が限られた。今後は実施時期の見直しが必要である。内容自体は高く評価され、平日開催を希望する声や強度行動障害がある利用者の参加ニーズも寄せられた。参加拡大には、受け入れ体制の検討と信頼関係構築が不可欠であるため、今年度は新たな事業所は１ヶ所にとどまった。

（５）出張ポランの広場

特に要望の強かった生活介護事業所を訪問し、音楽活動を実施した。事前には施設の設備や環境を確認し、教員７名が参加し、コンガ等の打楽器を持ち込んで６０分間の音楽活動を展開した。プログラムとしてはクラシックを中心にしながらも、民謡やダンス曲、ジャズなど、多様なジャンルの楽曲を用意した。利用者は初めて触れるジャンルの音楽を楽しみ、身体表現やリズム表現が活発に見られた。また、来て欲しいという強い要望が寄せられている。



■参加者・施設職員の声

利用者からは「ボーリングが楽しかった」「また参加したい」といった笑顔の反応が得られ、成功体験が情緒の安定や意欲の向上につながっている。また、継続参加者は、開催日を楽しみにしていることも施設職員から伺った。取り組みの様子も回を重ねるごとに主体性が増し、活動量が増えるなど、この取り組みによって活力が生み出されていることが確認された。

施設職員からは、「普段見られない笑顔があった」「やる気を引き出す支援の仕方が勉強になる」といった声が多く寄せられた。

■考察

本取り組みにより、重度知的障害者における生涯学習が、「活動意欲」や「周囲への関心の高まり」「他者の活動の取りこみ」といった生活全体の質の向上に寄与していることが示された。参加者は、それぞれの活動の魅力やそこでの教員や施設職員とのやり取りを通じて表情が豊かになり、主体的な行動が増えた。また、施設職員が本校の支援方法を学びになったと受け取っていることも大きな成果である。教員にとっても、年齢期までの知的障害者に関わることで、生涯にわたる人間の発達について考えを深める機会となった。

■今後の展望

今後は以下の取り組みを軸に、プログラムの質と参加しやすさをさらに高めていきたい。

1. 夏季プール開放の継続と拡充
2. 見学会の年間計画化
3. 出張版ポランの広場の拡充
 - ・明石市との協働など学校外での支援体制を強化する。
4. 大学との連携
 - ・学生ボランティアの参画など、より開かれた地域連携を進める。

■まとめ

「ポランの広場」は、重度知的障害者が「楽しみながら学ぶ」ことを実現し、地域に開かれた新たな生涯学習の形を示す取り組みである。参加者の笑顔や主体性の高まり、施設職員の学びと意識の変化は、本校が果たすべき地域貢献の大きな成果であるといえる。

今後も学校・施設・地域社会が協力し、「誰もが学び、つながり、豊かに生きる場」としてのポランの広場を広げていくことが期待される。

地域おこしに貢献する新規特産鶏肉の開発

農学研究科 教授 本田 和久

背景と目的

我が国におけるカロリーベースの食料自給率は 38% であり、先進国の中でも最低の水準となっている。この低い食料自給率の要因の一つとして、飼料原料の海外への依存があげられる。例えば鶏肉の国産率は 64% であるが、13% という低い濃厚飼料自給率を乗じた自給率に換算すると、その値は 8% にまで低下する。ここで、肉用鶏の配合飼料の 50% 以上を占めるトウモロコシと、約 25% を占める大豆粕は、そのほとんどが海外から輸入されている。これらのことから、飼料の海外への依存の解決策が求められている。

近年、肉用鶏の飼料用トウモロコシの代替品として国産米の利用が検討されている。農林水産省(2025)は、肉用鶏の配合飼料の原料として、年間最大 232 万トンの米が利用できるとしている。これらのことから、トウモロコシに代わる肉用鶏用の飼料原料として国産米の利用が進めば、我が国の食料自給率の改善と、輸入時の二酸化炭素排出削減に貢献できると考えられるが、大豆粕に変わる国産の飼料原料は未だ見出されていない。最近、神戸大学では、国産米と兵庫県産の酒粕（図 1）の肉用鶏用飼料としての利用について検討し、これらが鶏肉の食味を向上させることを見出した（Nishikawa ら，2024）。残念ながら、酒粕の生産量は飼料として利用される大豆粕の量には及ばないが、地域特選鶏肉等の小規模生産であれば、十分供給は可能である。



図 1. 若どりの飼料に汎用される大豆粕（左）とそれに代わり得る国産原料である乾燥酒粕（右）

兵庫県立但馬農業高等学校（但馬農高）では、教育の一環として若どりの生産実習を毎年行っており、生産された鶏肉は“但農どり”として販売している。現在、その生産量は需要を賄える程度に抑えられているが、一般の若どりに比べて広いスペースで育てた但農どりは食味に優れる可能性が高い。それ故、上述の国産米や酒粕を給与することによって、更にその付加価値を高めることができれば、その需要拡大、すなわち地域産業の活性化に寄与できる可能性もあると判断された。

本事業は、これまでの神戸大学で得られた研究成果を養父市の地域おこしに活用するべく、玄米や酒粕を給与して生産した地域特産鶏肉“但農どり”の特徴を明らかにすることを目的とした。

材料と方法

飼育試験 1：約 5 週齢の若どりに、市販飼料と玄米を 8:2 の割合で配合した飼料を給与し、7 週齢まで飼育した。

飼育試験 2：約 5 週齢の若どりに、市販飼料、玄米、および酒粕を、7:2:1 の割合で配合した飼料を給与し、7 週齢まで飼育した（図 2）。

官能検査：生産されたもも肉と市販の若どりのもも肉をスライスし、3 倍量の 1% 食塩水を加え、85℃の温浴中で 20 分間加熱後湯煎後、22 名のパネラーによる Check that all apply 法による官能検査に供した。



図 2. 7 週齢の但農どり

結果と考察

但農どりは両ロットとも、歯ごたえがある、うま味がある、およびジューシーな鶏肉であると評価された(図3)。これらの結果から、但農どりは、市販の若どりに比べて優れた肉質を有することが示唆された。また、飼料の種類によらず、市販の若どりに比べて歯ごたえがあり、うま味があり、ジューシーであるとするデータが得られたことから、これらの特徴は、広いスペースで育てられた但農どりの特徴であると判断された。

今後、これらの食味の長所を訴求することによって、地域特産鶏肉としての但農どりの需要拡大を図ることが期待される。本事業の結果は、地域特産鶏肉としての但農どりの需要拡大を図る訴求点を明確にしたものと言える。

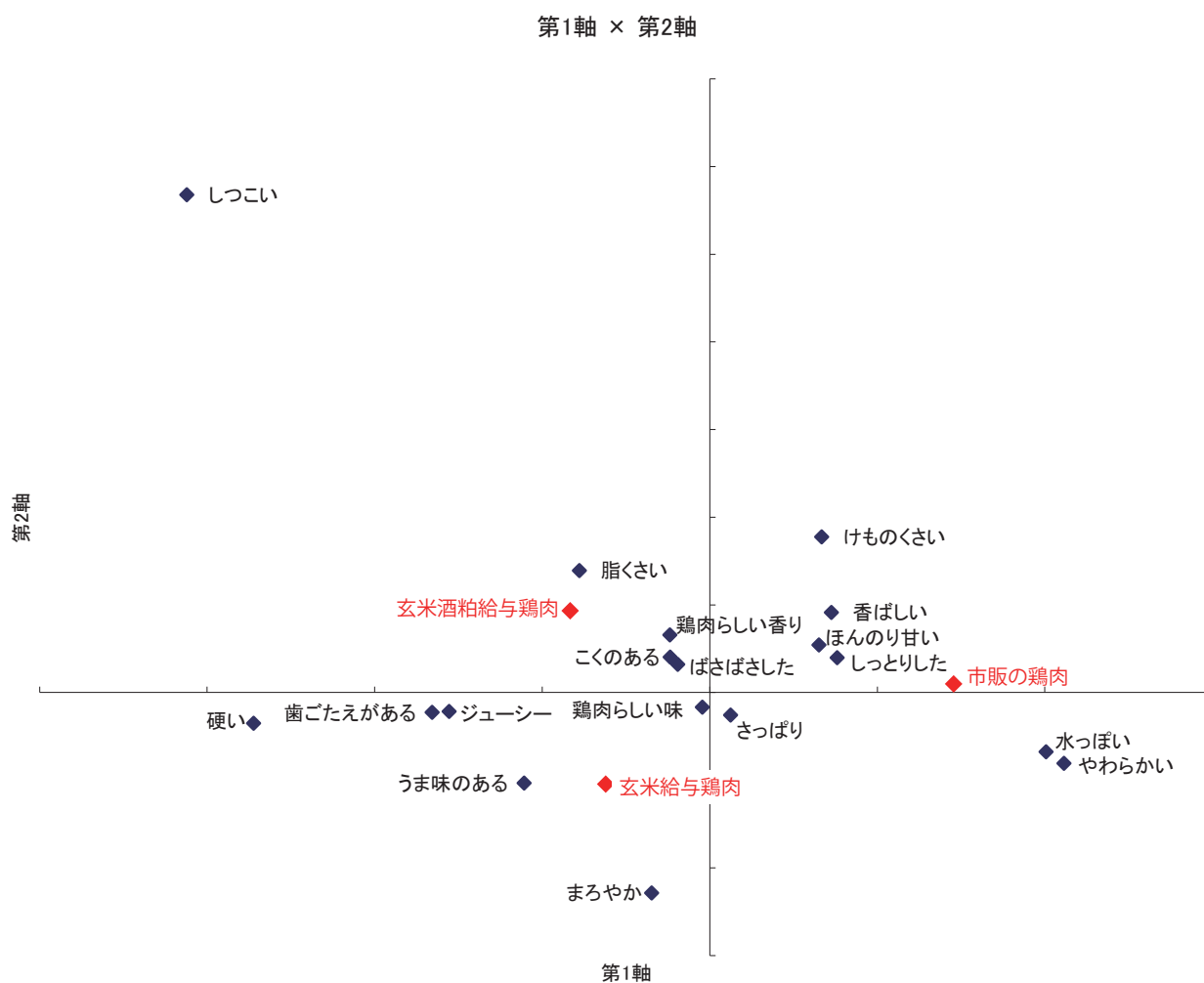


図3. 市販の若どりと但農どりの食味の比較

地域の健康を支える人材育成によるウェルビーイング向上事業

ウェルビーイング先端研究センター
保健学研究科 特命准教授 園田 悠馬

I. 背景と目的

健康寿命延伸とウェルビーイング向上の実現のため、医師だけでなく看護師などの医療系職種が果たす役割は大きい。しかし、医療系人材は都市部に偏在し、地方では健康寿命延伸の実現は難しい状況にあり、地方にも医療系人材を充足させることは社会的課題である。

そこで、住民の健康寿命延長とウェルビーイング向上に貢献するために、県内の医療過疎地域の中高校生の医学・医療に対する高い関心を喚起し、将来的に地元へ帰還する医療系人材の育成を促進することが肝要である。

神戸大学医学部では、令和元年度から兵庫県病院局、兵庫県教育委員会と連携して、豊岡市や洲本市などの県内の医療過疎地域の高校に教員を派遣し、医療職の魅力を伝えるセミナーを開くなど、医療系職種を目指す人材を育て地元に着定させる「医学部へ行こう」プロジェクトを行ってきた。本事業では、県内の医療過疎地域における医療系人材の地産地消といえる独自のエコシステムの構築を目指している。昨年度に三田市と今年度に豊岡市と包括連携協定を締結し、この医療人材育成促進事業を継続・拡大を図っている。

II. 事業成果

1. 但馬・豊岡市：医療系人材育成促進事業

アカデミックツアー @ 楠キャンパス

医学部研修（実験体験など）

県立豊岡高等学校 2 名

近畿大学附属豊岡高等学校 4 名

- ・「健康なマウスと肥満マウス」
（肝臓組織のオイルレッド O による脂質染色）
- ・「乳がん細胞に細胞毒性のある薬剤を加える」
（細胞培養）



細胞培養実験

学校対抗ディベート選手権 @ 豊岡市役所

県立豊岡高等学校 4 名

近畿大学附属豊岡高等学校 4 名

- ・「医療現場において AI 診断の導入を推進すべきか」

県立豊岡高等学校 医療系人材育成プログラム

1・2 年 医療系人材養成プログラム受講者 44 名

- ・公立豊岡病院での医療現場体験
- ・神戸大学医学部の教員による講演
- ・福祉用具アイデアコンテスト
- など



学校対抗ディベート選手権

2. 淡路・洲本市：エッセンシャルワーカーの育成促進

県立洲本高等学校「ひょうごリーダーハイスクール」医療系人材育成プログラム

1年 総合探究類型生徒 22名

- ・探究基礎（医療系ディベート）「日本で積極的な安楽死を認めるべきである。是か非か。」
- ・医療講演「医療職のススメ」、「医療を目指す君たちへ」

3. 北摂・三田市：ジモトデハタラク

第2回 三田（医療系）キャリアキャンパス @ 三田市民センター

市内の中高生と保護者を対象に、地元で“医療で働く”キッカケとなることを目的とした神戸大学医学部の教授と三田市民病院で働く医療従事者の生の声を聴くことができ、医療を身近に感じられる参加型イベントを開催した。

- ・医学部教授の講演
- ・“医療のお仕事”10体験ブース
- ・病院職員と参加者による職種別座談会
- ・AIを用いた病院マスコット作成など



メディカルデイ @ 名谷キャンパス

市内の全ての高校に募り、三田学園高等学校、三田祥雲館高等学校、北摂三田高等学校から医師等の医療系職種を目指す高校生9名による医学部への合同ツアーを実施した。

- ・模擬講義「医学・医療について」
- ・筋繊維染色の体験
- ・聴診、超音波検査の体験
- ・現役大学院生との交流・大学生活に関する座談



Ⅲ. 総括と今後の展望

本事業によって、県内の複数の医療過疎地域における医療系人材不足の問題に対して、医師だけでなく他の医療系人材養成に関して中長期的な地域連携を進めていく基盤が整った。本事業は7年目を迎え、県内の中高生が本事業に参加したことで、地元で「医療で働く」キッカケとなり、医療系大学への進学者が増え、地元の病院に就職する「若者」がみられるようになった。

豊岡市・三田市との包括連携協定のもと、市からの受託事業として「医学部へ行こう」プロジェクトを継続し、医師だけでなく他の医療系職種においても地元の医療現場への帰還をさらに促進させる。次年度は、医療人材育成事業を播磨の県立龍野高等学校・姫路西高等学校・姫路東高等学校に拡大し、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）と連携を図る。具体的には、高校生が行う探求活動（健康科学・医学系の研究課題）の指導や高校の特色に合わせた医療講演を実施予定である。洲本市と連携し、県立洲本高等学校のみならず、市内の中学校・高校における医療系職種や介護系職種といったエッセンシャルワーカーの育成事業も検討している。これらの地域の保険データを疫学的分析などに活用し、地域ごとの健康課題に対する政策決定に寄与できるような取り組みを協議していく。

医療過疎化に向かう地域における公立病院活性化支援と アカデミアンによる新たな地域医療支援モデルの創出

科学技術イノベーション研究科 教授 山下 智也

背景：兵庫県を含む日本全体で、医療提供施設がダウンサイジングし、医療過疎化と向き合う地方自治体が益々増加していく。そのような市町村では、さらなる効率的医療サービスの提供と健康管理法の提案と普及が必要となるが、病院縮小課程は negative な印象が目立ち、positive で soft landing なダウンサイジングの活性化支援モデルケースはあまりなく、地域住民目線を尊重した良い支援モデルを構築し、提案していく必要があると考える。神戸大学として、規模縮小病院・医療過疎化自治体への連携支援の実績は、あまりない。

事業の目的：医療過疎化に向かう地域での医療資源の有効活用と住民健康管理において、神戸大学として連携支援の方法を検討し、アカデミアンとして適切な地域支援の方法を探索し、新規でイノベティブな活性化支援モデルを確立して、公表／情報提供することである。結果として、地域医療を維持し、医療分野で地域に貢献できる。

本事業で連携する自治体や地域団体：加西市、特に医療や健康管理に携わる職員や病院スタッフとの連携を広げていく予定とし、令和6年度は、その中心となる市立加西病院との連携を開始した。令和7年度は、その連携を医療だけではなく介護にも広げ、市民や市政に関わる人にも広げる計画を立てた。市立加西病院は、2020年に急性期中心の266床から199床となり、さらに2030年に回復期中心の136床での病院建て替えが決定している。計画的なダウンサイジングの中にも、持続性のある地域の医療提供病院として必要な選択的・限定的な機能維持が求められており、それに対してどのような連携支援が必要であり有効かという議論から始め、現在に至る。個人型で開始し、科学技術イノベーション研究科の関係者に協力いただきながら、将来的には、ニーズに応じて医学系研究科などの関連部署との組織型連携へと拡大展開も検討している。



長期計画の概要：本事業は、「成功循環モデル」の導入からの職員の変化／成長を促す方針とし、そのための取り組みを計画・継続して実施している。令和6年度に、病院職員との交流から開始し「関係の質」の上昇を目指し、コーチングのセミナーなどを提供し、心理的安全性を向上させる取り組みを行った。

今年度は、「思考の質」の向上に取り組み、その結果を受け3年目以降には「行動の質」の上昇につなげ、最終的に病院としての「結果の質」の向上に繋げる計画である。

令和7年度事業実施内容

1. 「思考の質」向上のための書籍提供（令和6年度より継続実施）

昨年のコーチング／リーダーシップ／医療マーケティングなどを学習するための書籍提供に引き続き、今年度は、思考法／考え方の学習／地域医療／病院経営に関する業務改善のため書籍を、本事業の予算にて購入し、図書室に地域連携事業で提供した『図書コーナー』を設置していただき（右の写真）、職員が自ら学び続けることができる環境を提供した。複数回にわたり、書籍の追加提供を行なっている。



2. 医師以外の医療従事者・職員へのセミナーを実施（2025年8月と2026年2月に実施）

以下の問題点の存在を認識し、それを変えていく取り組みを考えて実施した。

- ・病院のダウンサイジングに対して negative な意見／気持ち／不安を持つ職員が多い・・・これが心理的安全性の向上が必要と判断した理由の1つ。
- ・主体的に現場の解決すべき問題を見だし、提案するという環境が乏しく、若手職員の意見が実際の働き

方や組織の変化に反映できていない。医師や上司に頼る体質が常態化し、主体的に考える自立型組織になっていない。・・・これらが「思考の質」の向上が必要と判断した理由となっている。

(1) 職員対象のセミナー「考え方を考えたことがありますか？」by 山下智也 2025/8/1

実際には、病院職員とご家族に声かけし、中学～高校生にも参加いただき、『考えること』『思考法』について、一緒に考える機会を提供し、それに関連する中学生・高校生用の書籍も提供した。

(2) 職員対象のセミナー「仕事は楽しいかね？」by 福家信洋 准教授（科学技術イノベーション研究科 アントレプレナーシップ講座）2026/2/6

働き方・考え方・仕事の効率化・リスクリングによる価値の向上などに関して、一緒に考える機会を持った。



変わるための武器を手に入れるための本 (導入編 also for youth)



職員対象講習会のご案内

神戸大学 地域連携事業 (令和7年度)
地域の活性化や地域課題解決を目的とした萌芽的事業
令和7年度目標：思考の質を上げる

『仕事は楽しいかね?』

日程：2026年2月6日(金)
15:30～17:00

場所：市立加西病院 会議室 (予定)

対象者：医療スタッフを含む加西病院職員全員
(筆記用具の持参をお願いいたします)

講師：神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科
アントレプレナーシップ講座 准教授
福家信洋 先生

作業を削り、対話を創る。



やりがいを
「最大化」する、
効率化の正体。

オーガナイザー：
神戸大学 山下智也

協賛：神戸大学 地域連携事業

ST/N

3. 市民医療フォーラム「みんなで考えよう加西の地域医療」(2025/10/25 加西市民会館 小ホールにて実施)

新病院の建設計画を含めて市民への十分な情報提供が十分にできていないこと

が判明したので、市民会館のホールを借りて市民への情報共有と病院長を含めて市民と議論するの



機会を設けた。市長・市議会議員にもご参加いただき、上記の情報共有と健康管理のためのレクチャーなども提供した。加西病院サポーターの会という以前から病院を支える活動をされている会とも協働する機会を持ち、市民の中でも医療を支えて維持する試みがあることもわかり、協力する体制も整えられた。

令和7年度 神戸大学 地域連携事業

市民医療フォーラム

みんなで考えよう加西の地域医療

少子高齢化や医療環境の変化が進む中、加西市では新病院の建設が迫ります。この機会に、地域で寄り添える医療のあり方を一緒に考えてみましょう。

日時：令和7年10月25日(土)
13:30開演 (13:00開場)

場所：加西市民会館3F 小ホール
【住所】加西市北条町立町1丁目1番地
【電話】0795-33-0160
定員200名 入場無料 (申込不要)

プログラム 13:30～15:30

- ①健康講座その1「食べて、動いて、出かけましょう！」
【講師】加西病院医療技術部リハビリテーション科 科長 和田 伸也 氏
- ②健康講座その2「低炭水化物を予防しよう」
【講師】加西病院医療技術部栄養科 科長 大塚 雅美 氏
- ③講演「新病院の建設計画を知ろう」
【講師】加西病院医療技術部地域連携推進室 室長 永島 正晴 氏
- ④講演「変わる医療と看護を始めよう」
【講師】神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科 先端医療・薬理学分野 教授 山下 智也 氏
(休 憩)
- ⑤質疑応答にぎやかセッション
市民×神戸大学×加西病院
【司会】藤田智恵子(加西病院サポーターの会)

【主催】加西病院サポーターの会、加西市、神戸大学、加西病院
【後援】加西市、加西病院、加西市民会館
【お問い合わせ】加西市民会館 電話 0795-42-5670

事業の効果： 昨年の、心理的安全性、関係の質の向上に関する取り組みに続き、思考の質を向上させる取り組みを実施したが、その効果は短期的には評価困難である。職員からは前向きな意見が寄せられており、書籍の提供により職員が自己学習できる環境整備についても好評を得ている。今後、リスクリングを含む新たな挑戦のきっかけになると期待している。今年度の市民への情報発信の会（市民医療フォーラム）では、150名以上の参加者があり好評であった。

今後の展望： 市職員／医療従事者／住民に、医療・病院・介護・健康管理に興味を持っていただくために、職員への情報提供のみならず、市民向けのレクチャーの提供なども継続して実施して、病院のバリューを向上させる計画である。病院建替えイベントに対して、職員が主体的に意見を述べるができる環境整備、自ら考えて自立的に動くことができる人材の育成を継続実施することが重要と考えている。3年目の目標は「行動の質」の向上につなげることであるが、引き続き「思考の質」の向上の必要性も感じている。本事業は、短期ではなく息の長い継続した取り組みが必要であることを実感しており、次年度も事業予算の申請を行っていく方針とした（病院長・職員からも、ご要望いただいた）。

鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト

人間発達環境学研究科
アクティブエイジング研究センター 教授 原田 和弘

1. これまでの経緯や目的

本取組の目的は、神戸市灘区内の鶴甲地区の住民同士のつながりを高める支援を行うことである。この目的達成のため、同地区住民に向けた様々な地域イベントを平成 25 年度から継続開催しており、令和 6 年度末までの地域イベント参加者数は、のべ 7178 名に達している。本取組は、報告者のみならず、アクティブエイジング研究センターの多くの教員（近江戸伸子教授、岡田修一名誉教授、片桐恵子教授、近藤徳彦教授、長ヶ原誠教授、増本康平教授：50 音順）が協力して進めている。また、灘区鶴甲地区連合自治会と、①毎回の地域イベントの後援、②防災避難訓練の共同開催、③同自治会所有の掲示板とホームページでの広報などを通じた連携体制を培っているとともに、神戸市灘区役所から毎回の地域イベントへの後援も受けている。本取組により鶴甲地区の住民同士のつながりと生きがい感が高まることを査読付論文上で報告するなど（Harada et al. Aging and Mental Health. 2021; 25: 2235-2245）、本取組では、研究と地域貢献の両立に成功している。

令和 7 年度は、以下の 3 種類の地域イベントを開催した。なお、いずれのイベントも、参加費無料とし、鶴甲地区内の全戸を対象としたチラシのポスティングにより参加者を募った（図 1）。

連続講座2025秋
鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト

参加無料

お申込みは
QRコード
詳細

9/25 締切	10/27 締切	10/27 締切
園芸教室 土に触れて心も育つ。	いきいきウォーキング 一歩ずつ健康に！	健康体操教室 心も体もリフレッシュ！
10/4(土) 11/8(土) 12/13(土) (雨天実施)	11/15(土)11/22(土) 11/29(土)12/6(土) (雨天実施)	11/9(日)11/30(日) 12/7(日) 12/14(日) (雨天実施)
9:00-10:30 場所:神戸大学 人間発達環境学研究科 実習観察園	9:30~11:00 場所:神戸大学 鶴甲第2キャンパス A棟 大会議室	10:30~11:30 場所:神戸大学 鶴甲第2キャンパス A棟 大会議室
★グループ作業のため 全日程に参加できる方	★40~50分程度の運動が 可能な方(コースには簡単 な坂道や階段があります)	★ラジオ体操ワンポイント ストレッチ・筋トレ・リズム体操
講師:近江戸 伸子先生 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科教授 市橋 秀樹先生 神戸大学大学院人間発達環境 学研究科名誉教授	講師:原田 和弘先生 神戸大学大学院 人間発達環境学研究科教授	講師:当山 倫子先生 NPO法人全国ラジオ体操連盟 指導委員(株)RiToLu代表
◆参加申込方法◆ 名前(ふりがな)、住所、性別、年齢、 連絡先(電話、ファクス、携帯、メー ルアドレスなど)、同伴者の名前、 性別、年齢を明記の上、ファクス またはメールにて送付下さい。	いきいきウォーキング 講義内容 1回目:健康づくりのための運動量の目安 2回目:健康づくりのためのウォーキングのポイント 3回目:健康づくりのための筋肉を鍛える運動(筋トレ)のポイント 4回目:座りすぎ生活の健康への影響 *運動はちょっと...という方、講義のみの参加も歓迎します！ おおむね60歳以上の方を中心に幅広い年齢層を募集。小学生は保護者同伴。	
申込先 神戸大学大学院人間発達環境学研究科アクティブエイジング研究センター E-mail: kuaap@h.kobe-u.ac.jp TEL & FAX: 078-803-7963 (直通) 主催: 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 後援: 神戸市灘区・鶴甲地区連合自治会 ※お申込の際お送りいただいた個人情報は、本イベントの運営管理の目的にのみ利用させていただきます。		

図 1 ポスティングしたチラシの表紙

2. 令和 7 年度に行った地域イベント

2-1. 園芸教室（図 2A）

春期（5 月～7 月）と、秋期（10 月～12 月）に、月 1 回・1 回 90 分ずつ（計 6 回）、本研究科内の実習観察園において開催した。各回、数名程度のグループとなり、同園内の畑等において、野菜や草花の栽培や、野菜や果物の収穫体験などを行った。

2-2. 健康体操教室（図 B）

春期（5 月～7 月）と、秋期（9 月～12 月）に、各期・1 回 60 分ずつ（計 8 回）、本研究科内の体育館と大会議室において開催した。各回、ストレッチ、二重課題運動（いわゆる脳トレ運動）、ストレッチ、リズム体操、およびラジオ体操講習などを行った。

2-3. ウォーキング（図 2C）

春期（5 月～6 月）と、秋期（9 月～12 月）に、各期 4 回・1 回 90 分ずつ（計 8 回）、人間発達環境学研究科内の会議室と神戸大学内キャンパス全域において開催した。各回、前半に運動と健康に関する講義を約 30 分行い、後半に長距離グループと短距離グループの 2 グループに分かれ、キャンパス内を巡るウォー

キングを約 50 分行った。

(A) 園芸教室



(B) 健康体操教室



(C) ウォーキング



図 2 令和 7 年度に開催した地域イベントの様子

3. 令和 7 年度の実績と展望

令和 7 年度は、のべ 22 日の地域イベントを開催し、のべ 566 名の住民が参加した（表 1）。令和 8 年度以降も本取組を継続的に行い、本取組の恩恵を一人でも多くの住民に届け、鶴甲地区のさらなる活性化を目指す。また、十分な外部資金を獲得し、本取組の他の地域へ展開を目指す。

表 1 令和 7 年度に開催した地域イベントの実績

	日付	時間	場所	参加者
園芸教室 (春期)	5月10日(土)	13:00-14:30	本研究科実習観察園	22名
	6月7日(土)	13:00-14:30	本研究科実習観察園	20名
	7月19日(土)	13:00-14:30	本研究科実習観察園	19名
園芸教室 (秋期)	10月14日(土)	9:00-10:30	本研究科実習観察園	20名
	11月18日(土)	9:00-10:30	本研究科実習観察園	20名
	12月13日(土)	9:00-10:30	本研究科実習観察園	20名
健康体操教室 (春期)	5月11日(日)	10:30-11:30	本研究科体育館	37名
	6月22日(日)	10:30-11:30	本研究科体育館	37名
	7月6日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	23名
	7月13日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	29名
健康体操教室 (秋期)	11月9日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	26名
	11月30日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	25名
	12月7日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	26名
	12月14日(日)	10:30-11:30	本研究科大会議室	26名
ウォーキング (春期)	5月31日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	33名
	6月8日(日)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	28名
	6月14日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	23名
	6月21日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	27名
ウォーキング (秋期)	11月15日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	26名
	11月22日(日)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	25名
	11月29日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	28名
	12月6日(土)	9:30-11:00	本研究科大会議室・キャンパス全域	26名

視る・聴く・読む・語る－神戸の戦災アーカイブ・ 米軍資料から読み直す生活世界とパブリックヒストリー構築の試み

国際文化学研究科 教授 長 志珠絵

1. 背景・目的

これまで地域の市民運動団体「神戸空襲を記録する会」及びその神戸市への寄贈資料のアーカイブ整理を中心に、神戸の戦災アーカイブの構築および市民社会への提供・共有を進めてきた。その蓄積をふまえ

- ① 新たなアーカイブの可能性として、米軍資料関係の特に残されたフィルム等の視覚に関わる記録は地域にとっての生活史であり、活用可能である。
- ② 空爆／空襲という経験の他地域での実践、グローバルなありかたを検討する
一を課題とし、戦災の経験と記憶をめぐるパブリック・ヒストリー実践の方法を模索した。

2. 活動概要

本事業は、「戦後 80 周年」が意識された 2025 年での、地域の戦災アーカイブの、市民に向けた活用を意識するものである。このため具体的には、上記 2 点を課題に、他地域での取り組みとの連携や紹介も意識しつつ市民向けおよび研究者向けの映像解説等に取り組み、以下の活動を行った。

- ① 2025.8.10 於兵庫津ミュージアム 神戸空襲を記録する会主催「戦後 80 年」
に関する市民向けの企画「「神戸大空襲を忘れない」にて「米軍が記録した神戸空襲」パートでの映像情報等提供
- ② 2025.12.14 於あすてっぶ神戸 神戸空襲を記録する会と共催にて「空襲死者の名前を集めるということ」の司会及び全体コーディネート（長志珠絵）をつとめ、沖縄平和の礎の実践（琉球新聞記者・宮沢之祐氏、特別ゲスト・町田直美氏）、大阪（ピースおおさか）でのとりくみ（佐々木和子氏）についての企画を持った。
- ③ 2026.1.22 於神戸大学鶴甲キャンパスで国際文化学研究科プロミスおよび神戸外国語大学山本昭宏准教授代表科研（B）との共催および、愛知県のピースあいちの協力を得て、B29 搭乗員の記憶と記録に関する B. フレミング氏によるフィルム作品 CLINGS AND BURNS; ERASING NAGOYA の上映と山本氏・長によるコメント解説を含めての企画「空爆の記録と記憶をどう紡ぐかー B29 搭乗員の経験を紐解く」を持った。

3. 事業の効果と今後の展望

1.2 の事業については、神戸新聞により取材記事が掲載された。戦災経験をめぐる新たなかつ各地で取り組みがはじまっている動きとして関心の高さが窺われる。3 について、フィルム作品は強い印象を残すうえ、市民や他大学の学生・院生等の参加もあり、活発な議論が行われた。コメンテータからは、作品の特徴（二画面分割、資料の多層性、虚構と記録の境界攪乱）や映像が投げかける戦争記憶に関わる論点（世代間・父と子、語りの緊張、戦争責任、ファミリーヒストリーをどう公共化するか）等の論点が提示され、上映後の議論は、作品の力強さ、ドイツとの比較、作品の形式的工夫（分割画面・色調）と史料の多層性、家族史／世代間の緊張／戦争責任／記憶の公共化をはじめ、映像によって議論を共有できることのメリットなどの意見が持たれた。アンケートでは一衝撃／学び／問い／個人的記憶との接続等の意見が寄せられた。

アンケートの一部をまとめたものは以下となる。

学生イニシアティブで推進する体験型環境教育プログラム： こども MBA (Mountain Based Activities)

経営学研究科 教授 松嶋 登

本事業の目的は、多様なバックグラウンドを持つ学生のイニシアティブで、地域の子育て世帯向けの体験型環境教育プログラムを提供することで、地域連携の拠点としての本学の存在意義を打ち出していくことにある。これまでの活動にはいくつかの課題があり、これらの環境教育プログラムを持続的に提供できる資金集めを含んだ体制づくりと、連携協力してくれた教員や連携団体や個人に過度に依存しない担い手不足であった。その課題を解決するために、経営学研究科に所属する多様なバックグラウンドを持つ学生のイニシアティブのもと、地域課題の解決に向けた活動を行う団体や個人とのネットワークを構築する。

1. 5月3日 多井畑西地区にて、神戸市公園緑化協会の小塚満幹氏の協力のもと多井畑交流広場を訪問し、市内最大級の放置竹林の形成過程や地域課題解決に向けた取り組みについて調査「放置竹林の問題を考える」を実施。
2. 5月10日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、筑波大学で昆虫学の博士を持ちながら、神戸大学 MBA に通う小西芽衣が主催となり、「キャンパス夜の虫ツアー」を実施。
3. 5月24日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、ニュージーランドのポリテクニクで環境科学を専攻する三浦た昇氏を招き、「ニュージーランドの環境対策と眠れる日本の環境資源を考えるランドテーブル」を実施。
4. 6月1日 多井畑交流広場にて、神戸市公園緑化協会の小塚満幹氏を講師に迎えた里山整備活動「須磨多井畑西地区里山と竹林の未来を考える」を実施。
5. 6月7日 小水力発電所の森にて、NPO 法人 PV ネット兵庫グローバルサービス主催の里山整備活動として、薪割り体験「小水力発電所の森での里山整備活動」を実施。
6. 6月14日 神戸市北区淡河町にて、オルタナティブビレッジの横田真由美氏主催のもと、田植えや梅狩り、タケノコ掘り、収穫した食材の試食体験「伝統的な田植え・稲刈り・奉納餅つきで日本の食文化を考える」を実施。
7. 6月28日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、「授業参観・懇談会、キャンパスツアー、夜の虫観察会」を実施。
8. 7月5日 六甲川水車新田小水力発電所の森にて、PV ネットワーク兵庫グローバルサービスと連携し、「里山整備活動を通じたこん棒作りと小枝えんぴつ作り」を実施。
9. 7月13日 蓬山峡にて、山岳会に所属する山下憲一氏および榊原菜音実氏と連携し、「シャワークライミング・トライアル開講」イベントを実施。
10. 7月26日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、筑波大学で昆虫学の博士を持ちながら、神戸大学 MBA に通う小西芽衣が主催となり、「昆虫標本づくりのワークショップ」を実施。
11. 8月3日 蓬山峡にて、山岳会に所属する山下憲一氏および榊原菜音実氏と連携し、「アドベンチャーツーリズム実証実験：六甲山におけるシャワークライミングの可能性」を実施。
12. 8月12日～14日 神戸市北区淡河にて、オルタナティブ・ビレッジ理事の横田真由美氏と連携し、「伝統文化と農業に触れる宿泊型体験プログラム」を開催。
13. 8月21日 蓬山峡にて、自然派発酵ペットフード工房 CeRVO 代表であり山岳会に所属する榊原菜音実氏と連携し、「アドベンチャーツーリズム実証実験：六甲山における愛犬とのシャワークライミング・トライアル開講」イベントを実施。
14. 8月23日 石楠花谷にて、山岳会に所属する山下憲一氏および榊原菜音実氏と連携し、「アドベン

チャーツリズム実証実験：六甲山におけるシャワークライミング・トライアル開講」イベントを実施。

15. 8月24日 芦屋ロックガーデンにて、大谷茶屋代表の糸井健太氏と連携し、「アドベンチャーーツリズム：六甲山におけるトレッキング・トライアル開講」イベントを実施。
16. 9月13日 蓬山峡にて、自然派発酵ペットフード工房 CeRVO 代表であり山岳会に所属する榊原菜音実氏と連携し、「アドベンチャーーツリズム実証実験：六甲山における愛犬とのシャワークライミング・トライアル開講」イベントを実施。
17. 9月21日 芦屋ロックガーデンにて、大谷茶屋代表の糸井健太氏と連携し、「アドベンチャーーツリズム：六甲山におけるトレッキング」イベントを実施。
18. 9月27日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、集光ライトを使い夜の虫を集めて観察する「虫博士からの挑戦状！秋の虫クイズに挑戦してひみつの言葉を見つけよう」を実施。
19. 9月28日 六甲川水車新田小水力発電所にて、NPO 法人兵庫グローバルサービスおよび六甲自然案内人の会の竹上秀樹氏と連携し、「植物観察会」を開催。
20. 10月11日 神戸市北区淡河町にて、オルタナティブ・ビレッジの横田真由美氏と連携し、留学生らと日本の伝統文化を体験する「伝統的な田植え・稲刈り・奉納餅つきで日本の食文化を考える」イベントを実施。
21. 10月25日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、小さな昆虫から色を取り出し、オリジナルの絵の具で描く「虫アートにチャレンジ！カイガラムシの色素をサイエンスで取り出しアートで表現しよう」を実施。
22. 11月29日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、昆虫から DNA を抽出するワークショップ「取り出して！DNA の不思議！昆虫から DNA を抽出しよう！」を実施。
23. 12月13日 神戸大学六甲台第一キャンパスにて、チョウの鱗粉を紙に写し取り標本を作る「写し取って！チョウの翅のひみつ！鱗粉転写アート」を実施。
24. 12月20日 弓弦羽神社にて、留学生らと日本の伝統文化を体験する「伝統的な田植え・稲刈り・奉納餅つきで日本の食文化を考える」を実施。
25. 兵庫県議員中田英一氏を招いた解体処理場に関するワークショップ「経営学・エコシステムで対話する」を実施。



No. 4



No. 5



No. 6



No. 11



No. 20



No. 24

活動内容の詳細は、Instagram に掲載しておりますので、右にある QR コードからご覧ください。



地域住民と学生による加点的健診事業「よいとこ健診」の持続的実施体制の構築

経済学研究科 准教授 山岡 淳

1. 背景と目的

加点的健診「よいとこ健診」は、2018年に岡山雅信特命教授（医学研究科）が考案し、藤岡秀英教授（経済学研究科）や申請者らの研究班により7年間実践されてきた、地域高齢者の健康意識向上と地域活性化を目的とする学生主体の健診事業である。先行研究において、本健診は受診者のIADL（手段的日常生活動作）の改善（Yahata et al., 2021, Int J Gen Med.）や、参加学生の対人スキルの向上（田村・山岡ら, 2022, 『経済社会学会年報』44:5-16）等の効果が確認されている。

しかしながら、従来の実施形態は参加研究者にとって費用的・時間的負担が大きく、持続可能性に課題を残していた。こうした背景から、本事業は「地域団体と学生による『よいとこ健診』の自走体制の構築」を主眼に置いた。3か年での体制確立を目指す初年度として、本年度は協力団体の確保および運営体制の整備を行い、地域内での小規模展開を実現することを目的とした。

2. 実施体制

本事業は、経済学研究科山岡研究室と、灘区内でコミュニティビジネスを展開する株式会社玉子公園および株式会社Wの岩田かなみ氏とが協働して実施した。岩田氏は神戸市灘区を拠点に、地域振興（特にコミュニティづくり）の委託事業を展開しており、学生による起業支援や地域での実証実験のパートナーとして多数の実績を有する。同氏のネットワークを活かし、地域の行事に学生を巻き込むことで賑わいを創出するとともに、学生に実践的なチャレンジの場を提供している。本事業では、こうした地域組織をハブとし、他の地域団体・ステークホルダーに対して「よいとこ健診」のプログラムを提供する体制を構築した。

3. 事業概要

事前フィールドワーク：よいとこ健診実施にあたり参加学生への地域社会への理解を促進するために、2回のフィールドワークを実施した。

よいとこ健診：下表のとおり5団体においてよいとこ健診を実施した。これらの地域団体から「年に1回くらいやってほしい」、参加者アンケートからも「また参加したい」「健康づくりに意義がある」と意見が寄せられた。

開催日	協力団体	会場	受診者数	参加学生
25/12/7	神戸デジタルボランティア	灘文化センター	10	9
26/1/14	りんりんカフェ	西灘文化会館	9	7
26/1/24	エンゼルス	みんなのてらす	12	5
26/2/21	あゆみカフェ	六甲地域福祉センター	12	6
26/3/6	灘オヤジラボ	摩耶地域福祉センター	7	4
			50	31

4. 活動の成果

大学の研究室が学術的な監修を行いつつ、ハブとなる地域組織と協働することで、学生の組織化や各地域団体との連携体制を構築することができた。本事業を通じて、株式会社Wや玉子公園のような「従来の地縁組織ではない、地域振興を担う組織」がハブとなりプログラムを提供することが、健診運用の効率化に寄与することが確認された。

また、事業予算を活用して必要機材の小型化等を進めた結果、地域内で実施する際の物理的負担が大幅に軽減された。従来は大規模会場で丸1日を要していた事業が、準備から撤収まで含めて3～4時間に収ま

るようになり、実施主体および参加学生の負担軽減が実証された。

さらに、当初予想していなかった波及効果として、地域内での認知拡大が挙げられる。各組織がネットワークを通じて情報発信を行った結果、複数方面から「以前別の場所で開催していた事業であると認識している」「関係者からよいところ健診の評判を聞いた」といった声が聞かれ、事業の認知度の広まりが定性的に確認された。

5. 今後の展望

自走可能なよいところ健診の確立に向けた取り組みは、2026年度以降も継続する予定である。

2026年3月3日に開催された「神戸大学地域連携事業報告会」においては、灘区内の自治会や他市の行政機関など多方面から開催の要請を受けた。中でも特筆すべきは、灘区内の高等学校から「探究の時間」の授業の一環として、生徒主体でよいところ健診を実施できないかという打診を受けた点である。大学という地域資源は全国に点在しているものの、全地域に遍在しているとは言い難い。一方、高等学校は95%を超える進学率を背景に、日本全国に普遍的に存在する地域資源である。高校生によるよいところ健診の実装が可能になれば、各地域における事業の定着が飛躍的に進むと推測される。

他方で、こうした事業の普及・展開を図るにあたっては、介入効果に関する更なる学術的エビデンスの構築が不可欠である。現在、受診者のIADLにおける一定の改善は確認されているものの、その他の副次的効果（QOL向上や社会的孤立の解消など）については十分に検証できていない。今後は、医療政策や社会保障の観点からもこれらの学術的データを精緻に蓄積していく。

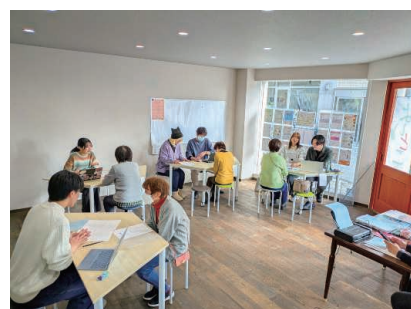
神戸大学発のプログラム「よいところ健診」が、明確なエビデンスと有用性を伴いながら全国へ普及していくことを目標に、引き続き研究と実践を両輪で進めていく。



25/12/7 灘文化センター



26/1/14 西灘文化会館



26/1/24 みんなのてらす



26/2/21 六甲地域福祉センター



26/3/6 摩耶地域福祉センター

県内の医療機関・住民と連携した地域医療人材育成事業

医学研究科 特命教授 岡山 雅信

○事業目的

取組の趣旨は、地域医療に貢献出来る医療人材の育成であり、その目的は、地域医療現場の体験や地域住民との交流を通して、医学生の地域医療実践のためのスキル修得とともに、地域医療実践に対する動機づけの醸成を目的とする。

○活動内容

1. 地域医療夏季セミナー 2025 in ひょうご：「ひょうご11地区での医療を体感してみよう」

目的：医学部学生および県養成医学生を対象に、地域医療活動の疑似体験を通して、へき地保健医療に対する認識を高めるとともに、へき地での勤務に対する使命感の醸成および勤務に対する動機を促すために実施した。

実施場所：県内11地区：①豊岡市；公立豊岡病院、出石医療センター ②養父市；公立八鹿病院 ③朝来市；朝来医療センター ④新温泉町；公立浜坂病院 ⑤香美町；公立香住病院 ⑥丹波市；県立丹波医療センター ⑦神河町；町立神崎総合病院 ⑧西脇市；市立西脇市民病院 ⑨姫路市；県立はりま姫路医療センター ⑩宍粟市；公立宍粟総合病院 ⑪赤穂市；市立赤穂市民病院

実施日：【現地訪問】令和7年8月5日（火）～6日（水）、7日（木）～8日（金）、19日（火）～20日（水）、20日（水）～21日（木）【報告会】23日（土）14時00分～16時30分
参加者：【現地訪問】119名【報告会】154名

実施内容：

【現地訪問】①学生参加型の研修プログラム（参加型プログラム）②住民（または患者）と触れあう機会（住民との触れあい）③勤務医師の体験等を通じて地域医療の楽しさを伝える講話（講話・意見交換）④地域の文化・土地の所以に触れる機会（文化体験）⑤医師だけではなく、職員や住民（または患者）参加の情報交換会（交流）の5項目を含む2日間のプログラムが実施された。

【報告会】参加学生は11地区のチームに分かれて、「夏季セミナーでの体験を語り合う、新たな気づきのために」をテーマとして現地訪問での経験内容を①地区の紹介：地区の概要など ②経験したこと：プログラムの概要、セミナーでの学び、最も印象に残ったことなど ③学び・気づき：学びから感じたこと、考えたことなど ④提言：地区の医療、人々の暮らしをより良いものにするための提言などの4項目にまとめて発表を行った。発表後に、学生、地区関係者および教職員間の交流を深めるために情報交換会も実施した。

ひょうごの未来を築こう！
地域医療 夏季セミナー 2025 in ひょうご
ひょうご11地区で地域医療を体感してみよう!!

2025年8月
第1日程 5日(火)～6日(水)
第2日程 7日(木)～8日(金)
第3日程 19日(火)～20日(水)
第4日程 20日(水)～21日(木)

実施地区
新温泉町（浜坂病院）、朝来市（朝来医療センター）、姫路市（はりま姫路医療センター）
丹波市（丹波医療センター）、西脇市（西脇総合病院）、赤穂市（赤穂市民病院）
養父市（八鹿病院）、豊岡市（豊岡総合病院・出石医療センター・日高クリニック）、香美町（香住病院）
神河町（神崎総合病院）※参加日は選択いただけますが、参加地区はご所属に拠らない場合もございます。

対象 地域医療に興味を持つ医学生
上記 参加したい地区の地域医療を体感し、地域医療の現状や課題について学び、地域医療の発展に貢献するための活動を行います。

定員 154名
※地区ごとに定員があります。

主催 神戸大学大学院医学研究科 医学教育学部門
共催 兵庫県医師会 支援センター

協賛 新温泉町・朝来市・姫路市・丹波市・西脇市・赤穂市・養父市・豊岡市・香美町・神河町

申込方法 ※各地区の申込フォームをダウンロードし、メールで参加希望を伝える。
①氏名 ②連絡先メールアドレス ③希望地区番号
④所属大学名(学部) ⑤参加希望日程
※メールの件名は「地域医療夏季セミナー2025 in ひょうご 参加希望」
※メールの宛先は info@med.kobe-u.ac.jp
申込締切日 6月30日(月)

神戸大学大学院医学研究科 医学教育学部門 地域医療教育学部門
〒652-0032 神戸市中央区知事町2丁目1-5 TEL.078-382-6732
@dome@med.kobe-u.ac.jp @ <http://www.med.kobe-u.ac.jp/dome/>



地域医療夏季セミナー開催場所：県内11地区

各地区で提供された現地訪問プログラムの概要

区分	具体的活動内容	関係者
①参加型プログラム	訪問診療・訪問看護・訪問リハビリへの同行、シャドウイング、心肺蘇生や救急実習、DMAT活動の紹介、演劇的手法を用いたコミュニケーションワークショップの実践など	医療スタッフ、患者、ボランティアなど
②住民との触れあい	介護予防・健康教室（「いきいき百歳体操」「じっくり貯筋教室」など）への参加、フレイル予防などの健康講話の実践、小児療育や健康体操教室への参加、地域住民との対談・意見交換	地域住民、高齢者、子供など
③講話・意見交換	総合診療医やへき地診療所医師によるレクチャー、院長講話、先輩医師や研修医との懇談・ランチタイム交流	医師（総合診療医、へき地診療所医師、県養成医師、研修医）など
④文化体験	伝統工芸（赤穂段通機織り、播州織、木彫、たたら製鉄跡）の見学、食文化体験（そば打ち、焼きちくわ、郷土料理作り）、農林水産業体験、魚釣り、山陰海岸ジオパーク館での学習、竹田城への早朝登山、出石城下町散策、離島の文化見学	地域住民、伝統工芸職人など
⑤交流	バーベキュー形式の食事会、多職種職員との意見交換、地元職員へのインタビュー、住民宅でのホームステイ	病院職員（多職種）、地域住民など

イベントレポート(写真):<https://www.med.kobe-u.ac.jp/dcme/event/detail/20250805.html>

報告会の発表内容:学びと気づき、提案

主な学び・気づき	主な提案
- 対話を通じた信頼関係構築と患者の不安解消、医療人を育てる風土の大切さ。 - 生活環境や職業まで見据えた診療、安心感を与える医師のあり方。 - 独居高齢者の在宅復帰の難しさ、ネット環境整備の必要性。 - 人と会って話すことや体操による孤立防止効果。 - 行政の工夫による受診率向上、多職種協働の有効性。 - 住民同士の助け合い（コミュニティコーピング）と診療所運営における経営的視点。 - スタッフ間の良好な関係が迅速な情報共有と最良の医療を生む。	- 次世代の医療従事者育成と住民の健康意識（健康寿命）向上を両立させ、持続可能な医療体制の確立。 - 離島特有の地理的制限を考慮した救急体制の再検討や、退院後の生活支援を含めた包括的ケアの充実。 - オンライン診療を普及させるためのICTインフラ整備と、独居高齢者が安心して在宅復帰できる環境づくり。 - 豊富な観光資源を活用し、住民だけでなく観光客も巻き込んだ新しい予防医療モデルの構築。 - 行政主導の予防策と住民の自主的な健康活動をさらに深化させ、予防医療の先進モデルの構築。 - コミュニティの力を活かした相互扶助の仕組み化と、経営基盤の安定化による診療所の永続的維持。 - 現在の良好な連携体制を基盤とし、地域内で完結する包括的なケアシステムのさらなる最適化。

2. 地域医療体験ツアー

目的：医学科・保健学科1年生が朝来市のそよかぜ診療所、はるかぜ診療所での診療体験等を通じて地域医療機関の役割等を理解するために実施した。

実施場所：朝来市、そよかぜ診療所、はるかぜ診療所

実施日：令和7年5月9日（金）～10日（土）

参加者：20名

内容：診療所訪問前日に①事前学修グループワークを行い、診療所にて②施設見学③職員による講話および職員との交流を実施した。



○事業効果と今後の展望

本事業により、学生は地域医療や福祉への理解を深め、その関心も高まった。これらの成果は課題解決型人材の育成や若手医療者の定着が地域活性化に貢献する可能性を示している。また、大学の現地活動は自治体との連携強化や外部資金獲得など、大学全体にも良い影響をもたらした。今後は、地域医療の実践力向上や動機づけ、関連団体との協力強化を通じて、教育プログラムと地域活性化施策の具体化を目指す。

幼児教育の質向上に資する 神戸大学附属幼稚園カリキュラム開発研究センター事業

神戸大学附属幼稚園
園長・副園長 田中 孝尚

【背景】

幼児教育行政は、市町単位での取組であり、市町を越えての幼児教育研究の交流がしにくい現状がある。また、設置者や施設類型も様々で、各種の幼児教育団体が存在する。県単位でカリキュラムを一元的に集約したり、組織的に支援したりする取組は存在していない。設置者や施設類型に関わらず、全ての幼児教育施設を対象とし、全ての幼児に格差なく質の高い幼児教育を保障することに資する取組が期待される。

【目的】

神戸大学附属幼稚園が、県内の幼児教育に関するカリキュラムを一元的に集約することを目指したり、各市町のカリキュラム開発の支援をしたりすることにより、兵庫県の幼児教育研究のハブとしての機能を強化し、兵庫県全体の幼児教育の質向上に資することを目的とする。

【活動概要】

兵庫県内の幼児教育の質向上に資するため、兵庫県の幼児教育研究のハブとしての機能を強化すべく、神戸大学附属幼稚園のホームページ内に、神戸大学附属幼稚園カリキュラム開発研究センターのホームページを設置し、準備を整えた。

神戸大学附属幼稚園が、日本の国の幼児教育施策にも寄与してきた研究開発学校等の取組や、講師派遣等を通じて地域の幼児教育の質向上に貢献してきている強みを生かし、兵庫県内の幼児教育を所管する部局に本事業の説明や資料収集及び当該ホームページへの掲載の許可を依頼している。

令和7年度には新温泉町及び兵庫県保育協会中播磨神崎支部に掲載の許可を得られた。

【今後の展望】

令和7年度は、本事業と一体的に行っている文部科学省研究開発学校としての取組に対する研究協力の依頼を中心におこなってきた。その中で、ほぼ全域より、前向きな回答をいただいているところである。その中でも、新温泉町教育委員会及び公立認定こども園全園（3園）、兵庫県保育協会中播磨神崎支部（7園）より、神戸大学附属幼稚園カリキュラム開発研究センターのホームページへの掲載することも承知の上で、カリキュラム資料の提供を受けることができた。このことを皮切りに、他の市町においても文部科学省研究開発学校への研究協力を進めていただく中で、他の市町へも資料提供について依頼し、当該ホームページの充実に努めていきたい。

当該ホームページでは、兵庫県内を中心とした市町のカリキュラムに関する資料を閲覧しやすくなるようにリンクをはったり、各市町の幼児教育現場から収集したカリキュラムに関する資料を閲覧できるように掲載したりしていきたい。

トップページ
TOP PAGE

沿革
HISTORY

教育方針
POLICY

幼稚園紹介
PROGRAM

入園案内
ENTRANCE

研究のあゆみ

研究会・教員研修

研修・参観お申し込み

研究成果物

アクセス

保護者の方へ

神戸大学附属学校部
教育研究基金

＝関連リンク＝

神戸大学附属小学校
 神戸大学附属中等教育学校
 神戸大学附属特別支援学校
 神戸大学附属学校部
 神戸大学

神戸大学附属幼稚園

〒673-0878
 兵庫県明石市山下町3-4
 TEL.078-911-8288
 FAX.078-914-8153



カリキュラム開発研究センター CURRICULUM DEVELOPMENT



カリキュラム開発研究センター

兵庫県教育委員会

神戸市教育委員会

① 神戸市

阪神教育事務所

② 尼崎市
 ③ 西宮市
 ④ 芦屋市
 ⑤ 伊丹市
 ⑥ 宝塚市
 ⑦ 川西市
 ⑧ 三田市
 ⑨ 猪名川町

播磨東教育事務所

⑩ 明石市
 ⑪ 加古川市
 ⑫ 高砂市
 ⑬ 稲美町
 ⑭ 播磨町
 ⑮ 西脇市
 ⑯ 三木市
 ⑰ 小野市
 ⑱ 加西市
 ⑲ 加東市
 ⑳ 多可町

播磨西教育事務所

㉑ 姫路市
 ㉒ 神河町
 ㉓ 市川町
 ㉔ 福崎町
 ㉕ 相生市
 ㉖ 赤穂市
 ㉗ 宍粟市
 ㉘ 九つの市
 ㉙ 太子町
 ㉚ 上郡町
 ㉛ 佐用町



但馬教育事務所

㉜ 豊岡市
 ㉝ 養父市
 ㉞ 朝来市
 ㉟ 香美町
 ㊱ 新温泉町

丹波教育事務所

㊲ 丹波篠山市
 ㊳ 丹波市

淡路教育事務所

㊴ 洲本市
 ㊵ 南あわじ市
 ㊶ 淡路市

プロジェクト伊加利 ～南あわじ伊加利地区におけるコミセン改修と町おこし～

建築サークル WOODiY

南あわじ市における「プロジェクト福良」から始まった地域再生の歩みは、現在、同市内の山間に位置する伊加利地区へと舞台を移し、使われなくなった旧コミュニティセンターの改修を軸とした新たな局面を迎えている。このプロジェクトは、単なる建築物の修復にとどまらず、人口減少と高齢化が進む山間集落において、地域資源の再評価と住民コミュニティの再編を同時に試みる、極めて多層的な地域活性化の取り組みであると言える。

伊加利地区は、洲本市から車で約 40 分の距離にあり、周囲を豊かな山々に囲まれた、人口 200 名から 250 名程度の小さな集落である。南あわじ市全体の高齢化率が 43% に達するなか、本地区の現状はそれをさらに上回ると推測され、典型的な過疎高齢化の課題に直面している。しかし、その一方で、この地には代々受け継がれてきた豊かな自然環境と、それを活かした活力ある農業という独自の強みが息づいている。本プロジェクトは、この「地域の日常」にある価値を再発見し、古くなったコミュニティセンターを「地域外からも人を呼び込める憩いの場」へと再生させることで、地区の持続可能性を高めることを最大の目的としている。

改修のプロセスにおいて特筆すべきは、徹底した「地域資源の循環」という手法である。設計にあたっては、材料費を抑制するという現実的な課題解決に加え、環境負荷の低減と地域への愛着形成を同時に図るため、周辺住民から提供された廃材や端材、さらには裏山に自生する竹といった未利用資源を主要な建材として活用している。本来であれば処分されるはずの素材に新たな命を吹き込み、内装や家具へと作り替えていく過程は、地域資源の再利用という概念を具現化する象徴的な行為となっている。



さらに、本プロジェクトにおける「地域資源」の定義は、物理的な木材や竹といった資材に限定されない。伊加利地区の基幹産業である農業や、そこから生まれる新鮮な農産物、さらには山間の美しい景観そのものを、地域が誇るべき無形の資源と捉えている。例えば、地区内の貸し農園を利用する人々が、自ら収穫した旬の野菜をコミュニティセンター内に新設されるキッチンで調理し、その場で分かち合うといった動線を描くことで、施設を単なる箱物としてではなく、農業体験と食文化が交差するライブ感溢れる交流拠点へと変貌させようとしている。こうした「施設内完結に留まら

ない、地域を巻き込んだ動き」こそが、活動の活性化を生む原動力となっている。

また、本団体はハード面の整備と並行して、地域住民との信頼関係を築くためのソフト面の活動も極めて重視している。毎年開催される「夕涼み会」などの伝統的な夏祭りには積極的に参画し、廃材を活用して製作した「手作りモルック」の体験ブースを出展することで、多世代が交流するきっかけを作ってきた。この活動は一過性のもので終わらせず、使用したモルック一式を地域のこども園へ贈呈するなど、次世代を担う子供たちとの繋がりを育むことにも繋がっている。



何より、この改修プロジェクトの根幹にあるのは、徹底した「住民参画型」の姿勢である。地域住民を対象とした詳細なアンケート調査を実施し、施設に対する期待や懸念、具体的な利用イメージといった生の声を集約している。これらの意見は単なる参考資料として留めるのではなく、実際の改修案やデザインの細部に至るまで再検討し、反映させるプロセスを繰り返している。自分たちの声が空間に形として現れるという実感が、住民にとっての「我が事感」を醸成し、施設完成後の持続的な運営に向けた土壌を築いているのである。

このように、伊加利地区での活動は、物理的な拠点の再生を媒介としながら、そこに暮らす人々の誇りを取り戻し、外からの新しい風を呼び込むための壮大な実験である。地域資源の有効活用、農業を通じた交流、そして住民との対話という多角的なアプローチを統合することで、伊加利地区が持つ本来の良さを再定義し、発信していく。プロジェクト福良で培われた経験は、今、伊加利という地で「地域の未来を自ら描き、作り上げる」という確かな形となって結実しつつあり、それは過疎に悩む多くの地方集落における希望のモデルケースとなる可能性を秘めている。

兵庫県北部地域の子ども達との笑顔いっぱいの交流

神戸大学児童文化研究会

1. 児童文化研究会とは

児童文化研究会（通称：どうけん）は、今年で創部 110 周年を迎える長い歴史を持つ教育ボランティア団体である。当団体のメンバーが一から企画や準備を行ったイベント活動や人形劇などを通して、子ども達に文化的に豊かな経験の場を提供し、その経験が「子ども達のより良い成長」を促すことを願いながら、一緒に楽しく交流することを目的として活動している。当団体で一番大きな活動は夏季休業期間に実施する豊岡市と香美町での活動である。50 年以上継続してきており、伝統ある大切な活動となっている。

2. 活動報告

今年度は、例年の香美町立長井小学校と豊岡市民プラザ（アイティ 7 階）での活動に加え、新たに豊陵保育園と豊岡地区コミュニティーセンター（とよおかコミュニティ 31）での活動を実施した。長井小学校では「音楽の世界」をテーマとして人形劇「自然のオーケストラ」や工作、縁日等を行った。縁日では音楽家の顔を描いたカードの神経衰弱や、身体を使ったリズムゲームなどを行い、心身ともに音楽に触れながら楽しんでもらうことができた。



豊岡市民プラザでは人形劇「グーチョキパーで何作ろう」と手遊び、縁日を行った。人形劇では「グーチョキパーで何作ろう」の手遊びを用いながらお話を展開していくことで、子供達にも参加してもらう形の人形劇をすることができた。縁日では、長井小学校よりも年齢層が低いことを考慮し、輪投げやワニワニパニックなどの分かりやすいルールのものを行った。人形劇を見た後そのまま縁日まで参加していただける観客の方が多く、親子で楽しんでもらうことができた。

豊陵保育園では人形劇「グーチョキパーで何作ろう」と手遊びを行った。初めて何う公演先であったが、快く受け入れてくださり、子ども達に普段とは違う経験をしてもらうことができた。

豊岡地区コミュニティーセンター（とよおかコミュニティ 31）では縁日と工作を行った。縁日や工作での風鈴作り体験を通して、子ども達に夏ならではの経験をもらうことができた。こちらも初めての訪問先であったが、豊岡市民プラザの方のご協力のもと各地区の子育てセンターに宣伝チラシを配布し、たくさんの方にお越しいただくことができた。



3. 今後の展望

今後も古くから続く伝統を大切にしながら豊岡での活動を継続していきたいと考えている。一方で、香美町では急激な少子化等を踏まえて多くの小学校が統合されており、長井小学校も令和7年度をもって閉校となり、令和8年度からは香住小学校に統合される。しかし、長年の長井地区との関わりを今後も持ち続けられるよう、来年度からは長井地区公民館の方のご協力の下で、長井地区在住の児童を対象に引き続き夏のイベントを行う予定である。また、豊岡市民プラザでの活動や、今年から新たに追加した豊陵保育園・豊岡地区コミュニティセンターでの活動も引き続き実施していく予定である。このように時代の変化に対応するべく少しずつ活動の形を変えながらではあるが、「子ども達のより良い成長」に寄与できる活動を今後も実施していきたい。

4. 最後に

この活動に賛同・支援していただいたことで、例年よりも活動の幅を広げて実施することができ、新たな子ども達との関係も築くことができました。神戸大学地域連携推進本部の皆様には厚くお礼申し上げます。

(文責：岡村 日菜乃)

行政と連携した天然記念物の保全と指定を目指すための調査・啓発活動

神戸大学保全生態学研究会

【発足の経緯】

近年、都市林は人間の生活域の拡大によって小面積化し、また外来の病害虫による被害、外来植物の繁茂などによる様々な問題が発生している。本団体は、都市住民に恩恵を与える都市林が抱える様々な問題を解決することをめざし、都市林の生態系を調査し、科学的データに基づいた管理計画を行政に提案するとともに、都市林を身近な自然として活用することを目ざして、2005年に発足した。

【活動のねらい】

遷移後期林は現在ではあまり見られず、またその地域の本来の植生を表す貴重な森林であることから、太山寺をはじめ天然記念物に指定されていることがある。今年度は、遷移後期林へと進行しつつある無動寺の寺有林において、具体的な管理方法の提案および必要な樹木の伐採や補植などの植生管理を行うことで天然記念物指定を目指すとともに、その貴重な植生環境を地域の方にも身近に感じてもらえるようイベントなどを行うことで、人と緑が共存できる持続可能な社会を、地域に根差した学生目線で実現することとした。

【活動内容】

今年度は、神戸市の関係部署の担当者らと、わたしたちの調査結果にもとづいた森林の管理方法について現地検討会を実施した。また、啓発活動として地域の子供を対象としたイベントを複数実施した。

神戸市西区 太山寺「森の探検隊」

無動寺の管理方法の検討にあたり、目標植生としている太山寺にて「森の探検隊」と称し、こども観察会を実施した。地域の子供たちを対象にし、林内で特定の特徴を持つ葉を集めていく葉っぱビンゴや、集めた葉で同じ種同士を当てる葉っぱ合わせなど複数のゲームを通して、直接自然に触れ、学べる場を提供することができた。中には、樹種の細かな違いに興味を持つ子もあり、自然環境への好奇心を促すきっかけにもなった。



右図：境内のモミジを観察する様子

左図：お堂で葉っぱ合わせゲームを行う様子

神戸市北区 無動寺「どんぐり採取イベント」

原生林を再生するために、無動寺でシイ・カシの堅果（どんぐり）を採取するイベントを実施した。地域の子供たちを対象に境内のどんぐりを集めて、持ち帰り育ててもらう。その後、発芽したものは春に森林内

に植樹する予定をしており、植樹環境の影響評価を行う事例としても考えている。



左図：どんぐりを探す様子
右図：持ち帰る竹筒

連携した団体：神戸市地域協働局、神戸市西区地域協働課、無動寺、太山寺

【今後の展望】

4月5日には神戸市地域協働局と連携し、六甲山の自然共生サイトにおいて無動寺で採取、育成した常緑樹の苗を植樹するイベントを行う。また、4月25日はこうべ森と木のプラットフォームが主催する「木のマルシェ」に出展し、子供向けの樹木ゲームを行うなど、来年度も引き続き社寺林の学術調査を行い、学術的知見を学童も交えた市民向に発信していく予定である。

地域の人々と学生の交流によって、 災害への理解と地域の繋がりを深める事業

神戸大学学生震災救援隊

当団体について

神戸大学学生震災救援隊は、1995年1月に発生した阪神淡路大震災を受けて、災害の復興支援と地域コミュニティの興隆を主な目的として活動を始めた。発足後は、全国各地の災害被害に対しても活動を展開していくとともに、被災者の方の様々なニーズに合わせて、三つの内部団体、灘チャレンジ実行委員会、灘地域活動センター、神大モダン・ドンチキを兼ねるようになる。令和7年度で結成から31年の時を迎え、現在も継続的な被災地支援・地域コミュニティの興隆に取り組んでいる。

今年度の活動

今年度の活動内容を紹介する（内部団体の活動については省略）。内、学生地域アクションプランの助成のもと行った活動（3）と（4）については目的、今後の展望についても記載した。

（1）能登派遣

令和6年能登半島地震の被害を受けた地域で復興支援活動を行なった。瓦礫の撤去・家財やごみの分別整理・家財修復・建物の清掃などハード面の支援が主な活動内容となった。令和7年度は合計7度現地を訪れ、当隊からは20人以上のメンバーが活動に参加した。



（2）東北派遣

東日本大震災の被災者の方が主に居住する宮城県山元町の桜塚住宅でサロン会を行なった。夏と冬にそれぞれ1回、合計2回現地を訪れ、住民さんとの交流を目的としたイベントの手伝い、開催を行なった。



（3）講演会

① 目的

本講演会は、地域の人々に震災の記憶や防災の知識を授けること、そして災害についての理解を深めてもらうことを目的として実施した。

② 内容

上野政志さん（神戸大学発達科学部在学中に阪神・淡路大震災の犠牲となられた上野志乃さんのお父様）を講師としてお招きし、講演会「生きてこそ～1.17を忘れない」を実施した。本講演会では、震災の記憶や生きることとは何か、といったテーマについてご講演頂いたのち、講演の参加者同士で意見交換を行うワークショップを実施した。ワークショップでは各々が講演会を聴いて感じたことを共有し、互いの災害に関する考えを深めあった。学生から社会人まで合計で30名ほどの方にご参加いただいた。

③ 今後の展望

本講演会は例年実施しているものであり、その有益性、そして災害の風化防止という観点から、来年度も開催される見込みが高い活動である。規模、開催場所などについては工夫の上、今後より多くの方々にご参加いただけるよう考える必要がある。

(4) シンポジウム及びパネル展示

① 目的

本イベントは、当隊の活動を紹介することを通して、災害支援の意義・目的、被災地の現状などについて学びを共有し、他の参加団体や一般の方と意見を交換した。その中で、我々の得た経験を伝えること、地域の様々な人が一堂に介して災害について語れる場を地域に提供することを目的とした。

② 内容

「神戸防災のつどい 2026」に参加し、シンポジウムへの登壇およびパネル展示での活動紹介を行った。シンポジウムでは、当隊の活動遍歴や活動目的、また、活動から得た学びや活動の難しさについて発表し、他ボランティア団体、一般の聴衆方々との意見交換を行った。パネル展示では当団体の活動について、参加団体の活動も含め詳細に紹介した。

③ 今後の展望

社会に向けて当団体の活動を紹介するため、来年度以降もこうした災害イベントに参加していくことが必要であると考えている。

音楽による社会包摂事業 神戸市内の発達支援施設に通う子どもたちにおくるナツオトコンサート

神戸大アートマネジメント研究会

当団体について

神戸大アートマネジメント研究会は、子どもたちに音楽を通じて感性や創造性を育む機会を提供することを目的に、年に1度、主に小学生を対象としたクラシックコンサートを開催しています。コンサートでは企画から広報、当日の運営まですべて学生が中心となっており、毎年異なるテーマを設定してアーティストを招聘しています。

アートマネジメント分野における地域連携の役割を果たすとともに、学生がアートマネジメントを実践的に学ぶ場ともなり、将来の音楽文化を支える人材を育むことも活動の目的となっています。

活動の背景とねらい

当団体はこれまで小学生を対象に普段接することのないクラシック音楽を中心に触れる機会を提供してきました。本コンサートは神戸市民文化振興財団が主催する神戸国際フルートコンクール関連事業「KOBE国際音楽祭 2025」内の一企画として、神戸市内の児童発達支援施設に通う子どもたちを対象に実施しました。以下の4つをコンセプトに掲げ、普段会場に足を運ぶことに困難さを感じているような子どもたちに機会を提供することを目的としました。

- ①障害の有無にかかわらず、あらゆる人が音楽を通じたコミュニケーションや交流を楽しめる
- ②音楽の楽しみ方の幅を広げるきっかけにしたい
- ③耳で聴くだけでなく、全身で音楽を体感する機会に
- ④奏者、観客、スタッフ間の垣根をなくし、全員がコンサートに参加している実感を得る

活動内容

日時：2025年7月19日（土）11時開演

場所：賀川記念館メモリアルホール（神戸市中央区）

演奏曲：クラシック、童謡、ラテン、ディズニー音楽、オリジナル曲

編成：打楽器、ピアノ、ファゴット、ソプラノ

実際の公演の様子

いくつかの曲目・コーナーの様子を紹介します。

①はじめに音楽家のみんなを紹介するよ！

それぞれ楽器に関するクイズを出題、子どもたちも積極的に答えていました。色々な答えが出てきて、奏者もそれぞれに反応し、距離感近めで和やかな雰囲気でした。おそらく聴き馴染みのないクラシック曲でしたが、みんなかなり集中して聴いてくれていました。オランピアのアリアではネジ巻き人形のメグちゃんが動かなくなりニナちゃんがネジを巻く演出があり、そこで子どもたちも「どうしたの？」と曲の世界に一気に入り込めたと思います。



④かき氷食べたーい！

オリジナル曲でMCがかき氷を食べるのに合わせて演奏しました。かき氷を食べる時によく起こる 頭がキーンとなる現象を音（フレクサトーン）で表現しました。かき氷の小道具も作り、兄妹（MC）2人の物語にリアルさを加えました。メロディを何度か繰り返すことで会場にいる人みんなでキーンとなるポーズをしました。このような音と出来事の結びつきが子どもたちの印象に残っていると嬉しいです。



⑤海水浴へ行こう

奏者やMCが浮き輪やサングラスを身につけて登場し、「アンダーザシー」を演奏しました。ここでは、サメやクラゲなどの海の仲間たちに出会い、最初は怖かったけれど、一緒に音楽でノリノリになって仲良くなる、というストーリーを仕立てました。MC以外の研究会メンバーも海の仲間たちとして出演し、お客さんも手拍子で参加するなど、曲の雰囲気合うにぎやかな演目となりました。



⑥キャンプファイヤーゲーム

フラットな会場空間を生かし、体を動かして音楽を体感できる参加型コーナーをいくつか実施しました。その一つとして、順番に好きな食べ物のポーズを取り、リズムに合わせてみんなでそのポーズをマネする、というゲームを行いました。観客と出演者・スタッフの垣根を超えた交流を目的とし、子どもたちだけでなく奏者やスタッフが加わって、全員で円になって進行了しました。

体を大きく使ってポーズする子、手で控えめにポーズをする子、少し恥ずかしくて隣の奏者さんと一緒にポーズをする子などが見られました。互いの個性を尊重し合う姿が見られ、会場全体が温かな雰囲気に包まれました。

活動の効果

開演前に「体を揺らしたり、歌ったりしてもよい」とアナウンスを行い、ポーズまねっこゲームでも自由な表現を認める声掛けをしたことで、子どもたちが安心して参加できる雰囲気をつくることができました。また、会場は客席と舞台の距離が近く、奏者やMCの問いかけに子どもたちが自然に反応するなど、垣根のない交流が実現できました。さらに、ポーズまねっこゲーム、ボディーパーカッション、盆踊りといった参加型ゲームを設け、聴くだけでなく、体全体で音楽を楽しめるプログラムを実施しました。その結果、普段は集中力が続かなくなったり、じっと座っているのが難しかったりする子も最後まで楽しむ姿が見られました。総じて、奏者・観客・スタッフが一体となり、音楽を通じた豊かな交流が実現した公演になったと考えています。

今後の展望

今回得られたコンサートの手法や、関係者とのつながりを大切に、規模を拡大しながら、より多くの人々の間に音楽による交流を生む活動に取り組んでいきたいです。

謝辞

コンサートを開催するにあたり、神戸市民文化振興財団様、賀川記念館様、出演いただいた奏者の皆様にも多大なご助言とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表します。

活動地域：神戸市

主な連携先：公益財団法人神戸市民文化振興財団、社会福祉法人イエス団賀川記念館

（文責：国際人間科学部 伊藤 ふたば 三宅 理紗）

UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動

地域交流機会創出の会「なごぶい」

【活動の経緯】

神戸大学の近隣にある UR 団地『グリーンヒルズ六甲』（以下、六甲団地）では、身寄りのない高齢者が近年増加し、社会的孤立や孤立死のリスクが懸念されている。そこで、本活動では前年度に引き続き、高齢者を中心とした団地住民が参加しやすいイベントを企画・実施することで、地域住民同士の交流や学生との多世代交流、または生涯教育を促進する機会を提供することを目指した。

【活動内容】

神戸大学片桐恵子教授の研究プロジェクトである「ワイがやプロジェクト」では、地域住民が交流を通じて緩やかなつながりを作ることを目指し、気軽に参加できるイベントを定期的に設けている。その一環として、2025 年 8 月 24 日に『まちの部活動（あったらいいなと思う活動）』を集めたイベントである「ワイがや文化祭」を開催した。このイベントは地域住民から構成される「ワイがやパートナー」が中心となって企画・運営が行われ、地域交流創出の会「なごぶい」はそのサポートを行った。その際、あったら良いと思う部活動を住民から募集したところ、多くの案が寄せられた。その中から発案者の住民の方を主体に「アート創作部」・「異文化交流部」が誕生し、活動がスタートした。

活動開始に伴い、この 2 つの部活動の認知度向上・活性化をサポートするため「ワイがや文化祭第 2 弾」を開催することにした。本イベントは部活動に参加するハードルを下げるために、部活動の体験ができるイベントとしてなごぶいが企画し、地域住民に声を掛けて始まった。住民と学生が準備や当日の運営を通じて関わることで新たな交流が生まれると共に、イベントとして大々的に告知・開催することで大勢の方に足を運んでいただけたと考えたからである。また、より多くの方に関心を持ってもらえるように両部活動のコーナーの他に、挽きたてのコーヒー豆を使用した「本格コーヒーコーナー」、インスタントコーヒーにトッピングができる「アレンジコーヒーコーナー」も設けた。本格コーヒーコーナーはコーヒーに精通している住民の方にバリスタ役としてコーヒーを淹れていただけないかお願いしたところ、快諾していただけた。また、アレンジコーヒーコーナーは参加者同士の会話を生み出すため、シナモンや山椒など一風変わったトッピングを用意して、学生主体で運営した。

イベントに先立ち、部活動の発起人の方々やバリスタ役の住民の方との打ち合わせを通して、部活動の活動目的や当日までの準備について話し合いを重ねた。各コーナーを企画する際は、発起人の方々と当日の内容やイベントへのイメージ、部活動の今後の展望を細かくすり合わせることで、住民の方の想いを反映したコーナーを作り上げていった。また、異文化交流部がターゲットとする住民に情報を届けるには日本語だけでなく英語のチラシも必要だと判断し、両方記載したチラシを作成し、告知を行った。以上の方針の下で、民生委員様・UR 様・地域住民様からご助言を頂戴しながらイベント内容を構成し、六甲団地全戸へのポスティングを行った。

2026 年 1 月 24 日「ワイがや文化祭第 2 弾」を六甲団地に開催した。気軽に立ち寄ってもらえるよう、予約不要・入退場自由の形式を採った。来場者数は 37 名に上り、未就学児から 90 代まで幅広い年齢層の方に参加していただいたことで、多世代交流の場となった。アート創作部のコーナーでは、カラ

神戸大学学生団体「なごぶい」

第2弾

ワイがや文化祭

2026年1月24日(土) 13:00-15:00

@グリーンヒルズ六甲団地 集会所
@Green Hills Rokko Community Center

申し込み不要
No registration required
参加無料!
Free participation!

本格コーヒーコーナー / Coffee Section
挽きたての豆で淹れる本格的なコーヒーだけでなく、色んなトッピングでアレンジコーヒーも楽しめます!
Besides the authentic coffee using fresh beans, you can enjoy arranging with various topping!

アート創作 / Craft Art
カラフルな色紙を使って、ペーパークイリングを作っちゃおう!
ハート型にすると、バレンタインの飾り付けにも使えます!
Let's make "Paper Quilling" - craft art with colorful papers.
It's perfect for a decoration of the Valentine's Day!

異文化交流 / Talking Session
外国の方と楽しくおしゃべりませんか?
地域のおすすめ情報、ぜひ教えてください!
Do you wanna join a casual talk session?
Let's share some local information with us!

詳細は裏面へ→

神戸大学 なごぶい UR 都市機構 RISTEX

ワイがやプロジェクト

高齢者の孤立、孤独の一次予防として、地域住民のつながりや安心感の醸成を目的とし、地域イベントや生涯学習の機会を提供する地域介入型アクション・リサーチです。

フルな画用紙を用いてペーパークイリングを作成した。バレンタインを連想させるハート型のオブジェを見本として準備していたが、参加者は自由な発想でそれぞれの作品を仕上げていた。異文化交流部のコーナーでは、数か月前に日本に移住してきた外国籍の家族を中心にする形で、団地生活での困りごとの相談や日本の社会問題について議論を深めていた。



イベントの様子

本格コーヒーコーナーでは、バリスタ役の住民と学生が共同でコーヒーを淹れ、参加者に提供した。豆を2種類用意していたことから飲み比べている参加者も多く、風味の違いを楽しんでいた。アレンジコーヒーコーナーでは風変わりなトッピングに驚きながらも、他の参加者や学生との会話を楽しみながら、色々なアレンジを楽しむ様子が見受けられた。

【イベントへの評価】

気軽に参加・入退場自由という形式にそぐわないため、アンケートは実施しなかったが、大勢の参加者が最後まで残り、イベント終了時間間際になっても活気は下火になることはなく大盛況のまま幕を閉じた。ある参加者からは「楽しい時間を過ごせて、ここへ来るときよりも足取りが軽くなりました。」という声も聞くことができた。言語によるコミュニケーションだけでなく、一緒に作品を作る・一緒にコーヒーを飲みアレンジを楽しむといった体験の共有を通じて、年齢・国籍も関係ない、楽しい多世代交流が実現した。このような場において住民同士が交流し互いに顔見知りになることは、緩やかなつながりが形成されるきっかけとなり、社会的孤立・孤独のリスクを緩和させることが期待される。加えて、本イベントでは『まちの部活動』コーナーを通じて、地域活動の広報や新たな活動の発起人の活動意欲を後押しできたと考える。このような働きかけによって、住民自身が地域でのつながりを継続的に増やすきっかけになることを期待したい。

【今後の展望】

今後も六甲団地の住民の交流を促進するイベントを考案・実施し、地域の緩やかなつながりの形成に努めていきたい。具体的には『まちの部活動』を引き続き後押ししていくことで、住民主体で継続的に住民同士が交流できるような仕組み作りとその定着に取り組むと共に、参加者層の拡大も図っていきたい。その際に、住民の方々からイベントの実施の理解が得られるよう、引き続き六甲団地内の住民団体等と連携の強化を進めていきたい。

「第23回 灘・夢ナリエ」あかりワークショップ活動

< TEAM NADA >

■背景：

「灘・夢ナリエ」は、神戸市灘区の地域住民主体の盆踊りイベントであり、学生組織「神戸大学 <TEAM NADA>」は、2023年、2024年に本助成「学生地域アクションプラン」を受け、その企画・運営の一端に参画を続けている。

■経緯：

2025年4月28日に灘区地域活動支援コーディネーターの坂本友里恵氏（mottif lab）、土井戸砂絵子氏・坂本智香氏（灘区役所総務部地域協働課）より協力要請を受けて、本学修士課程1年生を中心に学生組織「神戸大学 <TEAM NADA>」が再結成された。要請の内容は、1）「あかりワークショップ」ブース出店、2）簡便で安価かつ安全な櫓（やぐら）の企画立案製作とイベント空間全体の演出、これらに加えて、本年は3）盆踊り開始前などの時間を過ごす場の準備という三点である。1）2）3）を連動させた企画提案を、<TEAM NADA>内で検討し、ワークショップの企画・会場インスタレーション、櫓、休憩用「畳ベンチ」などのデザインが進められた。

■ワークショップの企画と準備：

インスタレーションとして、木製「フレーム」を多数用意し、その一つのフレーム内側に子供達が描画着色した紙製の行燈を展示し、危険とならない高さまでフレームを積み上げて結束バンドで固定し、電池式LEDライトで照らす、という企画が進められた。櫓は昨年同様に、これらの木製フレームを組み合わせることで積み上げることとし、本年度は櫓頂部にキャンティレバー状の提灯揭示部を設けることとした。今回初めて導入する「畳ベンチ」も木製フレームを活用して制作するものとした。昨年度に引き続き、木材などの調達や構造的安定性に関する技術的助言、作業場所と工具の提供は、株式会社戎工務店（神戸市灘区岩屋中町1-2-6）および木材加工販売 SHARE WOODS（神戸市灘区王子町1-4-8）に、全面的にご協力いただいた。「畳ベンチ」制作については、地元の畳店である奥井畳店（神戸市灘区桜口町2-3-21-1F）に技術指導も含め、全面的にご協力いただいた。戎工務店の戎健太郎氏、戎武志氏、奥井畳店の奥井啓太氏には実際の作業にもご助力いただいた。櫓作成のための追加の木製フレーム30個（試作込）と土台の製作は、8月29日から19日の期間に計10日間行った。同時期に、別のメンバーは、行燈用の紙（画用紙）に「折り目」をつける作業を行いなど、各種の準備を行なった。灘区役所の土井戸氏、坂本氏に作業進捗状況などを逐次報告し、「灘・夢ナリエ実行委員会」とのメールなどの協議を重ねながら、作業を進めた。

■ワークショップ：

当日9月21日は11：00頃よりフレーム、櫓用に緊結したフレームおよび土台、ならびに畳ベンチの搬入を開始し、イベント開始の15：00までには、櫓・土台・畳ベンチを含む製作物すべての設置を完了した。本年は、作業中に灘区民でもある久元喜造神戸市長の訪問を受けている。明るいうちは、赤・白・緑・生成りの4色に彩られた背の高い櫓は、子供たちにとって目を惹く「広告塔」の役割を果たし、<TEAM NADA>スタッフによる「あかりワークショップ」出店ブースへと、子供たち（とその親・保護者）をスムーズに誘導することができた。また、フレームのグリッド構成を



写真1 灘区民である神戸市長との記念写真

活用した畳ベンチは、来場者の滞在場所として活用された。行燈を作った後は、子供たちと一緒に、フレーム内に展示を行った。このことで、暗くなった際に「自分の作品」が光の中で浮かび上がるイメージを子供たちと共有することができ、実際に、多くの子供たち（とその親・保護者）が再び櫓を訪れ、作品を確認する様子が見られた。盆踊り開始時には、子供たちの作品に彩られた櫓を中心に踊りの輪が生まれ、会場全体の一体感が高まった。盆踊りの中心を子供たちと共に創出するという空間演出は有効であった。以上の活動をパワーポイントにまとめ、2026年3月3日（火）に灘区役所において開催された「令和7年度地域連携事業活動報告会」にて報告し、好評を博した。

■今後の展望：

この「神戸大学のお膝下」で展開・発展する地域住民主体の稀有なイベントへの関与をさらに深め、より実効的なエリアマネージメントへと深化する学生の参画方法を考えていきたい。



図1 準備及びワークショップの様子

（文責：工学研究科建築学専攻 吉川 日々輝）

（指導教員 工学研究科建築学専攻 教授 槻橋 修）

小学生への睡眠と運動に関する啓発活動

ぐっすり運動ラボ

1. ぐっすり運動ラボとは

神戸大学医学部保健学科、大学院保健学研究科の学生を中心に活動しており、今年度から「ぐっすり運動ラボ」として活動している。小学生を対象に「睡眠と運動に関するアンケート調査」を実施し、個別フィードバックを行っている。また、小学生や保護者を対象にお話の会を実施している。



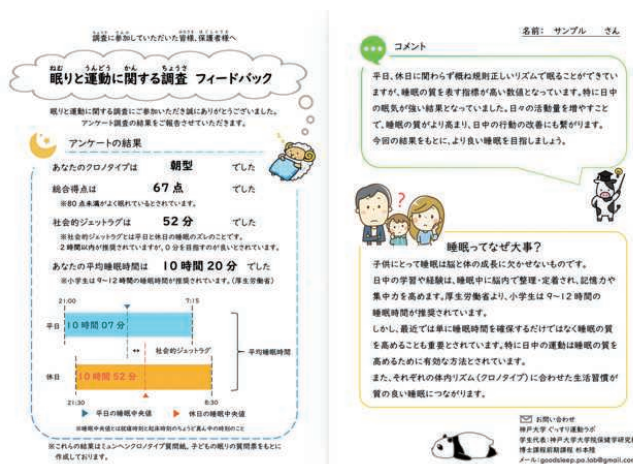
2. 活動の背景

睡眠は心身機能を維持するために必要であり、発達や疲労回復、記憶の定着などは特に子どもにおいて重要である。睡眠が重要だと認識する方が多くいる一方で、日本の若年者において睡眠時間の減少、睡眠の質の低下が問題視されている。特に神経発達症を抱える児童においては遺伝的な特性や日中の活動に依存して睡眠の質が低下しやすいとされており、その結果日中の学業や社会的交流に影響を及ぼすとされている。睡眠を改善する方法の一つに、運動や日々の活動があり本活動により睡眠への理解を深め、自身の睡眠について児をサポートする家族も含め、見直す機会をつくることを目的としている。

3. 今年度の活動

(1) 睡眠と運動に関するアンケート調査の実施

神戸大学附属特別支援学校、神戸市立灘さくら支援学校の児童を対象に実施した。また希望者には睡眠を客観的に評価することができる活動量計を配布し、より詳細な睡眠評価を実施した。調査実施後には個別フィードバックを作成した。



個別フィードバック用紙

(2) 保護者会での睡眠と運動に関する情報提供

神戸大学附属特別支援学校の保護者会にて、睡眠と運動に関する情報提供を行なった。個別フィードバックの結果の見方や近年の傾向についてお話しした。保護者が子どもの生活習慣を捉え直す機会となり、家庭での関わりを見直すきっかけづくりに繋がったと考えられる。



保護者会での情報提供

(3) 小学生向けのお話の会

落合児童館の小学生を対象に睡眠と運動に関するお話の会を実施した。お話の会では日頃の睡眠を振り返ったり、クイズを行ったりしながら啓発活動を行なった。またぐっすり眠るための体操を指導し、楽しみながら取り組める構成とした。



日頃の睡眠の振り返り



ぐっすり眠るための体操指導

(4) リーフレットの作成

睡眠と運動に関する正しい知識の普及を目的としてリーフレットを作成した。児童向けと保護者向けの2種類を作成し、それぞれに応じた内容とした。日常生活で実践しやすいポイントを分かりやすく整理し配布することで、生活習慣の見直しや意識向上につながる資料とした。



2種類のリーフレット

4. 今後の展望

今年度は特別支援学校の児童35名へのアンケート調査、地域の小学生20名を対象としたお話しの会、保護者会での情報提供を通して、児童および保護者が睡眠と運動習慣について振り返る機会を提供することができた。特にアンケート結果に基づく個別フィードバックについては「こどもの睡眠について知ることができて嬉しい」「結果を見るのが楽しみ」などの肯定的な意見をいただき、生活習慣への関心を高める取り組みとなった。一方で、参加人数が限られていた点は課題であり、より多くの児童にアプローチしたいと考えている。また、小学生だけでなく幼児を対象とした取り組みを行って欲しいという声もいただいた。今後は継続的な調査の実施に加え、学校との連携を強化、対象地域や年齢層を拡大しながら、より多くの児童を対象とした調査および啓発活動を進めていきたいと考えている。

(文責：学生代表 保健学研究科 杉本 陸)

灘駅周辺集合住宅の地域住民と学生の交流のきっかけとなる 地域に根ざしたお菓子作りやゲームを行うイベント

灘地域活動センター

はじめに

灘地域活動センター（以下 NAC と省略）は、阪神・淡路大震災によって明らかになった地域コミュニティの重要性の認識に立脚し、とりわけ孤立し易い傾向にある高齢者を中心とする地域住民との交流を通じ、学生自らもその一員として地域コミュニティ形成に寄与することを目的として結成された。現在は、県営岩屋北町住宅及び HAT 神戸の 2 つの集会所を主な活動拠点とし、定期的なお茶会と不定期に自治会の行事の手伝いを行っている。

活動内容

今年度の活動の中で、令和 7 年度学生地域アクションプランの助成対象となった活動について紹介する。

(1)お菓子作りやゲームを行うイベント

①目的

神戸市灘区に居住する住民（主に高齢者）と学生間の交流の場を創出し、住民が孤立しがちな環境を改善することが通常活動の目的である。しかし、従来の通常活動のみでは新規の住民や学生が増加しにくい現状がある。改善策として、お菓子作りやゲームなどの催し物を導入して活動に新規性を持たせ、新たな住民と学生を獲得することが本事業の狙いである。加えて、これらの新たな刺激となる活動を高齢者にも体験してもらうことで、健康維持や促進につなげるねらいもある。

②内容

現在行っている毎週の通常活動（市販の茶菓子とお茶を住民に提供し交流を図る活動）に加え、新たにお菓子作り（焼き菓子、和菓子など）やゲーム（トランプなど）を実施する内容となっている。お菓子作りにおいては、住民と学生が協働で行う形式をとっている。

下記に各月ごとの事業内容を紹介する。



4 月 いちご大福	求肥なども一から作成し、住民と一緒に餡を包む作業を行った。共同作業を行うことで従来とは異なったコミュニケーションの取り方ができることを確認した。
5 月 焼き菓子（アイシング含む）	上記と同様に一緒に作業ができるようにセットしたが、アイシングにはあまり積極的ではなかった。住民は比較的単純な作業のほうが参加しやすいのではないかと推測される。
6 月 たこ焼き	事前にアナウンスをしていた影響か、何人かの住民がたこ焼きに入れる食材を持ち寄ってくれた。この活動に対する協力的な姿勢は、ポスターによる宣伝活動が大きな意義を果たしている証左である。しかし、集会所の電力のキャパシティが想定より小さかったために、たこ焼きを焼いている最中にブレーカーが落ちてしまったことは反省点として挙げられる。活動のコンセプトとしては素晴らしいものだったが、活動場所の状況を適切に把握する契機にもなった。

7月 餡みつ	前回の反省もあり、電気を使わず比較的簡単に仕上げるができる餡みつをメニューとした。当活動では、従来考えられなかった子供を含む家族連れが新規として参加する機会になった。彼らによれば、掲示板のピラを見て参加したとのことであるため、宣伝効果は一定程度存在すると言える。ただ、これ以降継続して参加することはなかったため、活動自体の初期段階における印象形成は今後の改善点として挙げられる。
8月 わらび餅	安価かつ比較的容易に作成できた。参加者に高齢者が多いためわらび餅を細かく刻んだところ、食感に欠けるとの指摘も受けたが、黒糖ときなこを活用し臨機応変なバリエーションを展開できた。
9月 みたらし団子	オーブンやレンジが壊れていたため、コンロと鍋で簡単にできるお菓子を提供した。住民の要望により和菓子系統とした。
10月 ワッフル	救援隊内の別セクションである灘チャレンジにて、今年度の学生による模擬店でワッフルを提供していたため参考にした。調理工程をほとんど同じにしたため、スムーズな作業プロセスと一定のクオリティは実現できた。しかし、面倒な作業を挟まなかったせいか住民との関わりが減少するという、本来の目的から逸脱してしまった点は大いに反省すべきである。効率性と交流の均衡点を模索していかなければならない。
11月 モンブラン	ワッフルでの反省を活かし、学生なりに均衡点を模索した。今回はモンブランのペースト自体は前日に佐伯が自宅が必要となる分だけ調理し、当日はペーストを絞りで土台に飾り付ける作業が主になるようにプランニングした。飾り付け自体は比較的単純な作業のため、興味を持ってくれた一部の住民と一緒に仕上げてくれ、学生が作業している様子も一緒に見守ってくれた。最適解とは言えないかもしれないが、今後のお菓子作りの基準として良いと考える。
12月 チーズケーキ& クッキー	クリスマス会で住民に提供するお菓子を製作した。今回は1回生が主導して、企画から実施まで行った。これまでは、ほとんど特定の上回生のみでアイデアを出していたが、それでは活動の継続性が見込めないため下級生に任せることとした。チーズケーキに使用するタルト生地は事前に完成形を購入し、クリームやトッピングを当日に準備した。焼く工程が必要なお菓子作りの場合は、やはり事前に購入もしくは準備するのが得策であると考えた。
1月 ぜんざい	前回に続いて、下級生が主導して企画をした。住民が和菓子類を好む傾向がある点と全員分をまとめてつくることができる点からぜんざいを採用した。抹茶粉を白玉粉と混ぜるだけで、色彩豊かなぜんざいを提供できた。こういった工夫でバリエーションを出すことができるお菓子は、今後もアイデアとして採用していくべきである。
2月 チョコレート ラスク	活動日がバレンタイン当日だったこともあり、チョコレートでコーティングしたラスクを提供した。ラスクは市販のパウムクーヘンを1cm幅に切り、集会所にあるオーブンを使って製作した。無印良品が公式HPで掲載しているレシピをチョココーティングでアレンジしたが、学生が想定していたようなラスクにはならなかった。試作をしてから本番に臨む大切さを、今年度最後の事業で改めて感じた。

③展望

今年度申請した事業は、お菓子作りを定期開催するという初めての試みだった。最大の目的であったコンテンツの充実化と交流の活性化は果たされたと考える。しかし、毎回お菓子作りの内容を変更するため、本番の段取りの不明瞭さや材料費の不安定さといった改善点も見受けられた。

終わりに

弊団体は2025年3月に神戸市から地域貢献賞をいただく節目を迎えた。また、団体設立のきっかけである阪神淡路大震災からも昨年で30年が経った。設立当初とは社会の構造も文化も変遷してきているが、集合住宅でコミュニティが少なく孤立しがちな高齢者はいまだ存在することは確かである。その方々の地域との交流を維持するためにも、我々の活動は続けていく意義がある。これからも活動場所の自治体と協力しながら、地域コミュニティの形成に寄与できるように、充実した活動と学生の活力を前面に押し出していく所存である。

(文責：代表 佐伯 海斗)

全国各地の被災地での支援活動

神戸大学学生震災救援隊

1. 活動の目的と背景

2024 年（令和 6 年）1 月に発生した能登半島地震は、各地に甚大な被害をもたらしました。阪神・淡路大震災を経験した神戸に拠点を置く「神戸大学学生震災救援隊」として、被災地の復旧・復興に寄与すべく、本年度、大学からの助成金を活用した災害支援活動を実施いたしました。

2. 活動概要

活動期間：2025 年度（計 7 回実施）

活動地域：石川県七尾市、珠洲市、輪島市

参加人数：延べ 20 名以上（本団体所属学生）

受け入れ団体：おらっちゃ七尾、
被災地 NGO 協働センター

3. 具体的な活動内容

現地では、被災された方々の生活再建の第一歩となるよう、被災者のニーズに応えることを中心に活動しました。主な内容は以下の通りです。

- ① 家財の分別整理・搬出：倒壊、あるいは浸水被害を受けた家屋から、生活用品の取り出しと仕分けを行いました。
- ② 家財の修理：可能な範囲で家具や建具の応急処置を行い、被災者の生活継続をサポートしました。
- ③ ゴミの分別・瓦礫の撤去：災害ゴミの指定場所への運搬や、敷地内に散乱した瓦礫の撤去を行いました。
- ④ 家屋の清掃：泥の掻き出しや床板の清掃など、公的な支援だけでは行き届かない細かなニーズに対応しました。

4. 活動の成果と今後の展望

今回の活動を通じ、被災地の厳しい現状を肌で感じるとともに、外部からの継続的な支援の重要性を再認識しました。「おらっちゃ七尾」や「被災地 NGO 協働センター」といった専門組織との連携により、学生として適切な役割を果たすことができたと考えています。

今後も神戸大学学生震災救援隊は、被災地のニーズに寄り添い、神戸で培われた震災の教訓を次世代へ繋ぐべく、活動を継続して参ります。



（文責：代表 シャムス 晴皐）

灘チャレンジ2025

灘チャレンジ実行委員会

【灘チャレンジ概要】

灘チャレンジは阪神淡路大震災が発生した当時に神戸大学の学生が地域に対して実施していたボランティア活動などの取り組みの1つで、震災の復興祭として1995年6月4日に第1回が開催されたのを出発として、毎年学生が主体となって地域の方々と共に創り上げる祭りであり、今回で30周年を迎えた。

【令和7年度活動内容】

令和7年度の灘チャレンジ（以下、灘チャレンジ2025）は9月14日に都賀川公園と灘区民ホールにて開催した。灘チャレンジ2025は「つながる心、灘の未来へ」をスローガンとし、灘の良さを発信するとともに、世代間の交流を促すようなお祭りを目指した。

灘チャレンジ2025では、ステージ企画や模擬店、展示企画などで学生や地域の方々が一致団結してお祭りを盛り上げた。また、今年度も昨年に引き続きパレード企画を実施した。お祭りの一週間前に、学童保育所の職員の方々と子どもたちと共にお祭り会場の周辺を練り歩き、お祭りの広報を行った。

これら魅力的な企画により多くの方々に来場していただき、地域団体と住民の交流を促すことができた。

【地域とのつながり】

灘チャレンジ2025の実施においては、灘区を中心とした計72店舗に協賛いただいたほか、17の企業から協賛品を提供していただいた。また、模擬店出店していただいた19団体やその他地域の方々とは、開催までの期間に協議を重ねるなど、地域とのつながりを構築・強化する取り組みを行っている。



ステージの様子



パレードの様子



模擬店の様子

（文責：委員長 清水 佑真）

農業ボランティア及び黒枝豆の生産販売

神戸大学地域密着型サークルにしき恋

1、概要

地域密着型サークルにしき恋は、主に神戸大学生で構成されたサークルであり、2013年に神戸大学農学部での授業である実践農学入門を前身として立ち上げられた。主に兵庫県丹波篠山市西紀南地区において農業ボランティア活動や丹波黒大豆の栽培及び販売等を行っている。2025年度3月時点で135名が在籍している。農地での実地の学び篠山と都市をつなぐことを目標として活動している。

2、活動報告

2025年度は農業ボランティアの活動を中心に、拠点の最寄り駅である無人駅の丹波大山駅の活性化を目的としたオオヤマルシェの開催や地域の小学生と交流するイベントの開催、にしき恋のメンバーが中学校に行きスクールアシスタントを行った。また地域の小学生との交流するイベントは夏に行い両方10名以上の小学生に参加してもらうことができた。毎年夏と冬に行っていたが、今年の冬は大雪のため中止となった。また地域の祭りの参加など地域の方との交流の場を持つことができた。総参加回数としては一回の活動への参加を一回とすると1058回であり農業ボランティアに絞ると858回であった。（※2025/4/1～2026/3/12）

また、丹波篠山市の魅力発信のために、丹波篠山市の名産である黒枝豆の生産及び販売を行った。黒枝豆の収穫期である10月はオンライン・学内の販売に加えて新大阪マルシェ及び神戸大学のホームカミングデーなどにおいて販売を行った。黒豆期の収穫と販売期である12月ではオンラインと学内での販売を行った。また今年も昨年に続き地域の方に協力を受けてきな粉に加工して販売することができた。今年も去年に続き神戸大学のサークルが開催している灘チャレンジに出店して丹波篠山の名産である黒豆からつくったきな粉を用いて揚げパンを販売した。

3、展望

今年度はコロナの影響もだいぶ少なくなり活動に関してほぼほぼ制限がなくなったといえる。そのためコロナ期間ではかなり薄れてきた地域との交流または活動を停止していたにしき恋の活動を再開することができた。地域へのかかわりを深く戻すことができるようにまたさらなる地域への貢献ができるように努力していきたい。



小児糖尿病サマーキャンプ 2025

兵庫県小児糖尿病サマーキャンプボランティア／CNF

1. 概要

私たちは、県内の1型糖尿病を持つ小中学生を対象とした、兵庫県糖尿病協会の主催するサマーキャンプで、キャンプ中のイベント運営や子供たちのサポートをしている。このキャンプは、レクリエーションを通して仲間を作る一方で、インスリン自己注射や血糖自己測定といった技術・知識を身につけることを目的とする。1型糖尿病は現在の医療では完治しないとされているが、インスリンを用いた血糖値の自己管理により、それまでと変わらない食生活や運動を行うことができる。

2. 活動報告

本年度サマーキャンプは南但馬自然学校にて4泊5日の日程で開催された。また、その2週間前には神戸市内で事前の交流会を行った。キャンプには小学生16人、中学生11人が参加し、神戸大学からは19名がボランティアとして参加した。医療スタッフや武庫川女子大学の学生、過去にキャンプに参加していたOBOGのみなさんと協力しながら活動した。学生ボランティアは、運動会・キャンプファイヤー・肝試しの3班に分かれてイベントを企画・運営し、かるたや劇などの工夫を凝らした勉強会も行った。これらの準備は、月に一度のミーティングで、話し合いを重ねながら進められた。また、各ボランティアには2人1組で担当キャンパーがあてられ、血糖測定やインスリン注射の見守りをはじめ、5日間をともに過ごした。



3. 活動の効果

キャンプ最終日に実施したアンケートでは、参加した小中学生のほとんどから、来年も参加したいかという問いに対し、肯定的な回答が得られた。「去年より理解できるようになった」という声も複数寄せられ、毎年継続して開催している本キャンプの意義が非常に感じられる結果となった。また、これから医療者となる医療系学生ボランティアにとっても、病気を抱える子供たちの、病院外における日常を知ることは、今後医療者として活動していく中での大きな糧になると考える。

4. 今後の展望

キャンプに参加する小中学生から、先述の通り感想が寄せられたほか、他に参加してみたいイベントや、キャンプの中の改善点についても様々な意見が上がった。本キャンプは1型糖尿病についての学習や実践、そして仲間作りと、大きく2つの柱を抱えており、そのバランスを巡って学生ボランティアや医療スタッフ間でも毎年様々な意見が上がる。今後も、キャンパーにとっての最善を試行錯誤しながら、よりよいキャンプの実現へと取り組んでいきたい。

（文責：田中 千聖）

灘駅周辺の集合住宅で 高齢者はじめ地域の方々と学生の交流の場としてのお茶会活動

灘地域活動センター

1. 活動の目的と背景

阪神淡路大震災の復興時、災害復興公営住宅で行われたサロン活動をきっかけとする活動団体です。現在は灘駅周辺の集合住宅で、主に高齢者の孤立防止を目的とした地域住民と学生の交流を行う場所を提供する目的としています。昨年度で以前利用していた灘区の助成金が終了したため、当助成金を活用した背景もあります。

2. 活動概要

活動期間：2025 年度（計 39 回）

活動地域：岩屋北町集合住宅、HAT 神戸灘の浜

参加人数：1 回につき、学生 10 名程度・住民 25 ～ 30 名

受け入れ団体：なぎさ地域福祉センター、岩屋北町集合住宅自治会

3. 具体的な活動内容

地域住民にお茶菓子を提供し、学生と一緒に卓について世間話などをする。カラオケの歌詞カードを用意した日は、みんなで和気あいあいと歌を歌うなどの活動も行われる。

- ・お茶菓子の提供
- ・住民からの相談の解決（スマホ操作や目覚まし時計の修理等）

4. 活動の成果と今後の展望

本年度の活動でも、地域住民の交流の場所を無事提供できた。設立からまもなく 30 年を迎えようとしているが、地域住民からの求められるという存在意義を活動のたびに感じている。参加数も平均で 25 ～ 30 人を維持できている。弊団体以外にも HAT 神戸では自治会の活動があるが、なかなか踏み込むことができない住民も依然存在する。別事業で新規参加者獲得を試みているが、やはり今来ている人たちを第一に考えるのが重要に違いない。そういった人々が必要としてくれている限り、我々はこの活動を続けていくべきだと考えている。



（文責：共同代表 佐伯 海斗）

灘区と東灘区を中心とした神戸市内の地域において、 未就園児から小学生を対象に現地学習やイベントを実施し、 社会的・文化的経験の場を提供する活動

神戸大学児童文化研究会

1. 概要

当団体は児童文化の健全な発展を願い、未就園児から小学生を対象とした現地学習や季節のイベント、神戸市内での人形劇公演などの活動を行っており、2025年度3月現在で36名の学生が在籍している。本年度は今回賜った助成金を活用し、計3回の現地学習を実施したほか、市内各地で人形劇の公演を行うことができた。助成金は主に、イベントや人形劇における制作費、現地学習に参加する学生の交通費等に充てさせていただいた。これらの支援により、子どもたちに交流や学びの機会を提供することができた。

2. 本年度活動報告

本年度は、現地学習を3回実施した。6月にはバンドー神戸青少年科学館を訪れ、様々な体験型展示を通して科学に親しむことができた。10月には鶴田農園で芋ほり体験を行い、自然や食に触れながら学ぶ機会となった。2月には神戸市立ポートアイランドスポーツセンターでスケート体験を実施した。また、春の子ども大会やクリスマス会などの季節のイベントも実施し、それぞれのテーマに沿った工作やゲームなどの活動を通して子ども同士の交流の場をつくることができた。さらに、イベント内や住之江児童館・生田川児童館などで、人形劇公演を年間4回実施した。学生が脚本作成や人形制作を行い、乳幼児や小学生を対象とした公演を行った。子どもたちが劇の世界観に触れながら楽しむ様子が見られ、想像力や感性を育む場となった。これらの活動には、各回約20名、延べ150名を超える子どもたちが参加した。特に本年度は、地域に密着した農園と連携した活動を実施することができた。地域の方々と直接関わりながら活動を行うことで、子どもたちにとっても地域に触れ、つながりを深める貴重な機会となった。

3. 今後の展望

来年度もこれまで築いてきた地域とのつながりを大切にしつつ、神戸市内での活動実績を増やし、より多くの子どもたちに豊かな体験の機会を届けていきたい。また、来年度は大学体育館で例年より規模を拡大したイベントを行うなど、地域に根ざした継続的な活動としていっそう発展させていくことを目指している。

謝辞

本助成により、子どもたちに多様な社会的・文化的経験の場を提供することができました。神戸大学地域連携推進本部の皆さまには厚く御礼申し上げます。



（文責：幹事長 国際人間科学部 若狭 ころろ）

合唱文化の普及および演奏を通じた神戸の地域交流支援活動

神戸大学混声合唱団アポロン

神戸大学混声合唱団アポロンとは

1948年の設立以来、神戸大学公認の混声合唱団として75年以上活動を続けています。「合唱芸術の追求と普及」を活動の目的に掲げ、団員自らが文化的感性を涵養するだけでなく、演奏による感動やメッセージを聴衆と共有することも大切にしています。日頃から真摯に合唱と向き合う成果として、2025年10月には第78回全日本合唱コンクール関西支部大会大学職場一般部門にて金賞をいただきました。また、地域のイベントや依頼演奏などにも参加し、幅広い層に対して合唱を届け、大学合唱文化の維持継承と発展に努めるほか、合唱を通して震災や防災に想いを馳せるきっかけづくりも行っています。

2025年度の活動報告

○神戸大学入学式学歌演奏 (2025/4/4)

混声合唱団エルデ、グリークラブと、新入生の門出を祝す学歌の演奏を行いました。

○灘区コーラスフェスティバル (2025/9/28)

阪神・淡路大震災で被害が大きかった灘区にある合唱団が集まって演奏することで、灘区の皆さんに元気を届け、想いを馳せるきっかけにする目的があります。

○神戸マラソンスタートセレモニー ～しあわせ運べるように生合唱～ (2025/11/16)

「しあわせ運べるように」を演奏し、ランナーや沿道応援、ボランティアの方々と震災復興への想いを共有しました。

○兵庫県高等学校総合文化祭合唱部門演奏会ゲスト演奏 (2025/11/24)

県内37校の高校生や保護者の方々の前で演奏し、大学合唱文化の魅力を伝える機会となりました。

○神戸市老眼大学依頼演奏 (2026/2/9)

近年継続してご依頼いただいております、約2000人の皆様の前で合唱の魅力を伝える講義として2公演の演奏を行いました。

○PRAY FROM KOBE 2026 ～明日につなげるコンサート～ メインコンサート (2026/1/18)・街頭コンサート (2026/3/6)

兵庫県合唱連盟主催の復興支援のためのコンサートにて、毎年演奏を行っています。

○「ともしび」音源制作 (2026/3/19)

阪神・淡路大震災から30年の節目に、神戸市立鷹匠中学校のみなさんと神戸大学の卒業生でシンガーソングライターの石田裕之さんが制作された混声3部合唱曲「ともしび」の、パートごとの練習音源の作成を弊団が担当しました。

今後の展望

これまでの活動に加え、地域の人と合唱を楽しみ、音楽の力で新しい出逢いや交流を生み出すことを目的として、「アポロン、街に出る」という企画を予定しています。



学生による手話に関する情報発信・手話通訳ボランティア

手話サークルぺんぺん草

1. ペンぺん草について

当サークルは、神戸大学に聴覚障がいのある学生が入学したことをきっかけに、その友人たちの協力のもと設立された。設立当初は、身近な友人とのコミュニケーションをより円滑にしたいという思いが出発点であったが、現在ではその活動は学内外へと広がっている。

現在は、「まずは自分たちが手話を楽しく学ぶこと」をモットーに掲げ、手話の学習活動に取り組んでいる。そのうえで、手話に関する情報発信活動や、地域・大学関連行事での手話通訳ボランティアなどを行っている。楽しみながら学び、学びながら発信するという循環を大切に、手話をより身近なものとして感じてもらえるよう活動を続けている。

2. 背景と目的

聴覚障がいのある方にとって、手話は非常に重要なコミュニケーション手段の一つである。しかし、手話を学ぶ機会はまだ限られており、社会全体での認知度向上が課題となっている。

本事業の目的は、手話に関する情報発信や手話通訳ボランティアを通じて、手話の魅力や重要性を発信することである。また、実際に手話通訳を行うことで、聴覚障がいのある方々が円滑に情報へアクセスできる環境を支援することを目指している。

3. 事業内容

情報発信

手話に関する情報発信活動として、六甲祭や名谷祭での手話歌の発表や展示を行った。手話歌は、比較的簡単な表現が多く、歌と合わせて楽しむことができるため、手話を知らない人にも関心を持ってもらいやすい。視覚的にも分かりやすく、初めて手話に触れる人にとっての入り口として人気がある活動である。

今年度は、雨天の影響により六甲祭の屋外ステージでの発表は中止となったが、室内で実施することができた。今後も、学内行事に限らず、さまざまな場面で情報発信活動を展開していきたいと考えている。

手話通訳ボランティア

今年度に行った（あるいは今後行う予定の）手話通訳ボランティアは以下の通りである。

- ・ なた桜まつりでの手話通訳
- ・ 灘チャレンジ地元委員会および本番での手話通訳
- ・ 神戸医療産業都市一般公開での手話通訳
- ・ 神戸大学令和7年度学位記授与式での手話通訳

特に、神戸医療産業都市一般公開での手話通訳は、医療や研究に関する専門的な用語が多く、非常に難度の高い活動であった。本サークルの手話力向上の必要性を改めて感じる機会ともなった。

一方で、大学を通じて連絡をいただき、地域のろう者に貢献できたことは、大きなやりがいにつながった。行事を通して、情報保障の重要性を実感するとともに、通訳者としての責任の重さも学ぶことができた。今後は、より高度な内容にも対応できるよう、継続的な学習と実践を重ね、手話通訳を担う人材の育成に力を入れていきたい。

4. 今後の展望

今後は、灘手話の会や LIC、デフサポートかもめなどを通じて、実際にろう者と交流し、ニーズに対する理解度をあげていく。また、手話に関する情報発信の取り組みとして学内のキャンパスライフ支援センターとの協力や他大学のサークルとの取り組みを進めたい。



（文責：新谷 勇輝）

神戸、東北での語り継ぎおよび能登半島地震復興支援ボランティア事業

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

令和7年度は特に令和6年能登半島地震の復興支援ボランティアに尽力した1年であった。4月、6月10月、12月の合計4回の現地活動をおこなった。現地活動は七尾市の「民間災害ボランティアおらっちゃ七尾」に受け入れてもらい活動をした。主な活動内容は4月、6月、10月は解体予定の家屋の家財運び出しや引っ越し手伝い、12月はソフト系支援として仮設住宅でのお茶会を開催した。七尾市は家屋の被害が多く、解体の作業が多く残っていた。時間が経つごとに家屋が解体されて空き地になる場所が多くなっていったことが印象に残っている。12月に実施したソフト系のボランティアは、学生メンバーにとって初めてのお茶会の挑戦であったが、住民さんが喜んでくださったことがうれしかった。作業系のボランティアは少しずつ需要が減っていくと予想されますが、仮設住宅や復興住宅といった今までのつながりが損なわれてしまった立場の人にとってつながりを作るきっかけとなるソフト系支援は重要だと思うので、今後も取り組み続けようと思う。

神戸での活動は、今までに引き続き慰霊祭や地蔵盆、餅つきといった地域行事に参加しつつ住民さんとの信頼関係を築くことができた。等団体に新たにメンバーが加入したため、長田の町で学んだことを引き継いで伝える一環で街歩きなどの活動も行った。神戸での学びや住民さんとの信頼関係を今後もつなげていきたいと思う。

今年度の東北での活動は『第11回全国被災地語り部シンポジウム』への参加が大きな活動であった。東北大学 SCRUM や東北学院大学の学生との交流ができた。同じ世代で語り継ぎに挑戦している学生とのつながりも大切にしたい。2年前から続けていた浪板太神楽も今年度は実現できなかったが、今後も引き続き交流をしていきたい。



「環境かるた」食品ロス ver. を用いた小学生への出前授業第三弾

環境サークルえこふる

1. 環境サークルえこふるとは

2019 年度に環境学入門講座を受講した学生有志が立ち上げたサークルである。神戸大生や地域の人々の環境意識を高めるために多方面からの啓発活動に取り組んでいる。2025 年度は環境月間ポスター作成、後述する児童館での出前授業の実施、並びに「環境カルタ」海洋プラスチックごみ ver. の作成他を実施した。

2. 活動概要—食品ロスに関する出前授業—

前年度に引き続き、自作の食品ロスにまつわる「環境かるた」を用いながら、食品ロス問題をテーマに、地球温暖化と関連付けながら学ぶ出前授業を行った。食品ロスに関する実際の取組について子ども達がより身近に感じられるよう「おやさいクレヨン」（mizuiro 株式会社が企画・製造）を紹介し、実際に使用した。また「環境かるた」は、読み札が問題文になっており、子どもたちがかかるたを楽しみながら授業内容のアウトプットをできる工夫を行っている。授業後はアンケートを実施した。

(1) 活動実績

- 7/28 於 住之江児童館
- 10/15 於 河原児童館
- 11/11 於 六甲サイレンスリゾート
(共催：六甲山の子会)
- 1/24 於 本庄児童館



出前授業風景（於住之江児童館）

(2) 事業の効果

出前授業実施後に行ったアンケートでは、「食品ロスのことがよくわかった」、「地球温暖化と食品ロスが繋がっていることがわかった」、「食品ロスという言葉を初めて知った」等の感想が得られた。このことから、講義資料を含め、クイズ形式のかるたという媒体を用いることによって、食品ロス問題という小学生にとってはやや難解に感じられる内容であっても、食品ロスがどういう問題であるのかや、削減のための具体的な行動、さらに地球温暖化問題との関連性を伝えられたと言える。



出前授業風景（於本庄児童館）

3. 今後の展望

今年度に引き続き、児童館と調整の上、食品ロスに関する出前授業を実施する。また、今年度は新たに「環境かるた」海洋プラスチックごみ ver. の制作をした。海洋プラスチック汚染問題をテーマに、身の回りのものの多くがプラスチックでできていること、プラスチックごみが海洋生物に与える影響、解決のために普段の行動でできることをクイズにしている。来年度以降は児童館の協力を得てこのかるたを試行し、必要に応じて修正・改善していく。その後、講義資料の作成を含む出前授業の計画・実行に移ることを計画している。



「環境かるた」
海洋プラスチックごみ ver.

(文責：小城戸 愉子・栗山 結衣)

みんなのまち健康プロジェクト

Kobe Med Connect

1. 活動の目的・背景

私たちは、2024年に発生した能登半島地震の災害ボランティアに参加したことを契機に、医学生3人で活動を開始した。自らの現場での学びのみに留まらず、医学とボランティア、地域活動を結び付け、地域社会に学生を含めた人と人とのつながりを作り出すことを目的とし、活動を続けている。特に、医学生として専門知識を学ぶ私たちだからこそできる活動を模索・実行し、地域社会への貢献を目指している。

2. 本年度活動内容

本年度は地域に暮らす外国人住民に焦点を当てて活動を行った。まず神戸市長田区のPHD協会を訪問し、留学生を中心とした日本在住の外国人への食糧支援のボランティアをこれまでに計3回行った。その際、外国人住民の食生活や睡眠の傾向、防災への関心といった内容のアンケート調査を実施した。さらに会話する中で、出身国や来日の目的、現在困っていることなどについても話を聞くことができた。また、長田区で阪神・淡路大震災以前から現在まで形を変えながら外国人住民支援活動を続けておられる方を訪問し、震災当時から現在の外国人住民の取り巻く環境や抱える課題についてお話を伺った。

さらに1月には、神戸市長田区日吉町で行われた阪神・淡路大震災から31年の慰霊祭および新長田駅前で行われた催しにボランティアとして参加した。実行委員の方々や当日初めて出会った他のボランティアの方々と協力しながら、慰霊祭では炊き出しの提供を行い、新長田駅前では灯籠づくりの活動に参加した。

また、地域の防災に関するセミナーにも参加した。このセミナーでは、これまでの私たちの活動を発信するとともに、地域の方々と防災に関する取り組みについて意見交換を行った。



3. 活動の効果

まず、地域にどのような外国人住民が暮らしているのかを学ぶきっかけになった。また、外国人留学生のコミュニティが同国出身者同士で完結しており、他の学生や地域との接点を求めている実態を知ることができた。

阪神・淡路大震災の慰霊祭でのボランティア活動は2年目ということもあり、前年よりも率先して行動することができ、地域の方々との関係を深めることができたと感じている。防災セミナーでは、同世代でボランティア活動を行っている人々と意見交換を行えたほか、地域の方々の生の声や実際の被災経験を伺うことで、災害について私たち自身が深く考える機会となった。

4. 今後の展望

今年度の活動で学んだ外国人住民の暮らしや課題に対し、次年度以降は実際に介入する活動を行っていききたい。具体的には、留学生の健康課題の解決を支援したり、日本人と外国人が交流できる場を作ったりしたいと考えている。また、災害に関するボランティア活動を通して、地域の方々との関係をさらに深めるとともに、活動内容を積極的に発信し、外国人住民への理解や防災意識の向上につなげていきたい。

令和 7 年度
神戸大学地域連携活動報告書

令和 8 年 7 月発行

発 行 神戸大学地域連携推進本部

連絡先 〒 657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

Tel:078-803-5391 Fax:078-803-5389

Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印 刷 服部プロセス株式会社
